特276
66

始

特276
66

旋風時代

四十貫太郎著

旋風時代

第一卷

656-178

裝幀　田中咄哉州

一

明治四年三月のことであつた。明治は翌五年に太陽暦を採用して、其の十二月三日を六年の正月元旦としたので、此の四年三月は太陰暦の四年三月であつた。

其の三月はじめの某日、芝愛宕下の華族外山具慶の邸では、主人の具慶が八幡屋と云ふ衣肆の支配人を己の室へ通してゐた。其處は十疊位敷いた古い室であるが、元諸侯の邸宅であつたのを手に入れたもので、柱から天井、欄間の彫刻にも豪奢な生活の痕がしのばれた。其の天井は猿手金唐革で貼つてあつた。床柱は紫檀であつた。其の紫檀の床柱の上には文明開化を象徴したやうな八角時計が時を刻んでゐた。時計の短針は一時のところにあつた。床には長吉の觀瀑圖の双幅を懸けて、其の前の青銅の花瓶には藤の枝を挿してあつた。

「書面を見たにしては、あまり早い、使が往き著かないうちに、何か他の用件でもあつて、來たのではないか、」

「いえ、お使をいただきましたから、さつそく飛けつけてまゐりました、人力車は、案外、早いものでございます、」

「ほう、人力車で、人力車でまゐつたか、人力車はそんなに早いものか、喃、」

「辻籠よりは、よつぽど早うございます、へい、」

金屏風を後にして黒紋附の羽織に白綾の遠菱の紋のある小袖を著た、六十前後に見える小肥滿のした主人に對して、支配人は白い小さな髷ののつかつた頭を習慣的にしよつちうぴよこぴよこさげてゐた。

「さやうか、わしも、人力車にしようか、喃、わしは、昔から習慣で、馬に乘らん時は、籠にするが、籠は當世

むきぢやない、いつそ馬車にしようかとも思ふが、馬車は諸生參議どもが乘りをるで、」
「さやうでございます、大久保樣も、木戸樣も、私のぞんじてをります方は、大隈樣も、たしかお馬車のやうでございますが、」
「さやう、とびあがり者の諸生參議は、たいてい馬車ぢや、」
「さやうでございます、文明開化のありがたい御世になつてまゐりましたから、乘物も日さきのかはつた、佳いものが出來てまゐります、私どもの商賣でも、やつぱり新らしい、日さきのかはつたものを、こしらへようこしらへようと、皆で競爭してをりますから、」
「さやうなうてはならんことぢや、昔からありきたりの物品を、いつまでも賣つてをるやうでは、だいち、店が繁昌せん、新柄を工夫して、商賣をはげんでゆくのも、天朝への御奉公の一つぢや、」
支配人はおやと思つた。天朝だの勤王だのと云ふ詞の下から、時をり臺所の御用をおほせつけられてゐるのであつた。
「御意にございます、」
「ところでぢや、今日、わしが使をやつたのは、御奉公をおろそかにした、いやおろそかと一口に云へろやうな、そんな生やさしいことではないのぢや、」
支配人ははつと思つた。支配人は額に横皺の多い黄ろな顔をあげた。其の支配人の目の前には、見なれてゐるがいつ見ても鬼魅のわるい脂肪の多かりさうな蒼黑い顔があつた。白髮の交つた毛を總髮にして後に撫でつけた額のばかに寬い顔が、これも白髮のある毛の長い眉と大きな鼻を見せた下に、禁光のする鼠のやうな大きな口が

あつて、右の手で持ちそへた金張の煙管をくはへてゐた。
「どんな不調法がございましたのでございませう、」
支配人はまたびよつこりと頭をさげた。
「それは容易ならんことぢや、もしもこれが表むきになると、主翁八幡屋善右衛門の首にもかかはることぢや、」
八幡屋は用度司の出入を許されてゐた。一部の公卿と隣長の權勢家の怒に觸れたがために、奇禍に逢ふ者のあるのを知つてゐる支配人は顫へあがつた。
「そ、それは、どんな不調法でございませう、それは、」
支配人はもう具慶の行爲に皮肉な眼をむける餘裕がなかつた。
「それはたいへんなことぢや、困つたことをしてくれた、痛、」
「は、」
「前月、用度司へ納めた夜の物ぢや、」
「彼のお蒲團が、どうかなりましたのでございませうか、」
具慶の大きく結んでゐた口が、ぱくりと音でもしさうに開いた。
「縫針が、二本、入つてをつたのぢや、」
「え、縫針が、」
「さやう、縫針が二本入つてをつたのぢや、」
「それは、」

「恐れ多い失態ぢや、」

用度司から夜の物調製の命を受けると、室は固より職人にも身を清めさして、仕事をはじめる時には、それぞれ己の手から針と糸を渡し、仕事を措く時には、一いち又それを受け取つてゐるので、針などの入つてゐるはずはなかつた。支配人は日限に遅れないやうにと調製した物品を、主人とともに納めに往つた日のことを思ひだした。四人舁の舁輿二臺へ乗せた物品の上に、唐草模様の著いた大風呂敷をかけ、、、、、、を入つたところで門鍵をさげてもらひ、、、、から、、へ往つて、厚い欅板で張つた廊下を通り、、、の前も過ぎて學廊下にかかつたところで、ちよつとした室があつて通りがかりに見ると、大さびの立烏帽子に志志良の白綾の直衣を着た氣品のある人が座つてゐたので、何人であらうかと思つて用度司の人に聞くと、あれが德大寺大納言だと教へられてゐるのであつた。支配人は事が大きいので習慣的に體を取りあつかふことができなかつた。支配人の頭は其の時はさがらなかつた。

「私の方では、御用命にあづかりますと、平生のやうに神職をたのんで、表座敷へ注連縄を張つてもらひまして、職人には水垢離を取らし、口から鼻へは白い布をかけまして、それで四人の職人に、毎日私が、それぞれ針と糸を渡しまして、仕事を措けば、また其の針と糸を、一いち受け取るやうにして、不調法のないやうに、ないやうにと、念のうへにも念を入れて、しあげましたもので、また、納めます時には、主人と二人でまゐりましたから、」

具慶は眼をつむるやうにして煙管を口にやつてゐた。

「それは、たいへんなことになりました、」しかし、かうなつては針の有無を云つたところで何にもならなかつた。

苦勞人の支配人は、此のうへは家の浮沈に關する一大事件を、そつと收める方法を講ずるより他に途がないと忌つた。「今となりましては、いかに申しひらきをいたしましたところで、それは、もう、後の祭と申すものでございます、此のうへは、お詫びをするより他に、途がないと思ひます、」

蟇の口から煙管が除れて、それが前の淺巴孤弦の灰ふきにかちりと音をたてた。

「さやう、お詫びをするより他に途がない、唷、」

「つきましては、御贔屓にあまえるやうで、なんとも、はや、申しわけがございませんが、かうなりましては、おかみにおすがりするより他に、おすがりする方がございません、どうかおかみのお力で、」

「そこぢや、八幡屋は、祖父の卿の時からの出入で、わしの代になつては、勤王の彼の騒ぎで、手許不如意な際には、無理を頼んだこともあるから、なんとかしてやりたいが、事が事ぢやで、唷、」

二

支配人は額を疊の上にすりつけて遣ひつくばふやうにしてゐた。

「誠に、なんとも、はや、申しわけがございませんが、かう申しあげましては、御恩になれすぎるとお叱りもございませうが、長い間、御贔屓くだされてをります八幡屋を、其の御贔屓ついでと申しましては、恐れ多い儀でございまするが、そこのところを、」

「それは、判つてをる、判つてをるが、他のことでないから、唷、」と、ちよつと切つてから、「わしも、それで心配してをるのぢや、」

「は、」
「とにかく、困つたことになつたものぢや、が、ただ一つ此のことは、まだ表むきにならずに、萬里小路卿の許にあると云ふことが、手段によつては、どうにかなりはせぬかと云ふことが、一縷の望みのあると云ふものぢや、」
「は、」
「それに、わしが、昔から八幡屋を贔屓にしてをることも、萬里小路卿が知つてをられ、用度司へ周旋したのも、わしぢやと云ふところから、萬里小路卿が知らして來たと云ふものぢや、」
具慶はさう云つて左の明障子のあるはうへ眼をやつた。其處には紫檀の書架があつて、三段になつた其の棚には、中の段と下の段に古い表紙の書物だの袋物だのを置き、上の段には半切や唐紙の卷いたものといつしよに、古い尺牘のやうなものをごたごたと置いてあつた。萬里小路卿から來た尺牘も其の中にあると云ふ意がこもつてゐた。
「誠に、なんとも、はや、申しわけがございませんが、どうかおかみから、萬里小路様に、お取りなしを願ひます、」
「萬里小路卿は、親しい關係ぢやから、わしが手をつくしてお詫びをするなら、むげに、わしの面目を潰すやうなこともあるまいと思はれるが、周圍にをる者が煩さうて、哺、」
「御意にござります、」
「事あれかしに待つてをつて、なんでも啄を入れて、一理窟こねんと承知ができんと云ふ、諸生參議がをるで

哺、」
「御意にござります、」
「なかでも、大久保市藏と、大隈八太郎と來たら、いやはや、始末にわるうて、哺、」思ひだしたやうにして、それに、それに大納言の岩倉卿と來ては、一すぢ縄ではいかん物品ぢや、」
「御意にござります、」
「そこでぢや、これを内密にするには、つい知れてもかまはんやうに、口どめ料が相當にいると云ふものぢや、」
「それは、もう、金のことはなんでござりますから、どうか何分お詫びのできますやうに、」
「わしも浪人してをるから、身金を切つて取りなしてやることもできんが、」
具慶は平公卿で維新前には青蓮院宮に出入し、維新後は薩長の勢力に攀援してゐたが、東京へ移つてからは何もしてゐなかつた。京都に本店を持つてゐる八幡屋の支配人は、鷹匠邸へ太政官の置かれた時、征東軍の肩章にする錦の用命を受けて出頭してみると、鎮守の社の拜殿のやうに荒ごもを敷いた室へ經机を並べて集まつてゐた、初めて衣冠を着けて羇屈さうにしてゐる各藩の有志に交つた公卿のなかに、具慶のゐたことを思ひだした。
「お金ですみますことなら、八幡屋の曖昧にはかへられません、私主人がなんと申しましても、私が一存でお願ひいたします、」
「よろしい、其の詞を聞くなら、引きうけてつかはす、ただし、事が事であるから、千や二千の金ではいかんが、承知か、」
「お受けいたしました、どうかお取りなしをお願ひいたします、」

具慶は勢ひよく吹殼を灰ふきにはたいた。
「委細承知、」
「それでは、一度店へ歸つて出なほしてまゐりますから、」
支配人が歸らうとすると、具慶は手を打つて人を呼んだ。入道頭の赧い地に白いさかやきの延びた老人の顏が襖の間から出た。家令の栗田であつた。
「此の者が歸ると申すから、送つてつかはせ、」
「は、」
栗田が脊の高い黑い袴をはいた體をつつましく運んで、支配人を送り出して往くと具慶は蒼黑い顏ににんまりと笑つた。其處には大きな鼻がのんびりとぶらさがつてゐた。具慶はひどく心の滿足を感じてゐた。具慶は無意識に煙管を持つて淡巴菰を詰めて喫んだ。喫んでゐるうちに便通を催して來たので、起つて一方の障子を開けて緣側へ出た。緣の前には葉になつた梅の枝があつて微陽が射してゐた。
便所は緣側の突きあたりにあつた。具慶は用をたして室へ引返し、障子を後手にしめたところで、支配人と栗田の出て往つた方の襖が開いて壯い女が顏を見せた。侍女のお多喜が室の後始末をしに來たところであつた。
「ごめんあそばせ、」
「多喜か、持つて往くがよいぞ、」
「は、」
お多喜は中へ入つて手にしてゐる盆へ、まづ客の茶碗と菓子皿を執り、それから主人の前のものを執つて乘せ

た。具慶は其のお多喜に眼を注けた。
「多喜、今日は久しぶりに、象棋を敎へてつかはさうか、」
「は、」
お多喜は蒲團の上へ座らうとした主人の方をちらと見て、心もち下顎の出た口もとに莞とした。其のはづみに白く透きとほつた前齒が二三枚見えた。
「それでは、すぐ象棋盤を持つてまゐれ、」
お多喜は急いで出て往つた。具慶は其の後をぢろりと見送つたが、女の姿が見えなくなつても顏を其のままにしてうつとりとしてゐた。と、襖がまた開いて栗田が顏を出した。具慶はちよつとどぎまぎして顏をなほして咸嗽をつくらつた。
「栗田か、八幡屋はもう歸つたか、」
「は、何か急ぐことでもございましたか、あわてて、乘つて來た人力車で歸りました、四人がかりの人力車でございましたから、早うございませう、」
「さやうか、」
「は、それから、おかみに面會したいと申す者がまゐりましたが、」
「また、浪人ぢやないか、」
「長い奴をさした、廻岡の者だと申してをりますが、」
「いかん、いかん、また、薩長の惡口であらう、もう時勢が過ぎた、浪人の役にたつのは次の時勢ぢや、今は金

のある奴ぢや、金のない奴を對手にする時ぢやない、病氣ぢやと云うておつかへせ、」
「承知いたしました、」
粟田が引込まうとするところへ、お多喜が象棋盤を捧げるやうにして持つて來た。
「來たか、來たか、久しぶりに負かしてつかはすぞ、」
お多喜は返事を微笑にかへて象棋盤をおろした。象棋盤の上には子の入つた箱があつた。
「わしは、今度、珍しい手を發明したぞ、對では、もうそちは勝てんぞ、」
「は、」
「片馬おろしてつかはさうか、喃、」
「おろしていただきます、」
「急にいぢめてもかあいさうぢや、まあ、對でいかう、」
「それでも、」
「まあ、よい、」
二人は子を並べた。
「さあ、まゐるぞ、」

三

具慶の醉とともに双方の子が動きだしたが、使はれてゐる者は使つてゐる者におもねる子の遣ひかたをしなくてはならなかつた。しかし、此の使つてゐる人の心は象棋になかつた。象棋はある段階に達するまでの手すさびにすぎなかつた。具慶は「さう來たか、」「しからば、かうまゐるぞ、」「それはわしの手ぬかりぢや、」などと云ふやうな詞を挾んでゐたが、何時の間にか默つてしまつた。默つてしまつたのはもう象棋をやる必要がなくなつたからだ。
「そちの手には、何がある、」
具慶は筋書を運ぶ必要上、棋客の何人もが口にする詞を口にした。
「金が一枚と、桂が二枚、あとは歩でございます、」
「さやうか、金が一枚と桂が二枚と、」具慶はさう云つて己の手にした子を見て、「勝つたぞ、王手とまゐるぞ、よいか、」
お多喜は返事のかはりに微笑を見せた。
「どうぢや、勝つてもよいか、」
「どうぞ、」
「それでも氣の毒ぢや、すこし、わしの肩を揉みながら、良い手を考へては、どうぢや、」
「は、」
主人の詞に黙してすこしの躊躇もできないやうに習慣づけられてゐるお多喜であつた。お多喜は手にしてゐた子をおいて起つた。
「八重は、何をいたしてをるのぢや、」

「お八重様は、清元のお師匠さんがまゐりましたから、お室でございます、」
「さやうか、」
お多喜はふと、おかみはお八重様に氣を配つてゐるのではあるまいかと思つた。さう思ふと二人きりでなれなれしくしてゐるのがうしろめたかつた。それにしよつちう己を見はつてゐるやうな女の擧動が氣になつた。お多喜はこはごは具慶の後へ立つて肩を揉まうとしたが、ほんとに揉んでよいのか叩くのかそれが判らないのでおづおづ聞いた。
「あ、の、お叩き、申しませうか、お揉み申しませうか、」
「揉んでもらはうか、唄、」
「は、」
お多喜は具慶の兩肩へそれぞれ細そりした指をかけて揉んだ。
「お多喜は、幾歳であつたか、唄、」
「十八でございます、」
「ほう、十八か、」と云つてちよつと詞を切つてから、「十八になれば、女子は、もう大人ぢや、」
お多喜は後にゐるので微笑をもつて顧へることができなかつた。お多喜はなんとか云つて返事をしなければならないと思つたが、其の返事が見つからなかつた。かうして思ひわづらつてゐるお多喜の左の手首へねつとりした指がからみついた。具慶の右の手であつた。お多喜ははつと思つて體がふるへたが、聲をたてることもできなければ、揮り拂つて逃げることもできなかつた。お多喜は侍女として絶對の服從を強ひられてゐた。お多喜はは

らはらしながら其の方へ眼をやつた。其處には斜に後を見あげた具慶の蒼黑い顏があつたが、其の眼には蛇の眼を思はすやうなぬめりがあつた。
「どうぢや、」
お多喜の手首にからみついてゐた具慶の手に力が加はつて、それがために自由を失つたお多喜の體は、具慶の左の肩さきに觸れながら其の膝の上へ倒れかかつた。お多喜は具慶に抱きすくめられたのであつた。
「ご、ご、めんあそばせ、」
お多喜は具慶の手から脫けやうとしたが、脫けることができなかつた。
「そんなに、こはがるものぢやない、」
鬼魅わるい皮膚のほてりがお多喜の片頰に來た。お多喜は呼吸ができないほど恐ろしかつた。お多喜は夢中になつて體をもがいた。文金の高島田の元結がはじけた。
其の時襖が音もなくすうと開いて、そうつと入つて來た者があつた。恐れでもがいてゐるお多喜は元よりのことであつたが、具慶にもそれがわからなかつた。
「なにを、なされるのでございます、」
具慶は驚いて顏をあげた。濃艶な顏に怒を帶びた三十左右に見える年增の美女が立つてゐた。
「そちか、」
「そちかではございませんよ、ほんとに、」
お多喜を押へつけてゐた具慶の手がゆるんだ。お多喜はやつと跳ねおきることができた。

「油斷もすきもあれやしない、兒の癖に、づうづうしいつたら、」
女はいきなりお多喜をつきとばした。女は病弱な夫人の地位を奪つてゐる侍女頭のお八重であつた。お多喜は緋い袋をほらほらと亂して出入口の方へ往つて膝を突いた。お八重はそれを追つかけて往つた。
「そんなに、八重、」
具慶の詞は絹をさくやうに甲ばしつた聲に押し潰された。
「だめでございますよ、こんな奴、わたしが赦しませんよ、」お八重の手はお多喜の襟元にかかつた。「ふざけた眞似をしやがつて、此方へお出で、」
お多喜は主人の愛をたのんでわがままいつぱいに振舞つてゐる氣性の激しい暴君を恐れないではないが、己としてはすこしもやましいところがなかつたので動かなかつた。
「何處までづうづうしい奴だらう、お出でつたらお出で、」
お八重は二三度こづきまはしておいて力いつぱいに引きたてた。痩弱いお多喜の體は引きずられた。お多喜はたちあがらずにはゐられなかつた。お多喜はよろよろと起つてお八重に引きたてられて歩いた。二人の足音はどたどたと鳴つた。
「なにを、なされるのです、」小さくはあるが響の強い聲が八重の邪慾にほてつてゐる鼓膜を打つた。羊のやうに從順な女もあくまで踏みにじられてはゐなかつた。彼は自由な人間性を見てゐるのではないが、それでも僅な衣食を給するがために、何の顧慮するところもなく、己を踏みにじらうとした對手をせめないで、踏みにじられやうとした己をせめるとは不合理にもほどがあると思つた。「わたくしが何をいたしました、」

「わたくしが何をした、己のしたことがわからないの、」お八重はお多喜の襟元をつかんだ手にまた力を入れてこづきまはした。「此のあま、」
立矢の字に結んだお多喜の金茶色の帶がゆれた。お多喜は其の返事を眼にあらはしてぢつとお八重の顏を見た。
「お出で、」
お八重はさも憎さうに云つて引きたてた。お多喜はどこへでも往つてやれと云ふやうにしてどんどん歩いた。
「此方へお出で、」お八重は何時の間にか左側になつた室の襖を開けてゐた。「此方だよ、」
お多喜の前へ往かうとしてゐる體は左にねぢ曲げられた。
「なにを、ぐ、づ、ぐづするのだ、」
お多喜の體は室の中へ流れこんだ。流れこんだ拍子に爪さきが浮いてよろよろとなつて倒れてしまつた。
「さあ、動けるなら動いてみるがいい、兒の癖に、ふざけた眞似をしやがつて、どうするかみろ、」

四

三十女の力にはかなはなかつた。お多喜はふり放すことができないので、お八重のするがまゝになつてゐた。お八重はまたこづきまはした。
「わたしの目をかすめやがつて、油斷もすきもあれやしない、おかみもおかみだ、」お八重はちよつと怒を具慶へ移したが、「だが、汝がそばへ往つて、じやらじやらするからだ、」

お八重は毒どくしい性情を赤裸裸にあらはしてゐた。
「わたくしは何も悪いことをした覚えはございません、わたくしが何をしたのでございます、」
「何をした、この横道漢」
お八重の拳は二つ三つお多喜の頭へ往つた。と、毛配がしてお多喜の襟元にやつてゐた手は、はじかれるやうに強い力に押しのけられた。
「あんまり手あらなことを、しなさるものぢやねえ、」
歯ぎれの良い壯い男の聲がした。お八重は機をくつてよろよろとした拍子に體が眞直になつた。眉の濃い面長な壯佼が其處に立つてゐた。表と奥の間をあちこちして用使をしてゐる小厮の龍吉であつた。小柄な鰹脊な此の壯佼は、諸生のやうに頭を散斬にして、ちんちくりんの薩摩飛白の袷へ兵兒帶をしめてゐた。お八重は物の數に入れてゐない小厮から、ほとんど突きとばされるやうな目にあはされたのでいきりたつた。
「何をするのだ生意氣な、此處は、汝なんかの來る處ぢやないよ、」
龍吉は叱りつけられて癪にさはつたが、主人の寵姫と云ふことを知つてゐるので、朋輩に黙するやうにはできなかつた。
「あんまり酷いから來たのです、云ふことがあれや、きれいに云つたらいいぢやありませんか、ぶつたり、なぐつたり、あんまり酷いぢやねえか、」
「何が酷い、汝なんかの知つたことぢやない、酷いことをするには、するだけのわけがある、汝なんかが口を出す處ぢやないよ、」

龍吉の両頬には血がのぼつて、それが龍吉をばかに佳い男に見せた。
「口を出す處ぢやないかも知らねえが、あんまり酷いことはしないがいいでせう、可哀さうぢやありませんか、こんなおとなしい人を、」
「いやに肩をお持ちだが、此の子は汝の何かかい、彼方へお往き、」
「往きます、わつしは何も好んで、こんな處へ來たくはねえが、此の人が可哀さうだから來たのですよ、」と云つて、死んだ人のやうにして下を向いてゐるお多喜を見おろして、「汝さんは何をしたかは知らないが、悪いことがあつたら、あやまつといて、彼方へ往くがいいでせう、此處で酷い目にあはされるにもあたらない、」
「お默り、お默りつてば、お前なんかのやうな、はつぱ野郎の知つたことぢやない、すつこんでろ、」
頭から龍吉を叱りつけておいて、見るともなしに入口の方へやつたお八重の眼に、襖の引手に沿うて此方を覗いてゐる數多な眼が見えた。お八重は朋輩の侍女達にはしたない容を見られたくなかつた。かうしたはしたない容を邸内の者に知られることは、將來の利害に大きな關係があるのであつた。お八重の複雑な心が其處に動いた。お八重はまづかつたと思ふとともに、己を此處にいたらしめたお多喜がまた新しく憎くなつた。お多喜が憎くなるとともに意地ぎたない具慶にも其の憎しみが往つた。
「ほんとに厭な奴ばかりだ、」
お八重はそのまま室を出て往つた。廊下の人影はそれと見て散らばつた。お八重は廊下を引返して具慶の室へ入つた。其處には具慶が象棋盤を其のままにしてすまして淡巴菰を喫んでゐた。お八重は襖をぴたりとしめるなりづかづかと其の前へ往つて、何も云はずに鼻と鼻とが觸れあふやうにして座つた。

「如何いたした、」
具慶はにやりと笑つて見せたが、お八重は返事もしなければ瞼の筋肉一つ動かさなかつた。
「如何いたした、そちは何か思ひちがひをしてをりはせんか、」
お八重はそれでも黙つてゐた。
「そちは、思ひちがひをしてをるぞ、彼の兒にも可哀さうではないか、」
お八重の口が其の時開いた。
「あんなづうづうしい奴、何が可哀さうでございます、わたくしを踏みつけにした奴でございます、」
「何を踏みつけにいたしたのぢや、」
「そんなことおつしやつて、おとぼけになつても、だめでございますわ、」と具慶の顏を見かへして、「おかみが、彼の子に眼をつけてゐらつしやることは、とうに、わたくし、ぞんじてをりますわ、」
「そんなことがあるものか、退屈であつたから、あれをからかつてをつたところではないか、」
「そんな兒だましのやうなことで、わたくしがだまされるとお思ひになりまして、」と嘲けるやうに云つて「何處までも、おかみが、わたくしを無いものにして、たれにもかれにも、そんなことを遊ばすなら、わたしにも考へがございます、」
「どんな考へぢや、」
「それは、今申しませんが、わたくしは、おかみに捨てられるやうなことがございましたら、生きてはをりません、其のかはりに、わたくしはきつと讐を討ちます、」

欠

「いいよ、濱、」

七

龍吉はもう障子を締めてずんずんと歩いた。龍吉はきまりわるい思ひを早く消したいのであつた。かつての判らない奥の室を通り脱けて廊下へ出たところで、むかふから侍女の一人が來て擦れちがつた。それはお若といふ女であつた。お若は笑つた。

「龍吉さん、お芽でたう、」

龍吉はこいつ乃公がお八重にへこまされたのをひやかしてゐるのだなと思つた。龍吉は忌いましかつた。

「なに、云つてるのだ、」

龍吉は舌うちしたが眼は笑つてゐた。龍吉は渡廊下を通つて表座敷の方へ曲つて往つた。其の廊下の取つつきの室は粟田のゐる室であつた。龍吉は勢よく其の室へ入つて往つた。粟田は机に向つて枠の大きな眼鏡をかけて、歌書のやうな書籍を見てゐたが、龍吉の跫音に揮りかへつた。

「龍吉ぢやな、もすこし靜に歩いたらどうぢや、馬のやうになんだ、」

龍吉は馬と云はれたのがをかしかつた。龍吉は笑ひだした。

「なにが、をかしいのぢや、」

「だつて、馬のやうだとおつしやつたぢやありませんか、へ、ェ、ェ、ェ、」

叱られて面白がる奴もないものだ。粟田はたしなめた。

欠

「痴、已のことを云はれて面白がる奴があるか、さつきは、お八重君に、さんざんやつつけられたと申すぢやな
いか、すこし、しつかりしないのか、」
「しつかりしますよ、しつかりしますから、御用を云つておくんなさい、」
龍吉は座つた。
「うん、御用か、御用は大久保様のお邸へ、お尺牘を屆けに往くのぢや、大事のお尺牘ぢや、氣をつけなくては
いかんぞ、」
「大久保様、ようがす、お返事をもらつてまゐりますか、」
「さうぢや、お返事が入用ぢや、」
栗田は机の上に置いてある匣を執つて龍吉の前へ出した。それは桐のやうな定紋の金泥の剝げかかつた古色を
帶びた箱で、外山家に二つ三つある龍吉が手なれの匣の一つであつた。
「ぢや、往つてまゐります、」
龍吉がひよいと起つと栗田が呼びとめた。
「待て、大事の御用ぢや、いつもの奴を差してまゐれ、」
龍吉は揮りかへつた。
「人新庖丁ですかい、」
「よけいなことを申すな、差してまゐれと申したら、默つて差してまゐれ、」
龍吉は首を縮めるやうな所作を見せてから出て往つた。むかふに人がゐたなら彼が舌を出したのを見たであら

う。龍吉はそれから大玄關の右側になつた食客室へ往つた。七八人ゐる食客の多くは學校へ往つて室には二人し
かゐなかつた。龍吉は正面の床の刀架に懸けてある二三本の刀の中の一つを執つて腰にした。
「龍吉君、使か、何處ぢや、」
龍吉に聲をかけたのは吉岡と云ふ熊本から來てゐるもので、散切にした髪の毛の濃い大柄な色の白い青年であ
つた。龍吉の聲はぶつきらぼうであつた。
「麹町三年町だよ、」
「大久保か、」
「そんなものだよ、」
龍吉は平生になく吉岡が憎にくしかつた。吉岡はお八重の氣にいりだつた。其の時龍吉の頭に浮んでゐたの
は、訴へる處のない怒りを包んでゐるお多喜の姿であつた。其のお多喜の姿は何時の間にか具體につながり、お
八重につながり、それから處子につながつた。龍吉は其處に黑いどろどろした艶かしさを感じた。
もう四時比であつた。微曇のした空の下に門口の櫻の花がちらちらと散つてゐた。龍吉は外山邸を出て愛宕下
の街路を往き、それから南佐久間町の方へ折れ、虎の門から麹町三年町の大久保邸へ往つて、尺牘の返事をもら
つて琴平祠の前まで歸つて來た。が、何時の間にか濠の水を明るく見せてゐた微陽が消えて四邊はたそがれてゐ
た。姉小路の後室様とお多喜の姿を絢ひまぜにして、宵の夢の後を追ふやうな氣もちで歩いてゐた龍吉は、はつ
と思ふまに横あひから來た者と打つつかつた。
「氣を注けろ、」

龍吉は脇腹を突かれて驚いた。龍吉は其處に背の高い、酒で陽やけのした赧黑い頰をほてらしてゐる人夫の顏を見つけた。琴平祠の境内から華表をくぐつて出て來たのは五六人伴れの壯い男の一人であつた。正面から來た者に突きあたつたなら當方にも缺點があるが、横あひから來た者であつてみれば曲はむかふにあるのであつた。

「なに、云やがるのだ、てめへこそ氣を注けろ、」

「なんだと、此の唐變木、みれやあ、鳥おどしをさして、狀箱なんか持つてやがる、てめへは何處かの折助だな、人に突きあたつといて、逆ねぢをくはすたあ、ふざけてやがる、」

「なにがふざけてゐるのだ、横あひから來て突きあたつたくせに、てめへの眼は節穴か、」

「なに、云やがるのだ、此の小厮、」

敵の體はをどりあがつた。龍吉は左の小脇に匣を抱へてゐるので體が不自由であつた。龍吉の片頰へ敵の拳が來た。龍吉は匣が大事であるから己から進んで敵をふせぐことができなかつた。龍吉はしかたなしに刀に手をかけた。と、其處にきれぎれの叫びが起つて、それがあたりをぐるぐる廻つたかと思ふまもなく、龍吉の體は輕がると持ちあげられてから放りだされた。龍吉の體は木炭俵を投げ飛ばしたやうに二つ三つころころところがつた。龍吉はしまつたと思つて起きあがらうとしたところで、足、たくさんの足が來て身體中を踏みにじられた。龍吉は氣が遠くなつた。

「もし、もし、怪我をしたのぢやないかね、」

龍吉は氣が注いた。龍吉は己の顏の近くに他人の氣息のあるのを感じた。

「怪我をしたのぢやないかね、」

龍吉は敵がゐなくなつて行路か何人かが寄つて來てゐることを知つた。龍吉は夢中になつて半身を起した。起した時、龍吉は腰に刀のあることを知つた。

「これは、あんたのぢや、」

傍に寄つて來てゐた者の手に何か拾はれてゐるやうであるから、龍吉は怒に燃えたつてゐる心をひきしめて眼をやつた。一人の車夫が黴黑い中に匣を持つて立つてゐた。

「あ、これは、」

龍吉が手を出すと車夫はそれをくれた。

「乃公が見てたのだ、野郎どもがいけねえ、あいつら假父を笠にきて、增長してやがるのだ、」

「今の野郎、何處の野郎だらう、」

「あれや、箔屋町だよ、」

「箔屋町つて、なんだね、」

「相政さ、」

「なに、彼の元締の相政か、」

「さうだよ、」

「さうか、相政の假兒か、」

「兒の時にお顧をかけて、水垢離をとつて、お父さんの軍追放がゆるされたと云ふので、此の琴平さんを信神してゐる相政のことだから、壯い者を掃除にでもよこしたらうよ、明日は十日だから、」

「よし、さうか、それぢや、車夫さん、これから乃公を、箔屋町へやつてくれないか、」
「箔屋町なら、隣路だから乗つけてやつてもいいが、箔屋町には腕つぶしの強い奴が、うようよしてるぜ、」
車夫は暗に今の五六人の壯い奴にさへ負けたものが、箔屋町に往かうものならそれこそどんな目に逢はされるかもわからないと云ふことをほのめかした。

八

龍吉は勢ひよく起きあがつた。龍吉は踏みにじられてゐるので體の其處此處に痛みがあつたが、緊張してゐるので覺えなかつた。
「乃公にかんがへがある、なんでもかんでもやつてくれ、」
「やつてもいいが、大丈夫か、」
「相政とならば、どうなつても不足はねえ、」
「元締にかけあふのか、元締なら土佐の御隱居のお氣にいりだ、山中つて云ふ苗字ももらへば、お扶持ももらつてゐるほどの男だ、假見のしたことの善惡位わからあな、なるほど元締にかけあや話が早いや、だが、もし喧嘩になつても、乃公は喧嘩ができねえから、加勢はまつぴらだぜ、」
「どんなことがあつても、汝には迷惑をかけねえ、」
「ぢや、乘んな、」
「やつてくれ、使に往つてて、匣をころつきに足蹴にせられたのぢや、大家へも歸られねえ、」

「さうとも、ぢや、燈を點ける、待つてくれ、」
車夫は華表のかたはらへ引きすててあつた車の挑燈へ燈を打つて燈を點けはじめた。九日の月はあつても曇つてゐるので四邊は暗かつた。そして、其の暗い中で車夫が燈の石と金物を打ちあはす音がコチコチと小さく響いてゐたが、やがて引火奴へ火が點き、それが附木へ移り、それから挑燈の蠟燭へ移つた。龍吉は挑燈へ燈の點いたのを見ると其の方へ往つた。
「顔を打つたな、たいへんな血だ、」
車夫は挑燈の燈で龍吉の顔をすかして驚いた。さう云はれてみると龍吉は左の額にも右の頬にも痛みがあつた。
「さうか、」
龍吉は左の掌を右の頬へやつてみた。皮がむけてゐるのか痛みがあつて、泥まみれの血がべつとりと附いて來た。
「洗つたらどうだね、途中で人に怪しまれるぜ、」
龍吉はなるほどと思つた、龍吉は琴平祠の境内の御手洗の水で洗ほうと思ひだした。
「それぢや、ちよつと洗つて來ようか、」
龍吉は華表を潜つて其處此處に燈火のやうに燈の入つた境内へ往つて、御手洗の水を見つけて顔を洗ひ、懷に入れてゐた手拭で洗つた後の傷を押へ押へして引返した。龍吉は一刻も早く箔屋町へ往つて相政をぎうと云はせないことには腹の虫が收まらなかつた。

「洗つたのか、それぢや往かう、乗んな、」
車夫は轅を掴つて車を龍吉に向けた。龍吉は平生とちがつてゆつくりと乗つた。龍吉はこんな時にはなるだけ氣をおちつけてかからなければならないと思つてゐた。
「よし來た、」
車夫は客をほりださないやうに用心して駈けだした。車の前にぶらさげた挑燈は一定の波動を畫きながら街路を照らした。其の車は虎の門見附から濠端を往つて、新橋の一つ此方の蘭波橋を渡り、銀座へかからずに南大阪町と山王町との間を眞直に往つたが、此の邊は前年の師走二十八日に大火にあつてゐるので、新らしい家が灰の中に飛び飛びに建つてゐるにすぎなかつた。車はそれから中の橋の袂を濠端に沿うて京橋へ出、それから日本橋の大街路を往つて、中樞廣小路を過ぎ、街路の右側、岩倉町の隣になつた箔屋町へ往つた。
「此處だよ、元締の家は、」
車ののろいのをもどかしく思つていらいらしてゐた龍吉は、いきなり車から飛びおりた。其處に格子戸の入つた燈の明るい家があつて裏では人聲がしてゐた。
「此處だな、」
龍吉は左に匣を抱へてゐた。龍吉は右の手を其の格子戸にさした。
「さうだよ、」
「それぢや、ちよつと待つててくれ、」
「待つてるには待つてるが、乃公は汝の仲間ぢやねえぜ、」

「判つてるさ、」
龍吉はさう云つてから格子戸をがらりと開けた。取附の室には五六人の浪華風の壯佼が車座になつてゐた。
「此奴ら、」
壯佼は驚いて顔をあげた。額と頬に血のにじんだ鬼味惡い顔があつた。
「さつきの野郎だな、」
龍吉は土間へづかづかと入つた。
「相政を出せ、」
壯佼は物起ちになつた。
「やつちまへ、」
「野郎、」
龍吉は壯佼に取り籠められて、先刻の二の舞を演じてはならないと思つたのでいきなり刀を拔いた。
「騒ぐな、はつば野郎に用はねえ、敵は相政だ、」
壯佼は刀があるので直ぐにはかかつて來なかつた。皆刀のすきを覗ひながら罵つた。
「やつちまへ、」
「馱折助、」
其の壯佼の罵聲をぐつと押へつけたものがあつた。
「待て、靜かにしろ、」

背のづぬけて高い骨格のがつしりした六十あまりの老人が、右の手に羅宇の長い煙管を持ち、左の手に淡巴菰盆をさげて出て來た。それが相模屋政五郎であつた。それと見ると壯佼は左右に退いたが、しかし、物騒な闖入者の兇器からは眼を放さなかつた。相政は平氣な顏をして龍吉の前へ來て座つた。

「これはお出でなさいまし、わつしが相模屋でございますが、なにかわつしに御用が、」

龍吉は前にあるものに打つつからなければ氣もちが收まらなかつた。

「首をもらひに來たのだ、」

壯佼はまた口ぐちに罵つた。

「もう、かんべんならねえ、」

「やつちまへ、」

相政は煙管で押へつけた。

「いけねえ、野郎、手だしをするな、手だしをすることはならねえぞ、」と云つて龍吉の方を見て、「此の白髮首がお望みなら、何時でもさしあげますが、それよりは、まあ、どう云ふ理で、此のわつしの白髮首をお望みなされるか、其の理を承はらうぢやありませんか、」

龍吉は其の穩かな詞に默してむちやくちやなことも云へなかつた。

「そんぢや、云はう、」

「では、まあ、汚い處でございますが、おあがりなさいまし、」

うつかりあがつて手籠めにせられてはならなかつた。

「此處でいい、」

「では、どうかお掛けくださいまし、」と云つた相政は、それから壯佼の方を揮りかへつて、「おい、お茶とお蒲團を持つて來な、」

龍吉は其の時手にしてゐた白刃に氣が注いた。龍吉はちよつと考へたがべつに害心があるとも思はれないので鞘に收めた。

「さあ、お敷きなさいまし、」

九

蒲團がもう其處に來てゐた。龍吉はびくびくしたところを見せたくはなかつた。かれは匣を小脇にしたままで其の蒲團の上へ腰をおろして相政と斜に向きあつた。相政は淡巴菰盆の引抽から淡巴菰を出して詰めてゐた。

「それでは、云はう、」

龍吉はだしぬけに口をきつた。

「は、」

相政は淡巴菰の詰まつた雁首を火入の火へやつて吸ひつけながらきき耳をたてた。其處へ二人分の茶が來たが龍吉の話の腰を折るのを心配したのか相政は何も云はなかつた。

「大家から云ひつかつて、紀尾井坂の方へ使ひに往つて、琴平さんの前まで來ると、汝とこのやくざ者が、華表の中から出て來やがつて、横あひから乃公に衝きあたりながら、因緣をつけて、よつてたかつて乃公を足蹴にま

でしたのだ、」龍吉は室の中にゐる壯佼の中から暴行者を探しださうとした。「乃公は、命よりも此の匣が大切なんだから、みすみすやくざ者に、酷い目にあはされたのだ、」

壯佼の間に喚喊が起つた。

「これは、とんだことをいたしました、誠に申しわけがございません、」相政は淡巴菰の手をとめて壯佼の方を見て、「今日、琴平樣のお掃除に往つたのは、伊助に、新吉に、松、八、それから未だ二人ぐらゐ往つたな、」と云つてゐるうちに必要な者を見つけたのか眼をすゑた。「伊助も、松もゐるのだな、おい、覺えがあるのか、」

「覺えはあるのですが、其の野郎の云ふことは嘘ですぜ、たしかに、わつしに突きあたつたのですぜ、」

それは龍吉に突きあたつた陽やけのした顏の赧黑い脊の高い男であつた。

「なに云やがるのだ、琴平さんのお神酒のしたみにくらひ醉つて、衝きあたりやがつた癖に、てめへ達が何んと云つても、はたで見てた者があるのだ、まきぞへにしちやわるいから、今、名は云はねえが、時と場合によつては、其の人間を出してもいいのだ、」

「なに云やがるのだ、てめへがぼんやりで、衝きあたつた癖に、親方、此の野郎の云ふことは、皆、嘘ですぜ、」

「いけねえ、伊助、だまれ、てめえ達がいけねえ、横あひから往つた方が悪い、それに大勢で、たつた一人を敵にするなんざあ、卑怯だ、男らしくねえ、いけねえ、皆あやまれ、」相政はさう云つて壯佼をしかりつけておいて、龍吉の方を見て、「それは、あんたの御立服なさるのが御尤もだ、わつしの家の壯佼が、そんなふざけた眞似をしたとあつては、世間樣に申しわけがございません、わつしがあやまります、どうか御かんべんを願ひます、」

龍吉の心は和いだが未だ云ひたいことが遺つたゐた。

「乃公はどうなつてもかまはねえとしたところで、此の大切な匣を、やくざ者に足蹴にされちや、主人に申しわけがねえや、」

「それは、御尤もでございます、大家は何方樣でございませう、」

「云はねえ、恥になる、」

相政は龍吉のさう云つた顏をぢつと見た。

「お壯いのに見あげた御精神だ、かう申しちやなんですが、御主人の恥になるから仰しやらない、見あげた御精神、今日のところは此の爺にめんじて、かんべんなすつてくださつたうへで、以後お心安く願ひます、わつしは、あんたのやうな方が好きだ、失禮ですが、あんたはやつぱり江戸のお生れ、」

「乃公は下谷だ、」

「お名前は、」

「龍吉つて云ふのです、」

輕佻でない相政の態度に龍吉の怒も收まつた。

「龍吉さんか、」相政は壯佼の方へ鋭い魂を見せた。「伊助も、新吉も、今日、琴平樣へ往つたものは、皆、出てあやまれ、つまらんことをぬかしたら、承知しないぞ、」

龍吉はそれほどにしなくてもいいにと思つた。龍吉は氣の毒になつて壯佼の方を正面に見ることができなかつた。其處へ四人の者がにじりでた。

「それだけか、まだゐるだらう、」

「松と六は、用たしに往つたのです、」
それは伊助の聲であつた。
「さうか、ぢや、てめえが松と六のぶんもいつしよにあやまれ、」
壯佼達は龍吉の前へ頭をさげてきまり悪るさうにあやまつた。其の壯佼達が龍吉の前へ頭をさげるのを見はつてゐた相政は、ふと入口の格子戸につかまつて土室の中へ半身を入れてゐる車夫の姿を見つけた。
「汝さんは、何人だね」
「わ、わつしは、」車夫は口をもぐもぐさして、「わつしは、人力車の挽子ですがね、そこにゐなさるお客さんを、琴平さんの前から伴れて來たのですよ、なにね、今日、某官員さんが、飯倉の權妻のとこへ通つてくのを乘つけて、けえりに琴平さんの前まで來ると、喧嘩でせう、だが、わつしが乘つけて來たのぢやねえ、其のお客さんが、乘つけてくれろと云ふので、けえり車だから、乘つけて來たのです、」
「さうか、そいつは氣のどくだつたね、だがおまへさんもかかりあひだ、ついでに此の方を、大家まで送つてあげてくれないか、」
「ようがす、送りませう、」
「そいつはありがたい、」
相政は壯佼の一人に耳うちした。壯佼は引込んで往つたがすぐ出て來て土間へおり、手にしてゐる紙撚を車夫にわたした。車夫はくどくどと禮を云つた。龍吉の前に新らしい茶が出た。龍吉はそれをぐいと飲んだ。茶は乾からびてゐた咽喉をうるほして旨かつた。

「それぢや體でも洗つて、車でけえつておくんなさい、」
「急ぐのですから、車のお世話になつてけえりませう、」
龍吉は相政に挨拶して外へ出た。車夫は龍吉の顏を見るなり云つた。
「相政親方は、やつぱりえれえなあ、」
「さうだなあ、」
車は龍吉を乘せて勢よく駈けたが、數瞬間に外山邸へ著いた。外山邸の前には二臺の籠が据ゑてあつて、十人位の者が其の周圍に散らばつてゐた。龍吉はどうした客だらうと思ひながら、挑燈の傍で肌ぬぎになつて汗をふいてゐる籠舁の傍へ往つた。
「お客さんは、何人だね、」
「八幡屋からでさあ、」
八幡屋と云へば畫間番頭が車で來てゐた衣肆であるが、一日の中に二度も三度も往來するとは、何か大きな買ひ物でもしたのであらうか、それにしても奥方は出養生に往つてゐる、ことによつたら彼のお八重がおかみをねだつて、何か買つたかも判らないと思つた。龍吉は畫間お八重にへこまされたことを思ひだして忌いましくてたまらなかつた。
「龍吉君ぢやないか、」
龍吉は聲をかけられて顏をあげた。山田と云ふ食客の一人が門口に立つてゐた。
「山田さんか、」

「癪に遲かつたぢやないか、粟田太夫がお待ちかねだぜ、」
「途でひどい目にあつたものですから、つい、ね、」
「どうしたのだ、」
「喧嘩をふつかけられたものですから、」
「ふつかけられたのぢやなくつて、ふつかけたのだらう、」
「じよ、じよだんでせう、琴平さんの前まで來ると、五六人の人足に喧嘩をふつかけられたものですから、」
「そいつは、怪しいなあ、だが、粟田さんが待ちかねてたから、早く往くがいいよ、」
龍吉は何か一こと云はないと收まらたかつたが、粟田が待ちかねて憤つてゐるだらうと思ふので、其のまま入つて内玄關からあがつて往つた。

一〇

龍吉がさうして粟田の室へ入つた時、主人の具慶は一室で八幡屋の支配人とさしむかつてゐた。其處は六疊位の茶室風の室であつた。支配人の右側には萌葱の包巾に包んだ箱のやうなものを五つ並べてあつた。それは長さ一尺七八寸厚さが一尺二三寸位に思はれる長方形のものであつた。八幡屋の支配人は例によつて白い小さな鬚を洋燈の光に見せて額を疊にすりつけてゐた。
「晝間はてまへ、かつてなお願ひをしながら、またまた夜ぶんに遲くお眼どほりを願ひまして、なんとも、はや、申しわけのないことでござりますが、私店の浮沈にかかはることでござりますから、失禮無禮の段は、幾重にもお赦しを蒙りまして、私店の不調法、不調法と云ふやうな、そんな生やさしいことではございません、恐れ多い、とんでもない不調法をつかまつりまして、それにつきましては、手前主人がお願ひにあがるはずでございますが、主人はあまりに恐れ多い不調法でございますから、平生信仰してをります天滿宮におすがりして、此のお詫びがとどこほりなくかなひますやうに、お願ひすると申しまして、龜戸の天神樣へまゐりましたから、私がかはつてあがりましたやうなわけでございまして、」
具慶は何人かの七言絶句を書いた半折のかかつた床の方を背にして、ふてぶてしく座つてゐた。
「さうであつたか、それでは八幡屋も驚いたと見える喃、しかし、驚くは當然のことぢや、まかりちがへば、八幡屋の首にかかはることぢや、」
「御意にございます、誠になんとも、お詫びの申しあげやうもございませんが、手前の方は、念に念を入れて、御用を無事に勤めやうとしたうへの不調法でございますから、どうかおかみにおかれましても、ここの處を御同情くだされまして、」
「それは判つてをる、それに晝間も申してあるやうに、八幡屋は祖父の卿の時から、わしの家のでいりで、わしが用度司へ周旋したことも、萬里小路卿が知つてをられるから、わしの處へ直ぐ知らして來たと云ふものぢや、」
「ありがたうございます、御厄介になつてをりますうへに、御厄介をかけましては、誠になんとも申しあげやうがございませんが、どうかおかみのお力で、何分ともにお詫びのかなひますやうに、お願ひいたします、」
「うむ、」
「つきましては、晝間、おかみからお詞のございました、それを、内密にしていただくに就きまして、」

「ほう、内密にするほう、」
具慶は金張の煙管の雁首を灰ふきにあてながら、合點のゆかないと云ふやうな顔をして見せた。
「いや、それは、おかみからお詫びをしていただきますに就きまして、周圍の者が、とやかく申さないやうにしていただきます、其の口どめ料でございますが、」
「ああ、さうであつた、哺、諸生參議どもに、理窟を云はせないやうにする口どめ料か、それは入用ぢや、それなくては、如何にわしと萬里小路卿とが親密な關係でも、周圍のものがとやかく申しては、事がこはれてしまふから、哺、」
「御意にござります、でござりますから、お詞に從ひまして、御一新の驛ぎで、店も人費のかさむ一方で、手許も苦しうござりますが、八幡屋の暖簾にはかへられませんから、持參いたしましたが、まことに、厭な、めんだうなことをお願ひいたしまして、何とも申しわけがござりませんが、どうかおかみのお力で、」
「それはよろしい、それで幾何持參いたした、」
「一萬兩持參いたしました、」
「一萬兩か、」
「如何でござりませう、」
「よろしい、それくらゐあれば、よろしい、」
「それでは、失禮でござりますが、ちよつとお改めを願つておきます、」
支配人は其のまま起つて端になつた包巾づつみの一つに手をかけて解いた。それは檜の新らしい平べつたい箱

を二つ重ねたもので、其の箱は合せ目を鐵の金具で包んであつた。それは諸侯などの用ゐたものでなしに、商家あたりでいいかげんに作つた岩壁一方の千兩箱であつた。支配人はそこで懷から小さな鍵を出して箱の錠前にさしこんだ。錠はピンと云ふ小さな音をたてた。支配人はそれを開くと片手の指さきで蓋の端を向ふに押した。蓋は箱の半をおほうたもので半は箱にくつついてゐた。蓋はすうと開いた。蓋が開くと支配人は上の箱をずらして下の箱とくひ違はし、それから兩手を上の箱の尻にまはして、うんとこしよと抱へて具慶の前へ持つて往つた。洋燈の光は箱の中の黄ろに燦然光る光に反射した。
「どうかお改めを願ひます、」
具慶は淡巴菰を喫みながらすまして座つてゐた。
「改める、それを改めよと申すか、」具慶は何故にそんなものを改めなくてはならないかと云ふやうな、金錢の價値を知らないやうな顔をした。「何故改めなくてはならぬのぢや、」
「金のことは、えて間違ひの起りやすいものでござりますから、」改めてもらつて確に受け取つてもらはなくては、後になつて千兩入のものが八百兩しかなかつたと云はれても、抗辯のできる筋あひのものでなかつた。支配人は下の箱の錠前に鍵をさしこみながら、「念のうへにも念を入れて置きませんと、間違ひがあつてはなりませんから、」
「それはさうぢや、何事もさうなうてはならぬが、わしは、未だ錢金を計へたことがないで、哺、」
具慶はどこまでも金錢のことには無關心であると云ふやうな態度であつたが、八幡屋で豪所の御用を仰せつけられた比には、何兩何朱の細かい計算もしたのであつた。支配人はをかしかつたが笑ふことはできなかつた。

「それは、もう、いやしい錢金のことでござりますから、それは御もつともものことでござりますが、」
支配人は下の箱の蓋を開けてゐた。
「それでは、かうしたらどうぢや、八幡屋のことであるから、べつに不都合もないと思はれるが、其の方が大事をとりたいとあれば、蓋だけ開けることにしては、どうぢや、」
「それでは、手前の方を御信用くださりまして、それで受け取りくださりませうか、」
「それでよろしい、八幡屋のことぢや、」
「ありがたうござります、」
支配人は順じゆんに包巾づつみを開けて、二個づつ入つてゐる千兩箱を出して、それぞれ其の蓋を開けた。具慶の眼は其の箱の中の黄ろな光に吸ひつけられてゐた。
「どうか、御覽を願ひます、」
具慶は支配人に醉をかけられてはつとしたやうに支配人の方を見た。支配人は其處に座つてゐた。
「皆、蓋をとりました、御覽を願ひます、」
「さうか、べつに異狀がなければそれでよい、」具慶はつらつらと眼をやつてから、「それでは、もとのとほりにしておくがよい、」
「それでは、錠前だけは、其のままにして、もとのとほりにいたしておきます、つきましては、恐れいりますが、私から主人に見せるために、一札お願ひいたしたうございます、」
「證文を書けと申すか、」

「いや、證文と申すではございません、私が主人に證しにいたしますのでございますから、お受けとりくだされましたことがわかればよろしうございます、」
「さやうか、それでは書いてつかはさう、待つてをれ、」
具慶はついと起つて出て往つたが、五分と經たないうちに一枚の半紙へ書いたものを持つて入つて來た。
「何事も早いがよいと思うたで、萬里小路卿にお逢ひしようと思つて、先方の都合を聞きあはしたところで、明日來てほしいと云つて來られた、」
「それは、どうもありがたうございます、どうかおかみのお力で、」
「よろしい、安心するがよい、萬里小路卿も、わしをお待ちかねと見える、わしと二人で事件を聞くをさめる御相談をなされるつもりであらう、それには、これが無くてはならぬのぢや、」具慶は頤で千兩箱の一つを指して、
「諸生參議でも、岩倉卿でも、此の櫛をはめると醉を出さないから、喃、」

一一

金巻をはめて醉を出さないものは諸生參議や岩倉卿ばりでもあるまい。八幡屋の支配人はふふふと肉皮な醉をだしたくなつたのを耐へた。
「それでは、どうかよろしくお願ひいたします、」
「よいとも、安心するがよい、」具慶は一方の手にしてゐた半紙に書いたものを出した。「それでは、これを渡しておかう、」

「ありがたうございます、」
支配人は其の書類を懐にして歸りかけたので具慶は送つて出た。其の室は秘密の室になつてゐるので、限られた人が許しを得て出入するのであつた。二人が出て往つてちよと經つたところで、漢詩の軸のかかつた床の右側の壁面の襖がすうと開いて中から出て來たものがあつた。それはお八重であつた。お八重は並べてある千兩箱の包みを見まはしてにやりと笑つたが、やがて其の一方の端へ座つて片肱をかけて倚りかかりながらまたにやりとした。

具慶は秘室の近くの廊下に立つて見張をしてゐた栗田に支配人を渡して引返した。引返して室の中へ入つた具慶はぎつくりとした。

「た、たれだ、」

「わたくし、」

「八重か、そちは、」

「八重でございます、」

お八重の聲はとりすましたものであつた。具慶はお八重と云ふことを確めると、秘室へ盗賊のやうに侵入しながら惡事とも思はずに、取りすましてゐる女のづうづうしさに對する怒りがわき上つた。具慶は襖を締めて入つた。

「そちは、何人の許しを得て此處へ來たのぢや、」

お八重は顔をあげた。其のお八重の艶かしい顔には笑ひがあつた。

「おかみが、お寶をくだされるとのことでございましたから、」

「なに、」

「此の千兩箱を、一つか二つくだされるとのことでございましたから、」

「獣れ、寵愛してやれば、つけあがつて、」

「でも、口どめ料ではございませんか、」

「なんと申す、」

「聲を出さないやうになさいますには、轡をはめなくてはならないではございませんか、」

「さては、何處かで聞きをつたのぢやな、」

具慶は四邊を見まはした。お八重は面白さうに笑つた。

「不埒者奴、惡いことをしながら、笑ふとは何事ぢや、」

「でも、をかしうございますもの、」

お八重はまた笑つた。

「なにがをかしいのぢや、惡いことをしておいて、をかしいことがあるか、惡いことをしておいて、」

「わたしは、べつに惡いことをした覺えはございません、」

「覺えがないとは云はさないぞ、わしの許しを受けないで、此の室に忍びこんで、わしのやつてをることを盗み見しながら、惡いことをせんとは何事ぢや、」

「それは、おかみが、わたしに隠れて、また白晝のやうなことをなされてるかも判らないと思ひまして、さきまはりをして待つてをりました、」

「それでは壁厨の中に隠れてをつたのか、」
「はい、苦しくて苦しくて困りました、」
「痴者、」
「でも、おかげさまで口どめ料にありつきました、」
「痴者、」
「轡をはめないと聲を出すものは、諸生參議や岩倉さんばかりではございません、」
「始末の悪い奴ぢや、喃、」
怒つてもはじまらなかつた。具慶は怒ることをよした。お八重はわがままな小娘のあまつたれてゐるやうな表情をしてゐた。
「わたくしも、幾等かお杖頭を持つてをりませんと、おかみに捨てられた時に困りますから、其の箱を二つばかりいただきたうございます、」
「痴者、聞いたとあれば云ふが、此の金は要路の大官に贈る金ぢや、そんなことは相ならん、」
「でも、おかみも、それをお取りになりませう、」
「わしが、そんなことができると思ふのか、」
「でも、三井組から持つて來たものは、何處へも贈らないで、悉皆お金藏の中へしまひこんだではございませんか、昨年の夏横濱の商館から持つて來たものは、どうあそばしました、彼の時には、わたくしにあさましい役目をさしたではございませんか、」

金を獲るためには愛してゐる女を道具に用ゐたこともあつた。具慶は女の願望を一概に退けることもできなかつた。
「よろしい、もうつまらんことは云はぬがよい、それでは口どめ料として、五十兩取らさうか、喃、」
「五十兩と申しますと、其の千兩箱が幾個になりまして、」
「よけいなことを申すな、五十兩取らさうと云つたからには、五十兩取らす、金はあつても、これは要路の大官に贈る金であるから、そち一人に多く取らすわけにはまゐらん、」
「では、わたくしは口どめ料はいただきますまい、」
「口どめ料を取らずにをつて、なにをするつもりか、喃、」
「岩倉さんのお邸にまゐりまして、おかみのなされてをりますことを、すつかり申します、」
「ほう、岩倉邸へ往くか、喃、」
「まゐります、」
岩倉邸へ往かないまでも敵になれば何をしでかすか判らない女であつた。具慶は其の刺を厭ひながら退けることのできない女であつた。
「それでは、百兩取らすことにせうか、喃、百兩ならいざこざはなからう、」
「百や二百では、いやでございます、」
「それでは幾等と申すのぢや、」
「二千兩ならお高くはございますまい、これまで一度だつて、纏つたお杖頭をいただいたことがございませんか

ら、」
「ならん、まかりならん、そんなことは、」
「では、いただきますまい、」
「いや、そちも云ひだしたからには、取らないと氣がすまんであらうから、むちやを云はないで、分相應のものを取つたらどうぢや、」
「では幾等いただいたらよろしうございませう、千兩箱の十個もあるのに、まさか五百兩や六百兩のはした金をいただくこともできますまい、」
「それでは、幾等と申すのぢや、」
「おかみからいただくことでございますから、無理なお願ひはいたしません、其のかはりお願ひしたとほりにまゐりませんなら、もう一錢もいただきますまい、」
「幾等と申すのぢや、」
「千兩だけいただきます、」
「八重、」
「すこしも御無理ではございますまい、十分一でございますから、」
一度與へておいても取りかへさうと思へば取りかへせないこともなかつた。
「よろしい、其のかはり他のわがままはきかないが、それでもよいのか、」
「よろしうございます、」

「よし、それでは千兩取らするから、つまらんことは、おくびにも出してはならんぞ、」
「ありがたうございます、」
お八重は蟻のないあでやかな笑ひをして見せた。

二

龍吉は粟田からさんざん叱言をくつたあとで、臺所へさがつて飯を喫ひ、それから湯に入つて己の室となつた元の仲間室へ歸つて來た。狹い古びた室の中には行燈がぼんやりと點つてゐた。龍吉の體は不時なことの起らないかぎり、それから自由になるのであつた。龍吉は「やれ、やれ」と云ひながら其處へ胡座をかいたが、右の手には茶碗を持つてゐた。茶碗の中のものは燒酎であつた。それは臺所のものから傷へは燒酎をふつかけとけばいいと云はれたので、飯を喫つた後の茶碗へ一ばいもらつて來たところであつた。

龍吉は臺所の隅にある鏡で怪我したところをたしかめてゐた。額と頰の傷は踏まれたあとのかすり傷が蚯蚓ばれしてゐるのみで何でもなかつたが、左の額の上になつた生際から髮の中にかけてついた傷は一寸位の裂け傷になつてゐた。龍吉の顏を物凄く染めてゐた血は其の裂け傷と齒から出たものであつた。龍吉は左の掌へ茶碗の燒酎をそうつと移した。其の拍子に茶碗の傍へ持つて往つた鼻に酒精の甘くて快い匂ひがしみた。龍吉は一口飲みたいと思つたが、掌の燒酎をこぼしては惜しいと思つたので、急いで髮の中の傷に塗つた。傷は火を塗つたやうに痛かつた。龍吉は顏をしかめたが、一思ひに塗らないとなほ痛いと思つたので、其の殘りを左の額へ塗り、それから右の頰へ塗つた。右の頰へ塗つた時にはもう燒酎がなかつたのか痛まなかつた。そこで龍吉はまた掌へち

よつびりと燒酎を移して、右の頬へ塗り、左の額へ塗り、それから髭の中の傷へ塗つた。最初ほどではないが髭の中の傷はやつぱり火を點つたやうに痛かつたが、其のうちに痛みはなくなつて其の後がすうとさわやかになつた。

龍吉の鼻はまた甘くて快い酒精の匂ひを感じた。龍吉はまだ八分目位ある燒酎の容器を鼻のさきにやつて、一度かいでおいて口をそれへ持つて往つた。燒酎はそれまで飲んだこともあつて珍しいものでもなかつたが、其の時はばかに龍吉の慾望をそそつた。

「龍公、お客さんだぜ、」

ひからびたやうな聲がして入口の障子をがたびしと開けて入つて來たものがあつた。いつしよに其處に起臥してゐる門番の孫助であつた。龍吉は燒酎を飲んでゐたところを見られてひやかされてはいけないと思つたので、急いでそれを左の掌へ移した。

「さあ、さあ、お入り、龍吉卿と孫助卿のお館ぢや、遠慮することはない、」

屈んだ腰に挑燈をさし、一方の手に拍子木を持つた孫助があがり端へ來てゐた。龍吉は傷口へ燒酎を塗りながら眼をやつた。孫助の後には侍女のお多喜がきまりわるさうにして立つてゐた。龍吉は一眼見て晝間の禮を云ひに來たのだなと思つたが、それを思ふとともにお多喜の前でお八重にへこまされた不滿がむらむらと出て來た。

「あ、お多喜さんか、さつきはあん畜生に、ひどい目に逢つたね、」

お多喜は金茶色の帶を見せて一足出た。

「わたくしが、いたらないものですから、あんな御迷惑をかけてすみませんでした、」

「なに、汝さんが惡いことはない、あいつがいけねえのだ、おかみを笠に着やがつて、」

「それと申しますのも、やつぱりわたくしが、いたらないからでございますわ、」

「そんなことがあるものか、あいつがいけねえ、あん畜生、」

二人の問答をきよとんとして聞いてゐた孫助は、此の時何かさとつたと見えて口を挾んだ。

「喧嘩より他に、何かあつたのかい、乃公は喧嘩のことばかりと思つてたが、」

「あつたさ、晝間、彼のお八重のあまね、あいつが、おかみを笠に着やがつて、其のお多喜さんをいぢめてるから、乃公が仲へ入つたところで、あん畜生にへこまされたのだよ、癪だが、おかみのあれだからね、」

「さうだよ、泣く兒と地頭つてな、しかたがねえ、」孫助は氣が注いたやうにお多喜を見て、「乃公は、これから一巡りして來る、汝さん、ゆつくり話してゆくがいいよ、」

孫助が出て往かうとするとお多喜がそれをささへるやうにした。

「わたくしも、其處までいつしよにまゐりませう、ちよつと、おみまひにあがりましたから、」

孫助も行儀のやかましい大家で、壯い男と女をいつしよに置くことはおもしろくないと思つたので足をとめた。

「すこし話していつてもいいぢやねえか、」

「歸りが暗うございますから、ちよつと待つてください、」と云つて龍吉の方を見て、「お怪我をなされつて、うかがつたものですから、ちよつとおみまひにあがりました、」

「そいつは、どうも、さつき、麹町へお使ひに往つて、歸りに琴平さんの前で喧嘩をふつかけられたものですから、癪をちよつと怪我したのですが、なんともないのです、へい、」

「たいしたことがなくて、なによりでございました、晝間の御挨拶にあがらうと思つてゐるうちに、お怪我をしたとうかがつたものですから、おみまひにあがりました、どうぞお大事に、」

「さうですか、そいつは、どうも、」

「では、失禮いたします、」

お多喜はもう入口に立つてゐる孫助を追つて往つて二人で外へ出た。お多喜のさうした容が風のまにまに室の中へ入つて來て、また風のまにまに流れて往く蝶のやうな氣がしてはりあひがなかつた。龍吉は「なあんだ」と云つて、ふとやつた眼に燒酎の茶碗を見つけた。茶碗の中には旨い燒酎が殘つてゐた。龍吉は追ひ立てられるやうな氣がするので急いで取つて口にした。

燒酎は喉を刺すやうであつたが旨かつた。龍吉は其のきつい燒酎の味を舌の上にころがしてゐたが、疲勞を感じて來たので腹這ひになつた。腹這ひになるとひどく氣もちがよくなつた。茶碗の底にはまだ燒酎が一口二口殘つてゐた。龍吉はまた茶碗を執つてそれを飲んだが、後へすこしでも殘すのが惜しいので、また其の殘りを飲み、最後に舌を出してべろべろと茶碗の底をなめまはした。其の時入口の障子をもそりとあけて、そつと入つて來たものがあつたが龍吉にはわからなかつた。

「うめえ、」

龍吉は赤裸裸な姿をあらはして茶碗をほりだした。と、聞き覺えのある女の聲がした。

「お酒を飲んでるの、龍吉さん、」

龍吉はびつくりして顏をあげた。

「ほんとに暢氣ねえ、怪我はどうしたの、」

其處にはお濱が來てあきれたやうな顏をして立つてゐた。

「お濱さんか、」

「お濱さんかぢやありませんよ、お使ひに往つてて、喧嘩して、怪我をしたと云ふから、見舞に來てあげれや、お酒なんか飲んでて、暢氣ねえ、」

「なに、傷口へ燒酎をふつかけとけやあ、いいつて云ふのだから、燒酎をもらつて來て、殘りがあつたから飲んぢやつたのですよ、」

なんぼなんでもそんなものを飲むものがあるものかと思つた。お濱はふきだした。

「ばか、ねえ、此のひとは、」と、また笑つて、「わたしがなかへたつて、困つちまふぢやないの、しつかりしてくださいよ、それに喧嘩なんかして、不具にでもなつたら、どうするの、ほんとにしようがないわ、ねえ、」

「むかふから、ぶつかけられたから、しやうがねえのです、」

「それで、どうしたの、」

「五人も六人もで、乃公をぶんなぐつて、怪我をさしやがつたから、假父にかけあつて、あやまらして來たのだ、」

「なんと云ふ假父なの、」

「名は知らねえが、直ぐ近くだつたよ、」

龍吉は何人にも對手のことは云はなかつた。つまらんことを云つて外山家と紛擾をかもすやうなことになつては、相政に迷惑をかけると思つたがためであつた。

「それでも、まあ、たいした怪我がなくてよかつたわ、色男をだいなしにしちや、困るぢやないの、」
またお濱がからかひに來たものであつた。龍吉はいいきもちになつた。龍吉は起きて胡座をかいた。
「暢氣ねえ、ほんとに彼の方にすまないぢやないの、彼の方は、ほんとに一生懸命なのよ、しつかりしてくださいよ、ひとが知らないと思つて、ふざけてちや困るぢやないの、」
お濱はお多喜のみまひに來てゐたのを見たのであらう。
「あれや、お多喜さんが、みまひに來てくれたのだ、」
「それがいけないのだよ、あんなねんねえなんかにかかりあつてちや、いけないと云つてるぢやないの、しつかりしてくださいよ、演戲へも伴れてつてくだされることになつてるのだよ、」手にしてゐた袱包みを出して、「彼の方がくだされたのですから、袱もいつしよにとつときなさいよ、」
「お菓子かね、」
「さうだよ、だが、汝さん、人にしやべつちやいけないよ、彼の方が迷惑なさるからね、それにおかみの耳にでも入らうものなら、汝さんも此處にゐられなくなるからね、」
「さうか、なあ、」
「さうだよ、では、また、明日ね、」と云つて往きかけて、「傷を大事にね、佳い男をだいなしにすると、彼の方が泣くからね、」
お濱は笑つて出て往つた。孫助のたたく拍子木の音が遠くの方でしてゐた。龍吉は袱包みをぢつと見てゐたが、やがて思ひだしたやうにそれを解いた。中にはカステラのやうな菓子が入つてゐた。

龍吉は其の一つをつまんで頬ばつた。

一三

翌日は小さな灰色の雨が降つてゐた。其の日の四時比、具慶は籠で日比谷の萬里小路博房の邸を訪うて、萬里小路家の客殿で博房に會つた。
「正月お目にかかつて、其の後はお逢ひしなかつたが、御無事で、」
「夫人と悴は去年から、ずつと箱根の方へ出養生にまゐつてをりますが、これとてべつに何處か悪いと云ふほどのこともなく、みな無事でございますが、あなたは毎日、時務に鞅掌なさいますので、お骨の折れることでございませう、」
博房は宮内卿であつた、其の當時政府は廢藩置縣の準備に忙殺せられてゐた。積弊のために時論の紛糾を招いてゐた政府では、根本的に一大改革を行ふことになつたので、其の前年の十一月、表面的に岩倉具視が勅使となつて西下し、薩藩に說いて西郷を起し、長藩に說いて聯合させ、其のうへで西郷の意見に聞いて土藩を加へることにして、西郷は南下して其の年の一月十七日、土佐へ往つて山内容堂を說き、土藩の大參事板垣を起して共に東上した。其の結果、政府の根幹をかためるために、薩藩から歩兵四大隊、砲兵四隊、長藩から歩兵三大隊、土藩から歩兵二大隊、騎兵二小隊、砲兵二隊を徵發して親兵に充てることになり、四月になつてそれぞれ東上することになつてゐた。其の改革の準備中、一月九日參議廣澤眞臣は、不明の激徒のために暗殺せられるなど、政府は多事の際であつた。

「わたしの方は、それほどでもないが、三條岩倉の諸公はじめ、參議の諸君は、夜も晝も評議に追はれてをられると云ふありさまで、」

「さやうでございませう、口では廢藩置縣と一口に申しましても、全國には二百七十餘の藩があつて、不平不服の徒がないにもかぎりませんから、一歩をあやまれば、全國動亂の恐れがないにもかぎりませんから、」

博房は寛宏な紳士であつた。

「さやう、其のことで在朝の諸公が心配されてをるが、まあまあ、さほどのこともなしに行はれさうぢや、」

「それは、もう、上御一人の御稜威によりまして、とどこほりなく行はれることは、不貟、具慶も信じて疑はないところでございます、」何か大事な物でもあるやうにして傍に置いてあつた紫の包巾に包んだ細長い三尺の餘もありさうな箱やうの物を前になほした。

「此のたびの改革が、とどこほりなく行はれますやうに、それをことぶく印までに、これをお贈りいたしたいと思ひまして、」

「それは、」

博房は包みに眼をやつた。

「これは、彼の山田浅右衛門、俗に首きり浅右衛門と申すものの所持してゐた兼光でございます、天朝へ刄向ふ悪人を誅戮するわざものと云ふ意から、お贈りいたします、どうか御受納を願ひます、」

「ほう、首きり浅右衛門の所持の名刀を、」

「中身はお目にかけるはずでございますが、憚りがありますから、此のままでお贈りいたします、後でお改めを願ひます、」

「これは、かたじけない、御政治のたてなほしのある場合、かうした贈り物を受けることは、わたし一人の喜びでない、かたじけないが、こんな由緒のあるものをいただいては、」

「なに、これはふとしたことから、手に入るやうになつたもので、申さば、天が此のたびのお祝ひにせよと、わたくしにくだされたやうなものでございますから、」

「いや、これはかたじけない、何よりのものであるが、こんなに時どき物をいただいては、」

「遊んでをりますと、閑にまかして、いろいろ器物をいぢりますので、時どき珍しいものが手に入りますから、」

「廟堂は不德なもののゐる處でないから、わたしも其のうちには、餓骨を乞うて、閑散な身分になりたいと思ふが、どうもまだ其の時期が來なくて困つてをる、」

「いや、閣下のやうな方が、一日も長く廟堂の上にお立ちになつてをりませんと、がむしやらの諸生參議ばかりでは、何をしでかすか判りませんから、」

「參議諸君は、がむしやらと云へばがむしやらであるが、みな各藩の秀才中の秀才であるから、なかなかしつかりしてをる、あれで廟堂のことに習うたなら、立派に政治を矯梅することができる、」

「なにしろ、二百七十餘藩から、選りに選つて拔擢した秀才でございますから、それに壯年で、泰西の文物にも明るいものもありますから、すこし廟堂のことに慣れてまゐりますなら、」

「さやう、みな立派な者ばかりぢや、かうして新人物がどしどし廟堂の上に立つて、下を開發してゆくなれば、わが國も日ならず、泰西諸國と肩を並べることができるやうになる、」

「それに、もう民間でも、政府の意のあるところを了解して、吾も吾もと頭を文明開化の方へ向けてをります、御承知でもございませうが、市中では、もう籠のやうな不便な乗物がすたれて、人力車と申す隼のやうに早い乗物が流行してまゐりました、昨日も、彼の調度司御用達の八幡屋の支配人が、人力車でまゐりましたから、大工が人力車を發明することも、衣類が新らしい縞柄を工夫することも、みな天朝への御奉公の一つであると申してやりました、が、」と云つて思ひだしたやうに、「八幡屋では、萬里小路卿がお目をかけてくだされるので、調度司の御用達も首尾よく勤めることができるから、お禮を申しあげてくれるやうにと、わざわざ依頼を受けてをります、」

「さやうであつたか、八幡屋と云へば、今日白晝、主人か何人かが時候の挨拶にみえたとのことであつたが、苞苴謙託とあやまられても困る、平日には來ないやうに注意してもらひたい、」

具慶は胴のまはりに温みを感じた。具慶は博房の謹厳にして潔癖な詞を聞いて心に恥ぢた。

「承知いたしました、彼の八幡屋は、恩義に感ずることの深い、感心なものでございますから、お禮にあがつたものでございませうが、おぼしめしのあるところを傳へまして、きつと戒めておきます、」

「それを頼んでおく、」

「それでは、これで失禮いたします、」

「まあ、よろしいではないか、久かたぶりであるから、」

「改革でも終りまして、お閑になつた時にゆつくり伺ひます、」

「さやうか、それでは強ひてお留めすまいか、實は木戸參議が來ることになつてをるから、」

具慶は博房と別れて歸つて來た。八幡屋の支配人を叱りつけて一萬兩の金まで持參さした縫ひ針のことにはすこしも觸れないで。そして、愛宕下の自邸へ歸つて來た具慶が、駕からおりて玄關へあがらうとしたところで、

「外山卿、」

と云つて慣れなれしく聲をかけたものがあつた。具慶は其の詞の中に嘲のあるのを聞いてはつと思つた。小さな雨を編笠にさけて、素肌に一枚の絹袷を着、小倉の袴を穿き、それに一本の長刀をさした浪人姿の男が、編笠の下から鞘の延びた着白いすつこけた顔をのぞかせてゐた。具慶は何人であらうと思つたがちよと思ひだせなかつた。

「吾が輩は山田恭平ぢや、」

「あ、これは、」

具慶は悪い奴が來たものだと思つた。具慶の白髮の交つた毛の長い眉が思はずひそんだ。

「外山卿、そんなに用心することはない、今日は平生の無心ぢやない、すこし頼まれたことがあつてまゐつた、」

山田はもう編笠を脱いで眼のぎよろりとした顔を見せてゐた。

「今日は、すこし取り込みがあるのぢや、頼まれたこととは、どんなことぢや、」

「すこし込み入つた話ぢや、文明開化の世の中でも、ことがこじれてくれや、首ぐらゐはすつとぶことぢや、」

金がなくなつたから例の古傷を銅つきに來たものである。とにかく玄關口ではいけないから上へあげやうと思

つた。

「では、まあ、あがるがよい、」

「さうか、」

玄關には粟田をはじめ食客の學生侍女達が控へてゐた。具慶は山田を伴れて其の間をぬけ、表座敷の前を通つて次の室へ往つた。山田は刀を手にしてゐた。廣い表座敷は古びてはゐるが、諸侯邸特有の上段の室があつて、何かの儀式の際に家老をはじめ諸家中の目見得以上の客が、殿樣から御杯を頂戴した時の客がしのばれた。

「暫く逢はなかつたが、其の後は無事で、」

具慶は早く話をすまして歸つてもらひたかつた。

「あまり無事でもないが、薩長の奴等に睨まれてちやや、しようがないさ、そこになると、足下は奇策縱橫ぢや、青蓮院宮樣は、藝州からお歸りになつても、謹愼を仰せつけられてをり、外山光輔卿と愛宕通旭卿の首には、白刃を擬せられてゐる際に、悠然と門戸を張つてゐるさへあるに、時どき旨い金儲けをしてゐる、とても此の山田などの及ぶところぢやない、實に豪い、違つたものぢや、陳涉は王侯將相寧んぞ種あらんやと云つたが、やつぱり王侯將相には種があると見える、唯、」

いつものいやがらせの他に、今日は未だ何かあるらしいと思つた。具慶の耳には金儲けの一句がしみ込んでゐた。

「うむ、」

具慶はそれ以上何とも云へなかつた。維新直後、帝都を江戸へ遷すことになつて、それが廟堂の議にのぼつた

ところで、薩長二藩の專橫をこころよからず思つてゐた不平の徒は、德川幕府の再興を徽幾にして反抗した。諸侯では紀州新宮の水野大炊守、公卿では澤宣嘉、愛宕通旭、外山光輔、浪人では米澤の雲井龍雄、秋田の初岡敬治、土佐の岡崎恭輔などがこれに關係してゐた。不平の徒の氣勢があがつたところで、賀陽宮家に仕へてゐる浦野兵庫と云ふのが水野大炊の許へ來て結託した。粟田口宮、青蓮院宮、中川宮、其のときは彈正の尹に補せられてゐたので尹の宮とも申したてまつつた。此の賀陽宮にはかねてから薩長、わけて長州の專橫に嫉妬たるものがあつて、ことごとに其の權力を抑壓しようとなされてをつた際であつたから、水野はじめ不平の徒は非常に喜んだ。不平の徒の中には長州奇兵隊の大樂源太郎、富永有隣の二人も加はつてゐたが、此の二人は前年卽ち明治三年二月、長藩の兵制改革を機として兵を擧げて敗死した。不平の徒の中には征韓の一派もあつた。明治の初年、新政府が組織せられて萬國に通照した時、朝鮮の辭令が無禮を極めたので、久留米の佐田白茅が征韓のことを口にしはじめると、島原の丸山作樂が贊成して征韓を決行することになり、澤宣嘉を盟主に仰いだ。愛宕通旭、外山光輔も同志として加はつた。岡崎恭輔も同縣人堀內誠之進と加盟した。初岡敬治も關係した。其のとき久留米の同志は、藩主有馬頼成に同意を求めたので、有馬はそれを石州津和野の藩主亀井に告げた。亀井の臣福羽美靜は、それを當路者に告げたので、不平の徒の錯綜した關係が明かになつて來た。岩倉公實記には、「初め人あり密に刑法官知事大原重德に告げて曰く、朝彥親王陰謀ありと、重德乃ち刑法官少事中島錫胤をして其の蹤跡を探偵せしむ。旣にして越中國新川郡池田村中野光太郎なる者傷りて前田播磨と稱し、都下呉服商後藤縫殿之助の家に潛匿し縫殿之助手代辻孫左衞門佐藤龜六と共に謀議し、德川慶喜の密使と唱へ、親王の家臣浦野兵庫により親王に謁

せんことを請ふ。親王之を許さず、光太郎切諫して やまず、親王乃ち一書を作り之を授けて以て關東に歸らしむ。光太郎將さに京師を發せんとす。事覺はる。ここにおいて兵庫光太郎を捕へ之を鞫問す」としてあつて、薩長の權力を脅威した此の陰謀は、かうした順序を經て表面的になつたので、明治元年八月十六日、德大寺實則、大原重德・坊城俊政、大木喬任、田中輔、中島錫胤、土肥匡の七人が賀陽宮邸へ臨み、朝命を傳へて、殿下は、これから藝州の淺野家へお移りになられますやうにと申しあげた。宮はわしはあづかり知らないことであるが、それには證據でもあるかと仰せられた。中島錫胤が連判狀と稱するものを出して、淺野兵庫を取り調べた結果、此の御手形であると申すことが明白になりましたからとて、それをさしだすと、宮は其の手形に御自身の御手をあててみられた。手形は實際よりもよつぽど大きかつた。宮はお怒りになつたが、岩倉公實記にあるやうに、「重德親王に告て曰く、當時殿下の京に在る朝廷の事宜に適はず、殊に會兵の來て擁戴する者あらんことを懼る。願はくば殿下、暫らく此を避けて居を藝州に遷されんことを」と云ふやうに泣きおとしにかけられたうへに、朝命とあれば如何ともすることができないので、其の夜出發して藝州の方へお移りになつた。それがために賀陽宮の官號はじめ位記一切を召しあげられたが、もともと不平の徒のためにまきぞへになられたと云ふ以外、宮の御所事に些のお咎もないので、其の前年十二月、京都へお歸りになり、賀陽宮家は御廢止になつたが、八年七月に久邇宮の官號をくだしたまはつた。此の遷都反對の兇焰は金枝玉葉の御身にまで累を及ぼしたてまつつたのであるから、其の他の者が奇禍に逢つたのは元よりのことであり、雲井雅雄も前年に刑死し、宮司通旭、外山光輔の二人も其の時捕縛せられてゐた。具慶も此の不平の徒の間を往來してゐることがあるから、山田の詞も聞きながすことができなかつた。

「おい、どうぢや、外山卿、やつぱり王侯將相には、種があると見える、喃、同じやうに勤王問屋の仲間で、人にいやがられることばかりやつて、罪も怨みもない者を大根を切るやうに切るし、其の當時は勤王でも、今から考へて見れや、ろくでもない事ばかりやりをつても、いや、ろくでもないたくらみにかけちや、吾輩より一枚うは手であつたが、公卿の家に生れてれや、華族になれるし、吾が輩のやうな鄉士の次男坊に生れや、やつぱりこんなざまでゐなくちやならんとは、やつぱりこんな世の中では駄目ぢや、德川が倒れて御一新になつたから、四民平等になるかと思や、藩長の足輕どもが、將軍や大老の眞似をしやがるし、彼の同盟が旨くいつてたところで、やつぱり狼のやうな奴が出て來て、勝手なまねをするにきまつてをつたのぢや、」

山田の詞は具慶からそれたので具慶はほつとした。

「やつぱり人間と云ふ奴は、增長するやうにできてるから、ほんたうの平等と云ふことは、行はれるものぢやない、」

「う、む、」

具慶は口をつぐんだ。

「吾が輩が今日來たのは、ちよつとめんどうな話ぢやが、足下に逢ふと、つい昔がなつかしくなる、で、足下と勤王問屋をやつてた時のことが話したくなるのぢや、」

「う、む、」

「おう、さうぢや、」山田はわざとらしく何か想ひ出したやうに云つて、「何時であつたか、喃、未だ慶應ぢやなか

つたかと思つちよるが、暮の大晦日の晩ぢや、足下も覺えとらう、吾が輩が宿の拂ひに困つて、足下の處へ出かけて往くと、足下は何んでも謹慎中ぢやつた、わしも此の暮が越せないから、何かよい工夫はないかと思ひよるところぢやと云ふから、二人で智惠を絞つても、吾が輩には、辻切か押込みならできても、そんな智惠がないから、ぼかんとしてをると、足下が妙計を考へついたぢやないか、」

「さうであつたか、喃、」

「さうさ、惡いことにかけちや、足下は役者が一枚うは手ぢや、今晩は朝まで町人が掛取りに廻るから、財布の重さうな奴を威しつけてものにしようと云ふから、なるほどそいたあ妙計ぢやと、吾が輩も贊成して、早速それに取りかかつたが、諸太夫の粟田も、椽のなんとか云つたな、大森か、狼の二人も足下を見まねて、ろくなことはしをらんが、そんな時の間にはあはないから、吾が輩が古いこはれかかりの文匡を持つて、財布を持つた奴を待つてると、三人の町人の手代が來かかつたが、手代め、惡い奴がをるとは思はないから、一人の奴が、ふだんはえらさうに威張つても、今晩は困つてるだらうと云ふと、伴れの奴が、今晩は鰯の頭もないさと云ふから、ぶつつかつて文匡を破る必要もない、いきなり飛び出して、待て、と云つて叱りつけて、がたがたふるへてしりごみするのを、ひきずるやうにして伴れ込み、白洲の砂利の上に坐らして、足下が長い奴をひつこ脱いて、さんざん威しつけ、一札を取つたうへで、肩にしてゐた財布をまきあげた時は、をかしくもあれば、足下の惡智惠にも感心したのぢや、」

「も、もうやめてくれないか、そんな昔話より、歸つて一ぱいやつてはどうぢや、喃、」

「やるにはやつても、今日は一兩や二兩の眼くさり金では、やらないのぢや、」

やつぱり金をゆすりに來てゐるか、彼の口うらでは今日はすこし額が大きいぞと思つた。具慶はいやになつてしまつた。

「いくらいると云ふのぢや、喃、」

「五千兩でも、一萬兩でも、金は多いだけが便利がよいのぢや、町人を威しつけて取つた時でも、多い方がよかつたぢやないか、」

一五

具慶は返事ができなかつた。

「しかし、町人はかまはない、町人からなら、いくらひつたくつてもええ、吾が輩は町人は嫌ひぢや、町人と云ふ奴は、何事でも下手に出て、他を拜みたふして、それで際があると、金をふりまはしてのさばりやがる、町人ほどいやな奴はない、御一新のついでに、町人の首をちよん切つちよけばよかつた、見るがええ、これからの日本は、町人に惱まされて、町人のために苦しむから、町人の太政大臣のできるのも遠くはあるまい、」

五千兩、一萬兩、町人とつづけられて、ひやひやしてゐた、具慶はやや安心した。

「皇室をないがしろにしてゐた德川は、第一歩において天地に容れられざる大罪人ぢやが、政治はわるくはなかつた、それに德川方には、小栗上野と云ふやうな達識な男がをつたから、慶喜がそれを用ゐさへすれば、時世の要求に應じて、政權を奉還したと云ふことで、慶喜は御一新第一の功勞者と云ふことになり、四民の幸福も、薩長の足輕政治よりも多かつたであらうし、今になつて氣が注いて廢しようとしてゐる藩などと云ふものも、とうから

無くなつて、郡縣の政治が行はれ、とうに文明開化になつてをつたらうが、小栗のやうな男を用ゐなかつたばかりに、慶喜も賊名をおはされ、開化もおくれたと云ふものぢや、これと云ふのも、德川方に町人の氣臭が深かつたからぢや、德川を倒したのは農長の力でなくて、町人の氣臭ぢや、町人の氣臭で腐りかけた德川の土臺を、勤王で搖りこはしたと云ふことになるが、其の勤王も千差萬別、蜂の巣をたたき落したやうに騒ぎだした勤王の中で、ほんたうの勤王と云ふのは、土佐の武市半平太一派の勤王ぢや、武市半平太一派の唱へたやうな、純粹な誠忠無二の勤王がどこにあつた、禁門を犯した長州の勤王はどうぢや、木梨精一郎と大村藩の渡邊清を横濱へやつて、イギリス公使のパークスに援兵を申し込んだ、西郷吉之助の、目的と手段をえらばざる勤王が、薩州の勤王ぢやないか、一人一人について云つても、吾が輩のやうに勤王攘夷で國元を飛び出して、あぶれ歩いて、ろくでもないことをした奴より、國元にをつて親に仕へ、兄弟の世話をし、妻子を可愛がつてをつたものが、ほんたうの勤王ぢや、」

「足下は、何處であつたか、哺、」

「吾が輩は、四國ぢやが、足下のやうな悪公卿には、ほんたうのことは云はれない、どんな事に使はれるかも判らないから、姉小路卿を斬つた奴は、薩摩の田中新兵衛の差料をもつてをつたから、土佐の那須信吾の鑑定で、田中が下手人と云ふことになつたぢやないか、あぶない、あぶない、」

「まさか、」

具慶は苦笑した。

「まさかぢやない、足下や岩倉などと來ては、何をしでかすか判つたものぢやない、あぶない、あぶない、足下

は知らん顔をしちよるが、吾が輩は、足下が姉小路卿のことにも關係しちよると睨んぢよる、」

「ない、そんなことは決してない、わしは、そんなことには、すこしも關係してをらん、」

「どうも怪しい、土佐の偵吏の井上佐一郎を斬つたことにも、眞後の本間精一郎を斬つたことにも、千種家の加川肇、九條家の島左近、それから長野主膳、同心渡邊金三郎、池内大學を斬つたことにも、皆、足下が關係しちよる氣がしてならん、」

「そ、そんなことがあるものか、わしは、そんなことをする男ぢやない、」

怒らしてはどんなことになるかもわからないので、怒らさない程度で對手になつてゐなくてはならなかつた。

具慶は困つてしまつた。

「中山侍從をおだてて、岩倉と千種をやらさうとしたのも足下ぢや、と云ふことぢや、三公卿、五武士を謀つたのは、武市半平太一派の岡田以藏や、田中新兵衛の手合と云ふことになつてをるが、其の實、青蓮院宮を笠に被て、無邪氣な田舍武士をおだてて人殺しをさし、風むきがわるくなると、香川敬三などと岩倉に色眼をつかつて、たうとう岩倉をひつぱり出し、御一新のどさくさまぎれには、あはよくば政權にありつかんと、愛宕通旭などと同腹になつて、德川再興をもくろんだが、ことが破れたと見ると、巧に薩長の權力の中へもぐり込むと云ふ惡當は、とても吾が輩にできない惡當ぢや、」

「いや、人にはそれぞれ考へがある、時勢の變化によつて、やることも變るが、君國のために盡すわしの赤心には、かはりがない、」

「おつと、其の赤心は待つてくれ、足下たちに借し氣もなく、其の赤心をつかはれては、赤心が可哀さうぢや、」

「いや、他が何と云はうと、わしの心には些の曇りがない、天地神明も照覽になつてをられる、」
「おい、おい、外山卿、あまり笑はさないやうにしてもらはうか、足下がいくら、其の赤心をふりまはしても、足下がろくでもないことをたくらんでをることは、何人も知らないものはない、手ぢかな話が、廣澤參議をやつたのも、足下ぢやと云ふ噂があるぞ、」
「ま、まさか、わしが、山田、冗談にもほどがあるぞ、昔の同志と思やこそ、かうして逢つてるのに、冗談もあまりすぎると、よくないぞ、」
具慶は思はず詞をとがらした。山田は笑ひだした。
「まあ、まあ、さう心配しなくてもええ、政府でいくら探しても、下手人が出ないから、判官の玉乃世履が、岡崎恭輔を呼んで、廣澤參議を殺したのは、何人かと云ふから、岡崎がそんなことは知らんと云ふと、君が知らんと云ふことはない、それでも知らんと云ふなら、想像で云へと云ふから、想像で云つて追窮しないなら云つてやらうと云ふと、追窮しないから云へと云ふから、岡崎が、廣澤參議を殺したのは、木戸參議ぢやと云ふと、玉乃もさうぢやと云つて、うなづいたと云ふのぢや、まあ、廣澤參議を殺したのは、木戸參議と云ふことになつちよるから、心配することはないが、なんなら岡崎に、木戸參議と云つたのは、でたらめで、ほんたうは華族外山具慶ぢや、それに、あれは、御一新前には、三公卿五武士を閥つた元兇で、御一新のどさくさまぎれには、鎌川再興をもくろんだ奴ぢやと云はさしや、わけはないが、どうぢや、外山卿、」
「もう、もう、わしをいぢめるのは、よしてくれないか、」
具慶は腹も立つたが、岡崎と云ひ山田と云ひ、あまり命の惜しくない悪戯漢に悪戯にせられては、おそろしい

ので直ぐ妥協に出た。
「吾が輩も、つまらんことは、あまり云ひたくない、云ひたくないが、今日はどうしても云はなければならん、めんだうなことがあるのぢや、」
「なにか、卿、」
「駿河町の町人からまきあげた、一萬兩のことぢや、」
「な、な、」
具慶はそれ以上何も云へなかつた。山田はにやにやと笑つた。
「吾が輩も、わからんことは云はん、其の半分をもらひたいのぢや、」
それにしてもどうしてそれを知つたであらう、具慶はちよつと考へてみたが見當がつかなかつた。
「それを、どうして知つてをる、」
「千里眼順風耳ぢや、」
「うむ、」
「調度司御用命の物品に、因縁をつけて、八幡屋の手代を威しつけ、一萬兩ひつたくつた手ぎは、今にはじまつたことぢやないが、あざやかなものぢや、卿、」
「何處で聞いてまゐつたか、わしにはわからないが、八幡屋はわしが口をきいて、調度司の御用達になつたものぢやから、何かあればわしに責任がある、今日は其のことで、さる處へ往てまゐつた、たとへ八幡屋がわしの處へ、物を持つて來てあるにしたところで、それは八幡屋のものぢや、わし一人でかつてにどうすることもできな

い、必要がなければ、返さなければならんから、」
「おい外山卿、吾が輩を何んと思ふのぢや、其の手はくはんぞ、そんなことでごまかされはせんぞ、」
「嘘と思ふのか、」
「もとより嘘ぢや、吾が輩は、足下をぎうと云はすつもりで、其の方面を調べて來た、名は云はんが、吾が輩には、調度司の官員にも一人二人知りあひがある、八幡屋の納めた夜の物には、すこしの落度も不調法もなくて、反對に出來がええと云つて感心しちよつたぞ、」
「足下は、そんなことを何處からかぎつけてまゐつた、」
「揚雲が四知のいましめぢや、昨日、高輪の知りあひのもとへ往つて、一ばいやつてぶらぶら歸つてくると、此處の前へ二挺の籠が來てとまるぢやないか、夜になつて悪公卿の處へ來るやうな奴は、ろくでもない奴ぢや、どんな奴か見てやれと思つて、足をとめて見ちよると、籠の中から出たのは、人間でなうて、五つの包巾づつみぢや、おやと思つて注意しちよると、八幡屋の手代の白髪頭が、挑燈の光に見えるぢやないか、それぢや八幡屋が犠牲にあがつちよるのか、こいつは面白いと思つたので、御若勢にも手代の出て來るまで待つてて、後から往つて白狀さしたと云ふわけぢや、どうぢや、」
「さうか、」
「夜の物の中に、三本の縫ひ針が入つちよつたから、ことが表むきになれや、八幡屋善右衛門の首が飛ぶ、穏便にしようと思へば、理窟の多い諸生參議の口どめ料をよこせとは、足下はどこまでも腕が凄いぞ、」
「ふ、う、む、」

一方の襖が開いてお多喜が茶を持つて來た。具慶はそれに眼をとめた。
「多喜か、」
お多喜は山田の前の茶碗を取つて新らしい茶碗をおいてゐた。
「は、」
「八重にさう云つて、此の茶は粗末ぢや、彼の玉露をいれてまゐれと云へ、」
「は、」
お多喜はしとやかに出て往つた。山田はお多喜の出て往くのを待つてゐた。
「外山卿、もう、つまらんことは云はん、一萬兩の半分をよこしてもらはうか、」
「いや、彼の金は、八幡屋にあづかつた金ぢや、不必要になれば、返さなければならん、他人にわたすことはまかりならん、」
「なに、いらなくなれや八幡屋に返す、ほんたうに返すのか、」
「返す、わしは、返すのぢや、」
「それぢや返してはどうぢや、吾が輩がもつてつてやらうか、それとも八幡屋から取りに來ささうか、」
「返す時には、わしが返す、足下の出る幕ぢやない、」
「なに、」
「これは、わしと八幡屋の間のことで、いはば私事ぢや、足下の口を出すまくぢやない、」
「調度司を口實にして、町人から金をまきあげることが、なにが私事ぢや、それこそ大それた騙詐ぢやないか、」

「騙詐、騙詐とは聞きすてにならん、いくらへだてのない中でも、あまりつまらんことは云つてもらひたくない、」

一六

輕い羣音がして入つて來たものがあつた。それはお八重であつた。お八重はすました顏をして山田にお辭儀をした後で、盆にのつけてゐた九谷の茶碗の一つを山田の前へおいた。

「これが、彼の玉露と云ふ茶か、これが、」山田はぢつと茶碗の表を見てゐたが、不意に一方の手をのばして、古い茶碗をとらうとしてゐるお八重の右の手首をぐいと握つた。「おい、此の茶を其の方が飲んでみろ、」

お八重の顏の色はかはつてゐた。

「ぶ、無禮者、」

具慶はいきなり右の手を左脇の羽織の下へ入れて、きらりと光るものをとるなり山田に擬した。山田の前には其の前に引き寄せられたお八重の體があつた。

「撃て、撃てるなら撃つてみよ、撃てるか、」

具慶の手にはピストルが光つてゐた。具慶はお八重のかげになつた山田を見はづすまいとした。

「おい、外山卿、撃つなら、此の女から撃て、惡公卿の相棒になつて、毒を盛るやうな鬼婆は、何をしでかすかわかつたものぢやない、まづこれから撃て、」

お八重は山田を振り放して逃げやうとした。お八重の體は飛びたたうとする鳥のやうに動いたが直ぐ引きすゑられた。

「動くな、此の鬼婆、鐵砲の彈をくらはしてやるから、ぢつとしちよれ、」と押し潰すやうにお八重をつかまへた手に力を入れて、「おい、外山卿、撃て、此の鬼婆を撃て、撃てるか、吾が輩は、どうせ惡公卿の邸に來るからには、どんなたくらみがあるかも判らんと思うて、足下の馴じみの岡崎恭輔に話してある、もし吾が輩が、今日歸らないやうであつたら、惡公卿の外山具慶のわるだくみにかかつたから、敵を打てとな、」

惡い奴であるからそれくらゐの用心はしてゐるだらう、へたなことはせられないが、毒藥を知られてはどうかしなくてはならなかつた。具慶は恐ろしい顏をしてゐた。

「おい、外山卿、そんなに此の鬼婆が大事なのか、なぜ撃たん、こんな鬼婆は、今こそ足下の云ふとほりになつちよるが、一朝足下と仲が違ふと、足下に一服盛るくらゐは朝飯まへぢやぞ、どうせたのもしくない奴ぢや、撃て、撃つてから、吾が輩を撃て、うまく打つぱなしや、一石二鳥ぢや、」

具慶の眼は不安さうな眼になつてゐた。

「どうぢや、撃たんか、撃たんなら、此の毒茶を持つて、出る處へ出やうか、」

此の局は全然負けに終つた。具慶はピストルを元の處へさした。

「もう、やぼな喧嘩は、よさうではないか、」

具慶の態度はがらりとかはつてゐた。

「よす、よすならよしてもええ、殺しあひをしたところで、あまり世間がほめてもくれまい、」

「よさう、もういがみあふのはよして、おだやかに話をつけやうぢやないか、」

「それがええ、其の方が當世ぢや、」とお八重にかけてゐた手をとつて、「それぢや、人質はかへす、」

お八重は體が自由になつた。お八重はついと山田の傍を離れて、其の右側にきまりわるさうにして座つた。
「八重、八重はもう彼方へまゐれ、」
お八重は具慶のことばによつて放たれた。お八重は逃げるやうに出て往つた。山田には其の容がをかしかつた。
「女は、やつぱり痴なものぢや、喃、」
具慶の心は其處になかつた。具慶はなんとかして山田の要求をすくなくしたいものだと考へてゐた。山田は考へ込んでゐる具慶の鬼魅悪い顔に眼をやるなりにやりと笑つた。
「おい、外山卿、そんなに考へ込まなくてもええぞ、べつにたいして面倒なことでもないから、」
具慶は其のことばからして口惜しかつた。具慶は先手を打つて形勢をたて直さなくてはならなかつた。
「さやう、ことは甚だ簡單であるが、ただ足下が、わしの云ふことを、徹頭徹尾、信用してくれないから、考へてをるところぢや、」
「足下がほんたうのことを云ふなら、吾が輩といへども信用する、」
「それでは信用してくれるか、喃、信用してくれるなら云ふが、確に八幡屋から金をあづかつてをる、あづかつてをるが、それは將來八幡屋を繁昌さすために、各方面にそれを用ゐやうと思つてをるのぢや、」
「うむ、」
「それで、今日も、其のことについて、某方面へ往つてまゐつたのぢや、」
「うむ、それで、」
「それで、未だあまりがあれば、八幡屋へかへしてやるつもりぢや、」

「もう、町人いぢめは、よすと云ふのか、」
「彼の際は、背に腹はかへられないので、無茶なこともしたが、かう泰平の世の中になつては、そんな無茶なこともできないではないか、喃、」
「それで、」
「まあ、もすこし聞いてくれ、何もかも知つてをる足下には、嘘は云はないから、喃、」
「よし、嘘は云はない、」
「云はないとも、わしは嘘を云ふのは嫌ひぢや、」
「うむ、」
「そこでぢや、足下も金が必要であらうから、わしが責任を負うて、いや、わしが其のうちから借りて、足下に献じたいと思ふ、」
「いくらよこす、」
「そこぢや、」
「うん、そこで、」
「二百兩献じたいと思ふが、どうぢや、喃、」
「へ、二百兩、ばかにするな、外山卿、縫ひ針三本のこしらへごとで、まんまとまきあげた一萬兩に、たつた二百兩の口どめ料たあ、そいつあ、あんまり虫がよすぎやせんか、」
「それでは、いくらと云ふのぢや、喃、」

「まきあげた金が一萬兩で、此のこんたんを知つちよるのは、足下とわが輩二人きりぢや、山わけにするのが至當ぢやないか、」
「無理ぢや、」
「無理なら一錢ももらふまい、其のかはり、宮内卿の萬里小路、岩倉、木戸、大隈、やかましやの大官の間をまはつて、しやべつてやるから、さう思ふがええ、」
「足下は、どうも、人が悪くてこまる、」
「田舍武士をおだてて、三公卿五武士をねらはしたり、藤長の足輕政府を倒さうとしたり、廣澤參議を襲うたり、其の悪公卿より、吾が輩の方が悪人と云ふのか、」
「山田、足下は、どうも困る、それでは五百兩獻じよう、五百兩獻じるから、もう何も云はないで歸つてくれ、」
「吾が輩も、足下のやうな悪公卿には困る、二百兩とか五百兩とか云はないで、千兩箱を五つもらひたい、」
「もう、今日、すでに半分を某方面へ用ゐたから、そんなに殘つてゐない、」
「さうか、それでは、すこし負けてやらう、」
「いくらぢや、喃、」
「二千兩、それからは鑑一文も負けない、」
「さうか、それぢや、今日かぎり、邸へ足ぶみをしないやうにしてくれるか、」
「よろしい、二千兩もらへば、もう二度と來んども、」
「よし、それでは、二千兩出さう、」

欠

「困つたことになつたものぢや、どうして祓うたものであらう、」

龍吉は怪しい影がすくすくと老婆を包んだやうに思つた。龍吉は一つお辭儀をするなり逃げるやうに老女を離れて歩いた。

一氣をおつけでないと、命にかかはるよ、」

龍吉は其のしやがれた聲からしていやであつた。龍吉は急いで己の室へ歸つた。云ひつけられたことさへ果せば、夜まで遊んでゐてもかまはないうれしいことが龍吉を待つてゐた。龍吉はもう鬼魅わるい氣もちなどはけろりと忘れて、そこそこに準備をして出かけて往つたが、窮屈な人切庖丁を持つてゆく必要もないので體も輕かつた。

十時ごろであつた。龍吉は羽をのして歩いた。當時はまだ四民の衣服乘物の制限があつて、平民が乘馬を許されたのは其の年の四月十七日、襠、袴、割羽織を許されたのが其の年の八月十八日であつた。又一般に散髮、制服、略服、脫刀勝手たるべし、但、禮服の節は帶刀すべしと云ふ布告の出たのは其の年の八月九日であつた。衢頭には江戸ながらの通行者が多かつたが、横濱の開港場、高輪應接所、築地ホテル館、築地商社の空氣に刺戟せられた者も交つてゐた。ざんぎり頭にマントルを著て長い刀をつりさげ、片手に蝙蝠傘を持つた官員のやうな男もゐた。唐糸双子の袷の襟に袖時計の金鎖をかけてゐる商人のやうな男もゐた。南校の學生らしいのはざんぎり頭へ編笠を著て、小倉の袴を穿き短い一本刀をさしてゐた。女學生と思はれるのは髷を島田にして、お太鼓の帶の下に仙台平の男袴をつけて下駄をはいてゐた。ざんぎり頭に柳原らしい古洋服を著て、雪駄をはいたのは新島原あたりを徘徊する新浪人であらうか。其の人びとの間を籠が往き、馬が往き、馬軍が往つた。

家並も江戸ながらの家並であつたが、其の中には牛店が交り、油店の店頭には洋燈がおかれてあつた。唐物店

欠

の店頭にラムネのおかれるやうになつたのは其の後のことであつた。牛店のかかりは假名垣魯文の安愚樂鍋の挿繪にあるとほりで、其處では牛肉の小賣もすれば上にあげて牛鍋も喫はした。店の暖簾には牛乳乾酪乳油、乳粉の名もあげてそれも賣つてゐた。御藏前にあつた牛店が東京の牛店の元祖であると云はれてゐた。

善良な龍吉は相政の假兒といがみあつたことも忘れて、日本橋の街路を往き、それから上野の廣小路まで往つた。廣小路には觀花の人が往來してゐる。中には目かつらをつけてゐる者もあつた。もう十二時に近かつた。龍吉は腹がぺこぺこになつたので先づ飯を喫はうと思つた。鮓やおでんの屋臺は其處此處に見えてゐたが、なるだけならゆつくり飯を喫ひたいと思つたので四邊に注意しいしい歩いた。

松坂屋の手前に新らしい繃暖簾のあるのが眼に注いた。龍吉はすぐそれにきめて入つて往つた。其處は土間が左から來て右の方へ鍵の手に折れ曲つてゐる家で、もと何かの商店であつたのを手いれしたやうな處であつた。客が七八人入つてゐた。みな上框の處を緣側のやうに板敷にした處へ膳をおいて、土間の空樽に腰をかけてそれに向つてゐた。其の土間の行詰は庖厨になつてゐて紺の暖簾がかかり、肥つたちよつと嫵と思はれるやうな女と中年の色の蒼い男が其處を出入して客を迎へてゐた。そして、庖厨に添うた方の座敷には帳計處があつて、格子の中に髷を講武所風にした角顱の痩のつよさうな主翁が、客の擧動を見はつてゐるやうにつくねんとすわつて淡巴菰を喫んでゐたが、一見して其のころ流行の士族の商法に飯店をやつてゐる一人であると云ふことが判つた。

龍吉はへんな處へ來たものだと思つてもちよつと躊躇したが、出るのもへんであるから一ぱん左奇の壁際へ往つて腰をかけた。と、媼のやうな女が傍へ來た。

「何をさしあげませう、」

「飯をもらひたいが、おかずは、何があるね、」

「おかずは、魚軒と燒魚と、ぬたと、おつけと、豆腐の煮たのがございます、」

龍吉は魚軒が喫ひたかつた。

「それでは、魚軒とぬたで飯にしようか、」

「承知いたしました、」

かたくるしい繃暖簾の蜂さんだ。女が引込んで往つたので龍吉は右側にゐる客へ眼をやつた、量ばつた包巾づつみを傍においた小銀杏の老人が魚軒と湯豆腐で一本やつてゐたが、痩せて骨ばつた體を前屈にしてゐるので、如何にも主翁に嘆願して食事にありついてゐるやうでをかしかつた。座敷の曲り角のむかふ側にゐるのは、二人伴の髷の前を左右に割つた若い消防夫であつたが、それは三四本の銚子を膳の緣に並べてゐた。二人とも小聲で冗談を云ひあつてゐたが、其のうちに端の方にゐた壯い男が、

「おい、芳ちやん、乃公が一つ歌つてみやうか、」

と云ふと、左側にゐた伴の男が笑つた。

「歌つてみな、またコチヤエだらう、」

「へッ、汝ぢやあるめえし、いつもおんなじものを歌ふもんけい、」

「ぢや、歌つてみな、ギッチョンチョンだらう、」

「そんな、氣のきかねえものを何人が歌ふものか、聞きな、」と手にしてゐた盃を一つ嘗めて「おまへしんでもノウヤコロリンシャン、はかへはやらぬ、サンコロリントサンショエ、やいてこにしてノウヤコロリンシヤン、ヤ

レさけでのむサンコロリントサンショエ、どうだい、兄弟、こんな新らしい唄を聞いたことあ、あるめえ、」
「其の調子は、何處かで聞いたことがあるわな、それや何かの替へ唄だらう、」
「そんなことがあるものか、文明開化の世の中に、古い唄なんか燒きなほして、歌ふ奴があるものか、」
「だつて、をかしいや、ノウヤコロリンシヤン、サンコロリントサンショエ、どこかで聞いた調子だよ、」
「だから、汝は渇鄙でいけねえのだ、ぢや一つどいつを聞かしてやらあ、」と盃をおいて、「ジヤンギリあたまをたたいてみれば、ぶんめいかいくわのおとがする、」
「さうか、」
「さうかぢやねえや、うめえだらう、」
「あまりうまくもねえが、まあ、な、」
龍吉の處へ色の蒼い男が膳を持つて來た。龍吉は急いで茶碗を持つたが其の耳は二人伴の方へ往つてゐた。
「わうせいふくこの、うきよぢやものを、わがはい、もときへかへりざき、」
端の方の壯い男はどいつに興味を持つたらしかつた。
「へチャなげいしやも、くわんゐんさんも、おなじつとめのみのくらう、」
「こんどは、一つおつなところをやつてみようか、」
「なんだ、」
「昨夜、聞きたてのほやほやだよ、」
「やんな、」

「汝は、どんで、あんどんで、わかいしゆに、かきたてられて、とぼされた、コチャエ、」
後のコチャエは尖のある座敷の方から飛び出して來たやうな聲に押へつけられた。
「おい、こら、町人、」
龍吉は顔をあげた、夥計處にゐた主翁の眼が光つてゐた。
「さう云ふ、鄭聲はいかんぞ、論語にも、鄭聲を放ち、佞人を遠ざけよ、鄭聲は淫、佞人は殆し、禮記には、鄭衛の音は、亂世の音なり、慢に比し、桑間濮上の音は、亡國の音なり、其の政散じ、其の民流すと云つてある、それに、まつ白畫、みだらな唄を歌ふとは、言語道斷、控へろ、」

一九

文明開化の世の中に、それで飯店をやつてるくせに、大風なことを云ふにもほどがあると思つて、龍吉は癇にさはつた。
「ふざけてやがる、」
龍吉が不平を吐きだした時、其處に嘲罵の爆發が起つた。
「ていせえがなんだと、此のへうろくだま、なに云やがるのだ、輕子や人夫對手の一ぜん飯店をやつてやがるくせに、ていせえもくそもあるもんけい、ふざけたことを云やがると、此の屋臺骨をたたきこはして、燃しつちまふぞ、」
それは唄を歌つてゐた方の男であつた。續いて起つた爆發は其の伴れの嘲罵であつた。

「さうさ、こんな屋豪骨なんかたたきこはすに、半時もかかるもんけい、も一度、ふざけたことを云つてみやがれ、繩暖簾の乞食商賣しやがつてるくせに、町人たあなんだい、此の二本棒、」

「乃公が町人なら、汝はなんだい、」

「乞食飯店の主翁ぢやねえか、へッ、」

龍吉はりういんがさがつたやうに思つた。

「ちがひねえ、乞食飯店の主翁野郎、」

主翁の額の青筋が脈をうつたやうに思はれた。主翁はがたがたと體をふるはすやうにして飛びあがつた。

「こ、こらへてをれば、いひたいままの悪口雑言、もう勘忍ができない、」

主翁は座敷の左になつた襖を蹴開けるやうにして飛びこんで往つた。龍吉はさすがに驚いた。頑固一徹な狂人爺に刀を揮りまはされてはかなはなかつた。龍吉は消防夫の方を見た。二人の消防夫は起つてゐたが、これもきよときよとした眼をしてゐた。

「放せ、放せ、」

主翁の怒鳴る聲がして、やがていきりたつた主翁と縺れあふやうにして二十四五の男がいつしよになつて出て來た。それは長い刀を脱かうとする主翁の手を支へてゐるのであつた。

「時勢でございます、どうか、どうか、時勢でございますから、」

其の男は伴であらう主翁そつくりの容貌をしてゐた。

「いや、ならん、放せ、放せ、時勢と思へばこそ、こらへてをれば、悪口雑言、」

「そ、それが時勢でございます、どうか、氣をおしづめになつて、どうか、」

媼のやうな女が其の時、二人の消防夫の傍へ往つて何か小聲でささやいた。二人は主翁の方へ冷かな眼をやりながらそれを聞いてゐたが、話がわかつたのか主翁に嘲の一瞥をやつて「へッ」と云ふやうな表情をしながら外へ出て往つた。媼のやうな女はそれを見ると座敷の方へ向つて云つた。

「若旦那、もう、彼の二人は逃げちまつたのでございますよ、」

媼のやうな女の云つた詞は、いきり立つてゐる主翁の耳にはいらなかつたが、壯い男には直ぐ聞えたのであつた。

「もう、今の奴は、逃げてまゐりました、どうか、お父様、」

「なに、逃げたと申すか、」

媼のやうな女が一層聲を大きくして云つた。

「はい、もう逃げちまつたのでございますよ、」

主翁はそれを聞くと消防夫のゐた方へ眼をやつた。消防夫は無論ゐなかつた。主翁は其の眼を龍吉の方へ持つて來た。

「其處にも一人ゐたはずぢや、」

龍吉は手にしてゐた茶碗と箸をいきなり放りだして起つた。

「町人、待て、」

なにいやがるのだ此の痴野郎と思つたが、うす鬼魅がわるいので足を停めることはできなかつた。龍吉は繩暖

簾を撥きわけて外へ走りでた。出口には數人の體があつて龍吉の體にぶつつかつた。龍吉はそれを押しのけるやうにして走つてゐたが、走つてゐるうちに心に餘裕が出來た。餘裕が出來るとともに伴のやうな壯い男が、あんなに留めてゐたから、追つかけて來ることもないだらうと思ひだした。龍吉は走つてゐるのがきまりがわるくなつたので直ぐ足を停めて振りかへつた。縹曖簾の前に立つてゐる十人ばかりのうちで、五六人の者が此方を見て白い齒を見せてゐた。

「笑つてやがるのだ、」

龍吉ははづかしかつた。龍吉は足の向くままに逃げるやうに歩いた。歩いてゐると飯店の主翁が消防夫の歌を叱つたことから、怒つて刀をひねくりまはしたことが滑稽な繪となつて眼の前に浮んで來た。どうせ旗下かなにかだらうが、飯店をやりながら昔の襟度をとりさることができないで、客といがみあふと云ふのはなんと云ふことだらうと思つた。それとともに龍吉は金をおかないで來たことを思ひだした。金をおかなかつたのは消防夫の二人もおんなじであつた。毎日あんなことをしてゐたら、結局商賣にはならないだらうと思つた。龍吉は聲をあげて笑ひたかつた。

龍吉は充たされてゐない胃の腑に空虛を感じて來た。龍吉はもう三橋の左側になつた橋を渡つてゐた。龍吉が蛇酒を買ひにゆく店は、山下の街路から車坂の街路へ曲つたところであつた。蛇酒は小さな壺子に入れたものであつたが、荷物になるので買ふのは夕方にしなくてはならなかつた。龍吉はとにかく何か喫つてからにしようと思つた。

廣い街路の右側には數軒の料亭があつた。其の料亭の中にある雁鍋は聞えた家で、龍吉は人から聞かされて已

のなじみの家のやうな氣がしてゐたが、これまでの境遇上已違はそんな處へあがれる資格がないとでもきめてゐるのか、其處へあがらうと云ふ氣はしなかつた。其のあたりには櫻の枝の折つたのを肩にして何か歌ひながらよろよろと歩いてゐる者もあつた。編笠を著て厚化粧をした鳥追のやうな三人伴の女が、三絃をひきながら山の方へゆく後から、童子まじりに若い男のついて往くのも見られた。路傍の屋臺で衣かつぎを喫ひながら茶碗酒を飲んでゐる者もあつた。

路の左側の不忍池畔に寄つた方に、はんぺん汁が名物で芳原の朝がへりを迎へる家があつて、其處の掛行燈には近ごろまで家號のかたはらへ細字で、すこしつんぼと書いてあつた。龍吉は一度入つたことがあるので、其のはんぺん汁へ入つた。そして、飯を喫ひ、後で小叔の家へ往かうと思つたが、觀花の人出が見たくなつたので、山内へ往つて彼方此方と遊び、落日に近くなつて山をおりた。

山をおりて山下から車坂の方へ曲らうとしたところで、後の方から男の聲と女の聲が入りみだれて、それが叫んだり笑つたりがやがやと騒ぎながら來るものがあつた。龍吉は立ちどまつた。三十人ばかりの觀花がへりで、助六になつたり、あげまきになつたり、脊のづぬけて高い大男が前髪の小姓になつてゐる容はわけてをかしかつた。酒家の家族と雇人からなる一團であつた。龍吉は其の一行をやりすごして後から往かうと思つた。龍吉は街路の右側へついと寄つて往つた。其のとたんに何處から來たのか牛糞著の小柄な紺屋の職人のやうな男が來た。

「あつ、」

「これは、」

二人の體ははづみをくつてぶつつかつた。其のひやうしに龍吉は三十前後に見える對手の男の左の小鼻の處に

黒子のあるのを見た。
「これは、どうも、」
「いや、わつしが、」
もののはづみであるから双方ともに善いも悪いもなかつた。龍吉は對手の男に氣のどくであつた。對手の男がちよいと頭をさげた時、龍吉はぴよこりと頭をさげて左右へ別れた。

二〇

花見がへりの一行は御徒町のはうへ折れて往つた。其の一行の後にふうわりと浮んだ埃を夕陽が紅く染めてゐた。龍吉は左へ折れて車坂のとつつきになつた彼の蛇店へ往つた。店の右側を土室にして左側を板敷にした蛇店は、板敷の前へ臺を置いて其の上へ金網の函を二個並べて蛇のいろいろを入れてあつた。寒さを恐れる此の長虫は、陽春三月の陽氣に暖められてうようよとうごめいてゐた。縞蛇、烏蛇、青大將。蝮は金網の中へ置いた石の間にぢつとして小さな赤い斑點のある腹を見せてゐた。金網の上の天井には、鰍鰍や鮫鯉の甲良をつろし、八目鰻などの乾したのも釣してあつた。
「今日は、」
店には寬い額になまづの出たやうな肥つた男が藥研で何かおろしてゐた。
「これは、いらつしやいまし、」
いやな匂が龍吉の鼻にしみた。龍吉は胃に溫みを覺えた。ものにとんちやくしない龍吉も、蛇店に來ると神經

的にむかむかするのであつた。
「どうか、おかけくださいまし、」
主翁は直ぐ蒲團を持つて來て緣側へ敷いた。
「これは、どうも、」
蛇の寢床に敷いてあつたやうな氣がして鬼魅がわるいが、腰をかけないわけにゆかないのでしかたなしに腰をかけた。
「あなたは、たしか、芝の大家からでございましたね、」
「さうだよ、芝だよ、」
「遠方の處を、御苦勞さまでございますね、」
「なに油をうるにいいのだよ、」
「それにお天氣でございますから、へい、今日は、お山もたいへんな人出だと云ふぢやありませんか、」
「さうだね、たいへんな人出だね、」
「もう、お山へ往つてらつしやいましたか、」
「ああ、ちよつとね、」
「さやうでございましたか、なるほどね、遠い處へいらつしやるかはりに、お觀花ができれば、まんざらでもございませんね、」
「さうだよ、」

龍吉は笑つてみせた。
「では、いつもの鰻の方でございますね、」
「ああ、いつものを一壜子ね、あれをもらひたいが、」
「承知いたしました、それに、今日は、いつもよりずつと良いのができてをりますから、鰻も上等でございます、」
「さうかね、それはいい、」
主翁は板敷の方へ往つて後の棚の上にある大小の壺や壜子の中から一つの壺を執つて、それを上下に揺り動かしてゐたが、やがて棚の下の引抽から壺の形をした五合入ぐらゐの壜子をだし、小さな漏斗をしかけて、油搾粕のやうな杓で壺の中から白く濁つた液體を汲んで移しはじめた。其の時であつた。主翁の頭の上になつた天井裏で、鼠でもあらうか、かた、かた、かたと物の駈けあるくやうな音がした。龍吉は鰻酒の中へ塵が落ちては困ると思つて壜子の方を見てゐた。其のうちに天井裏のかたかたかたと云ふやうな音は、がら、がら、がらがら、がらと云ふやうな、物を引きずるやうな、また聞きやうによつては綱の端を打ちつけるやうな最初の音よりも強い音にかはつた。龍吉は飼猫でもあがつて鼠を追つかけだしたものだらうと思つた。すると主翁が云つた。
「これ、これ、さうざうしいぞ、鼠でもゐるのか、靜かにしないのか、」
鼠でもゐるかといふからには、最初にかたかたかたと駈けあるくやうな音をさせてゐたのは鼠ではなくて、猫か何かであつたらうか。
「猫かね、」
「あれですか、あれや、うちの太郎ですよ、」

太郎つて何だらう、天井裏の物音はまたかたかたかたと鼠の駈けあるくやうな音になつた。
「猫ぢやないかね、」
「ね、こ、まあ、ねこのやうなものですが、」
猫のやうなものとは何であらう、龍吉は不思議に思つた。
「なにか飼つてるかね、」
「なに、うちの、猫ですよ、猫ですよ、」
「さうかね、」
天上裏のかたかたかたと云ふ音は、またがらがら、がらがら、がらがら、がらと云ふ物を引きずるやうな音になつて來た。
「これ、お客さんだと云ふのに、なぜおとなしくしないのだ、これ、これ、」
天井裏の物音は不意に小さくなつた。
「わかるのだな、」
「よく、てまへの云ふことを聞くのですよ、かあいいものでさあ、人間とおんなじですからね、」
「さうだ、なあ、」
龍吉の右の足首に何か露のやうなひやりとしたものがさはつた。龍吉は何だらうと思つた。一疋の青大將が鎌首をもつたてて針のやうな紅い舌を出し出ししてゐた。
「わつ、」

龍吉はひつくりかへるやうにして座敷へ飛びあがつた。
「こ、こら、次郎ぢやないか、こら、」主翁は燈子を手にしたなりに此方へ來て土間へ眼をやつて「次郎、いけない、いけない、お客さんのゐらつしやる時に、出てはいけないと云つてあるのに、いけない、いけない、彼方へ往け、彼方へ、」
龍吉はやつと氣が落ちついて來たので土間の方へ眼をやつた。一丈ばかりある宵大將が主翁に叱られて縁の下へ入つて往くところであつた。
「なに、あれや、うちで放し飼ひにしてある奴ですよ、お客さんのゐらつしやる時には、出ないことになつてるのですが、陽氣のかげんでせうよ、」
「さうかね、びつくりしたのだ、」
長虫はまだ座敷の上にもゐさうで鬼魅がわるいので、龍吉は急いで土間へおりて履物を拾つて穿きながら周圍を見まはした。
「もう、大丈夫ですよ、もう出やしませんから、お嫌ひですか、」
あまり蛇の好きな奴もゐないだらう。龍吉は苦笑した。
「まあね、」
「てまへなんざ、饅ほどにも思ひませんが、」と笑つて、「どうもお待たせいたしました、」
「金は、平生のとほりかね、」
「さやうでございます、平生のとほりでございます、」

「さう、」
龍吉は懐にしてゐた財布へ手をやつた。財布は手に當らなかつた。
「おや、」龍吉はあわてて懐を開けた。大家から渡されてゐる財布の首からかけた眞田紐はあるが、肝心な縞の袋はなくなつてゐた。「しまつた、」
「どうかなすつたのですか、」主翁は蛇酒の燈子を持つたなりに顔を持つて來た。「どうかしたのですか、」
「やられたのだ、」龍吉の頭に觀花がへりの一行をやりすごさうとした時にぶつかつた男のことが浮んで來た。「あん畜生だ、あん、」
「櫻徒ですかい、」
「盗兒だ、畜生、まだ其のへんにまごまごしてるかもわからない、待つておくんなさい、とつつかまへる、」
龍吉は其のまま蛇店の店頭を飛びだした。紺屋の職人のやうな男の右か左かの小鼻には黒子があつた。龍吉は山下から御徒町へ曲らうとする處へ往つた。陽の落ちたばかりの空には陽の光が明るく漂うてゐた。同時に山の上で鐘が鳴りだした。鐘の音はあたりの空氣を顫はして頭の上に落ちかかるやうに聞えて來た。
「鐘だ、」
龍吉は其の鐘の音に何か重い責任があるやうに思つたが、引き裂いてやりたいやうに怒つてゐる櫻徒に對する怒りで頭が一ぱいになつてゐて、何のために鐘の音に重い責任があるやうに感じるかと云ふことを反省する餘裕がなかつた。龍吉は其の周圍を往來してゐる人の中から小鼻に黒子のある顔を見つけやうとつとめた。しかし、龍吉の尋ねる顔は見つからなかつた。盗兒が元の處にまごまごしてゐるのは、捕まへに來るのを待つてるやうな

ものであつた。龍吉は己の淺慮であつたことを己で嘲りながら黒門の方へ往つた。門柱の彈痕に彰義隊の名ごりを留めた門のあたりは、花見がへりの人で雜踏してゐたが、もう微暗くなつてゐたのではつきりと其の人びとの顏を見ることができなかつた。

龍吉は山をおりて廣小路の方へ往つた。廣小路には鮓やおでんの屋臺の燈があり、兩側には店みせの燈があつて明るかつた。雁鍋の側からはんぺん汁のある方の側を探して三橋の側へ往つた。龍吉は其處へ往つてお濱と約束したことを思ひだした。鐘の音に何かしら重い責任のあるやうに感じたのはそれがためであつた。龍吉は思いことをしたと思つて、其の附近を彼方此方と歩いてお濱を探したが見あたらなかつた。それに約束の時刻から一時ぐらゐもすぎてゐるので、それまでお濱がゐさうにも思はれなかつた。龍吉は其のうちにお濱のことは忘れてしまつた。

龍吉は池の端を歩いてゐた。池の端には富家の寮が點在してゐた。某一軒の寮の前へ往つたところで二挺の籠が來てゐて、門の中から出て來た二人伴の者がそれに乘らうとした。龍吉は好奇にどんなものが乘るだらうと思つて、其の前の柳の陰へかくれて注意した。注意して龍吉は隈を圓くした。二人伴の一人で一方の垂れをまくらうとしてゐるのはお八重で、一方の籠の前に立つたのは彼の食客の吉岡であつた。

「おや、」何事にも吉岡吉岡と云つて此の食客を呼んでゐる女は、暮夜かうして怪しい寮に二人で出入してゐるのであつた。「ふざけてやがる、」

醜い男女を怒る憤と擯徒に對する憤をいつしよにした龍吉は、曲るともなしに湯島天神へ曲つてそれから又廣小路へ出たが、其の時になつて空腹をおぼえて來た。龍吉は小叔の家へ往つて飯を喫ひ、金を借りて蛇酒を受け

とつて往かうと思つたが、もう一年あまりも往つたことがないので、往くのもきまりがわるかつた。それに考へてみれば生馬の目をぬかうと云ふ盜兒が、其のへんにまごまごしてゐさうにも思はれなかつた。龍吉はとにかく大家へ歸つて、盜られた金はお濱にたのんで給金からさし引いてもらうことにして始末をつけやうと思つた。龍吉は癪ばかしいがしかたがないので足を返した。

二

龍吉は唯ある小料亭の前にゐた。龍吉は體のむきをかへやうとした。中で婢にあいそを云はれながら暖簾を分けて出て來たものがあつた。片手にをりをぶらさげた半纏著の小柄な男であつた。龍吉はおやと思つて足をとめた。それは紺屋の職人のやうな左の小鼻に黒子のある男であつた。

「野郎、」

龍吉はつかつかと往つて敵の腹掛をした胸元をつかんだ。敵は驚いて揮りはらはうとした。

「な、なにしやがるのだ、」

「野郎、乃公の顏がわかるのか、」

「そんな顏、知るものか、知らねえや、なにしやがるのだ、」

「なにも、くそもねえ、さつき、夕方、山下から車坂の方へ往く、いや、それよれや、御徒町の方へ往く處で、觀花がへりの連中をやりすごさうとしたところで、ぶつつかつたことを忘れたか、汝がいくらしらをきつたところで、其の小鼻の黒子が生きた證據だ、」

「――――」
「どうだ、野郎、」
「いや、知らねえ、こつたかへしてた人中だ、ぶつつかつたかも知らねえが、乃公には覺えがねえ、それがどうしたと云ふのだ、」敵が強くなつて來た。「乃公が、なにを、どうしたと云ふのだ、さあ云へ、」
「なにいやがるのだ、此の盜兒野郎、」
「ぬ、盜兒だ、乃公が盜兒だ、此の狂氣野郎、それには、なにか證據があるのか、」
「證據もくそもあるものか、」
「此の狂氣野郎、」
「盜兒野郎、」
横からづつと來て龍吉と牛纏著の間へ體を入れたものがあつた。
「龍吉さんぢやないの、なにしてるのだよ、」
それは女の聲であつた。
「た、たれだい、」
「わたしよ、」
龍吉は初めて其の顧を見た。それはお濱であつた。
「お、は、まさんか、」
「なにしてるのですよ、」

「ああ、」
「ああぢやありませんよ、あんなにわたしを待たしといて、困るぢやないの、喧嘩なんかして、」
敵の胸元にかけてゐた手が其の時ずらけた。龍吉は盜兒をつかまへてゐるのに喧嘩と思はれるのが癪であつた。
「け、けんくわぢやねえ、此の野郎、擂徒だ、」
「なに、擂徒、」
お濱は驚いて龍吉の敵を見た。敵はもう見えなかつた。
「おや、」
「逃げやがつた、あん畜生、」龍吉はつらつらとあたりを見た。五六人立つてゐる往來の人が上野の方へ眼をやつてゐた。擂徒の逃げた方を見てゐるのであらう。「逃げたつて、逃がすものかい、あん盜兒野郎、」
お濱は走りださうとする龍吉の袖をひかへた。
「およしよ、つかまへたつてしかたがないぢやないの、何かすられたの、」
「彼の金さ、夕方、蛇店へ往つててすられたのだから、寄から彼の野郎を探してたのだ、」
「だから、來なかつたの、」
「蛇店へ往つて、それが判つたから、ふんづかまへやうと思つて、彼方此方してたものだからね、」
「さう、ぢや、まあ、此方へいらつしやいよ、」
お濱はもう上野の方へ往きかけるので、龍吉もいつしよに跟いて往つた。
「お錢なんか、どうでもよかつたぢやないの、なぜ來なかつたのさ、たいへんなことがあつたわよ、」

お濱のたいへんなことと云へば、酢ばらひにでも追つかけられたのか、それとも犬にでもほえられたのか、どつちにしたところでたいしたこともなからうが、此方こそ飯屋の主翁に刀をひねくりまはされたり、櫻徒に逢つたり、おまけに青大將に足首をなめられたりしてえらい目に逢つてゐる。龍吉はをかしかつた。

「どうしたのだね、」

「罰があたるよ、汝さんは、」

「なんだい、」

「驚いちや、いけないよ、」

またお濱のおかぶがはじまつた。

「なんだい、」

「なんだいぢやないわよ、ほんとに汝さんは、他の氣心をくまないから、情なしだよ、」

「なにが情なしだよ、をかしい、なあ、」

「なにがをかしいの、ほんとに汝さんたら、じれつたいから、おこるよ、」

「ぜんたい、それや何のこつたい、ほんとに今日は、へんなことばかりだなあ、午飯を喫ひに入れや、町人が氣にくはないつて、飯店の主翁が人切り庖丁をひねくりまはすし、櫻徒にや逢ふし、蛇店へ往きや、青大將に足を嘗められるし、だいち、朝出る時、彼の老女樣の婆さんに、邪鬼にをかされてるから、氣をつけないと命にかかはるなんて、えんぎでもないことを云はれるし、それにまだあん畜生、」お八重と吉岡のことを云はうとしてふとやめた。「盜兒野郎、ふんづかまへて、ぎうと云はせてやりたかつた、あん畜生、」

「嬰兒、ねえ、汝さんは、それに暢氣だよ、他の氣も知らないで、」

「暢氣なことがあるものか、人切り庖丁があたれや、首がとぶちやないか、それに青大將と來てるのだ、かなはねえや、」

「そんなこと、どうでもいいよ、それよれや、わたしの云ふことをお聞きよ、」

「だから聞いてるぢやないか、なんだい、」

「ぢや、云つてあげるわよ、ほんとに罰があたるから、」

「おいなりさんかい、」

「ばか、」

「なんだい、」

「御後室樣が、大家では人目が煩さいから、室町の衣肆へ遊びかたがた、お召物をおあつらへにいらつしやると云ふことにして、湯島天神の松金屋ね、男坂上の大きな料亭よ、其處へいらして、汝さんを待つたぢやないの、御飯をいつしよに召しあがるつて、今朝わたしが、あんなに謎をかけてあるのに、わからなかつたの、」

「わからなかつたよ、」

「しやうのない人だよ、此の人は、あんなうへつがたに思はれて、うけにはいつてるところぢやないの、しつかりしなさいよ、それで、いくら待つても待つても、汝さんが來ないものだから、お諦めになつて、今、お歸り遊ばしたところよ、わたしは中へたつて、ほんとに困つたぢやないの、汝さんはなんと云ふ人だらう、」

「櫻徒をふんづかまへようと思つたものだからね、」

「困つた人、ねえ、」
「乃公も困つたよ、汝さんが邪魔するものだから、せつかくふんづかまへた奴を、逃がしたのぢやないか、」
「攫徒が證據になるものを持つてるものかね、それこそあべこべに、豪い目に逢はされるよ、逃げてもらつてしあはせだよ、およしなさいよ、それよれや、己のことを老へれやいいよ、汝さんの出世ぢやないの、女子にすれや玉の輿と云ふところだよ、」
お濱の云ふことは大げさであつた。
「へエ、」
「ばか、笑ひごとぢやないと云ふのに、眞劍ぢやないの、此の人は、男一疋が、一生の運不運のわかれるところぢやないの、しかたがないから明後日のお演戯まで待つのだよ、」
二人はどんどんの傍の鰌汁店の前に來てゐた。龍吉は其の掛行燈を見つけた。
「待つてもいいから、お濱さん、金をかしておくんなさい、給金で拂ふから、酒ももらつていかなければならんし、腹がぺこぺこでもう歩けないや、」
「ばか、ねえ、此の人は、」
お濱は龍吉に金をわたして淺草の方へ別れて往つた。龍吉は鰌汁店へ入つた。

三

舟は淺草御藏の前へ來てゐた。其の淺草御藏の五番堀と六番堀との間になつた河岸に、亭亭と聳えてゐる一株

の老松があつた。それが首尾の松であつた。空は鏡だつて風もやはらかであつた。本所の方の空に昇つたばかりの朝陽が其の松に華やかに射してゐた。そして、大川の水は天鵞絨を敷いたやうに中高に盛りあがつて、其のあたりに散らばつた船と鷗の群を刺繍にしてゐた。船の中には屋形船も交つてゐた。それは押繪の景致であつた。
舟には慶子がお濱と龍吉を伴れて乘つてゐた。それは三座の演戯のはじまる日であつた。一行は微暗いうちに芝口へ出て其處の船宿から梭舡を出さしたところであつた。鷗の群は舟に驚いてばらばらと水を離れながら、朝陽の光を羽に受けて其のあたりをぐるぐると舞ひながら飛んだ。
「もう、演戯はじまつてるだらうか、」
慶子がお濱に話しかける詞を龍吉はうとうとしながら聞いてゐた。
「さやうでございますね、これから本狂言がはじまらうと云ふところでございませう、」
「さうか、ねえ、」
「さうでございますとも、それに初めの齣なんか、つまりませんよ、鎌倉山は未だ見たことはございませんが、加賀見山は六つ目の草履打ちと、長局でございますよ、それに田之助でございますから、それさへ見るなら、他の齣は、どうでもよろしうございますよ、」
「さう、ねえ、」
「それに番附には、北條の奥方衣笠、髪結のおかね、白妙などを勤めることになつてをりますが、あれは皆すてやくで、ほんたうに勤めるのは、六つ目と長局の尾上で、觀花と試合場は、榮三郎が勤めるさうでございますから、」
「やつぱり體が不自由だから、ねえ、」

「さやうでございますよ、わたしも此の四五年、つがふがあつて、奉公にあがつたりなんかして、體にひまがございませんから、人の噂を聞くばかりで、ほんとに田之助のことはぞんじませんでしたが、一昨日の晩、兄の家へまゐりまして、田之助の家へ出入してゐるものから聞きますと、田之助の切り取つたと云ふのは、右足だけで、他はなんともないさうでございます、」

「右の足を切つてから、もう四五年になるだらう、何時か義足で、ふた座かけもちに踊めたと云ふやうな噂があつたから、」

「それは昨年でございましたよ、中村座と守田座をかけもちましたのは。それにつきまして、御後室様にお目にかけるものがございます、」お濱は思ひだしたやうにして帯の間へ片手を入れて「兄から貰つて來たものがございます、」

「なんだね、」

「これでございますよ、それは」お濱は何か探しあてた。「あ、ありました、ありました、」

お濱は小さく折りたたんだ古い册子のやうなものをだした。それは表紙の黄ろな小形の半紙を五六枚綴つたもので、標題に草書でもしほ草とした、慶應四年閏四月十一日に第一編を出した新聞紙の一つであつた。横濱在留の外人ウエンリートと云ふのが經營して、岸田吟香の編輯してゐたものであつた。それはもしほ草の第二編で、定價壹匁と云ふ文字が其の表紙に刷り込んであつた。

「此の新聞紙に田之助のことがあつて、」

慶子はそれを手にして文字に眼を落しながら頁を繰つた。

「さやうでございます、わたしは文盲でございますから、」とお濱は笑つて、「龍吉さん、汝さん、字を知つてるの、」

龍吉ははつと思つて眼を開けた。龍吉はお濱の顏を見た。

「なんだい、字つて、」

「字さ、書物よ、書物が讀めるの、」

「いろはなら知つてらあ、」

「知つてるの、それやえらいね、」

「汝は、」龍吉はさう云ひかけて慶子の前へと云ふことに氣が注いた。「お濱さんは、どうだね、」

「わたしは、夜學はつた字だから、壹は讀めないさ、」

かうもりみたいだねと龍吉が云はうとしたところで、慶子の聲がそれを抑へるやうに聞えた。

「ある、ある、ありますよ、田之助のことが、」

「ありましたのでございますか、」

「あるよ、ちやんと書いてある、足のことがね、」

「どんなに書いてございます、」

「讀んでみやうかね、」

「どうか聞かしていただきます、」

「それぢや讀んでみやうかね、江戸の俳優澤村田之助、」と慶子はもしほ草の中にある田之助に關する記事を讀みはじめた。其の記事と云ふのは、江戸の俳優澤村田之助去る卯年九月脫疽を患んでアメリカ國の名醫平文先生に

病治を乞ひしに右の脚を股の處より切り取りてあとに藥をつけたり、扨て其のとき田之助のたのみにて平女の國許へ脚を注文せしが二三日前にあつらへの脚一本アメリカより來れり、近きうちに脚つぎに田之助横濱へ來るべし、但し去る三月中、脚一本にて江戸の舞臺をつとめしに樂昌なしければ狂句に舞臺でもまただつそうが大あたり、句主不知と云ふのであつた。慶子は狂句に興味を見いだした。

「舞臺でもまただつそうが大あたり、面白いことを云ふぢやないの、卯年の九月つて、卯年と云ふのは慶應三年だから、義足の來たのは明治元年だね、いくら船來ものでも、義足をしたら不自由だらう、」

「さやうでございますよ、ほんとに可哀さうでございますよ、あんな佳い俳優が、」

船頭のがすがすした潮に茹つたやうな顏が艪の方から聞えて來た。

「お女中さん、そんなに田之助が好きなら、呼んでみたらどうだね、足は義足でもこたへられねえぜ、」

お濱は慶子のわかやいでゐる心地を一層わかやがしたかつた。お濱は船頭の方を見た。船頭はずんぐり坊主に白髪のちよびちよび生えた頭へ鉢巻をしてゐた。

「呼ぶつて、どうして呼ぶのよ、船頭さん、」

「演戲茶坊でも、山谷堀の船宿でもいいや、其處の男衆にたのんどけば、演戲がはねるとすぐやつて來るさ、だがね、女の子はいくらほれても、面と向つては恥かしがつて、かたくなるので、そこは俳優の方はなれてるから、室へ入るなり、いきなり女の首ねつこに手をかけて、話をするものだから、女もすぐなれつちまふのだ、さうしといて、改めて二人で差向ひになつて、それから酒でも飲まうと云ふ寸法なのだ、どうだいお女中さん、」

船頭は面白くてたまらないと云ふやうにひいひいと笑つた。

「さう、そんなにあつさり、俳優が呼べるものなの、」

お濱は笑ひ笑ひ慶子の顏を見た。慶子も笑ひながら龍吉をぢつと見た。

「龍吉、どう、」

龍吉は船頭の云ふことが癪ばかしかつた。

「へェ、」

「わつしが金杉にゐた時、高輪の旦那のお伴をして、中村座の裏茶坊の、若狭屋へ往つたところで、旦那が俳優を呼ぶのを知つてゐるかと云ふから、知らないと云ふと、ぢや後學のためだ、見せてやらうつてえので、男衆を呼んで耳うちすると、男衆がわつしを裏二階へ伴れてつて、此處へ隠れてるがいい、今に面白いことがあるからと云ふのだ、呼吸もせずに待つてると、もうかれこれ五十ぐらゐになるうす痘痕のある婆さんがあがつて來て、淡巴菰を喫んでるところへ、名代俳優だと云つたが、妹な俳優があがつて來たのだ、模樣のある振袖を著て、樂屋銀杏にしてゐたつけ、それが二言三言云つてるかと思ふと、もう首ねつこだ、わつしも驚いたね、」

「俳優つて、そんなに手輕に呼べるものなの、」

「お金さへあれやあ、わけなしだよ、」

「いくらぐらゐかかるの、」

「さあ、ちよいと呼ぶなら、一兩二分に、跟いて來る男衆に二朱づつ祝儀をくれてやれやいいが、立俳優になると、弟子が三人、男衆が二人、まだ留場が跟くから、かかりも多きくなるが、ただ贔屓に呼ぶならたいしたこともないさ、傍へ惹きつけて、校書から男妓まであげて遊ぶとなると、三十兩はかかると云ふのだよ、」

「三十兩、ねえ、」
「とかく、世の中は金さ、金さへあれや、なんでも面白いことが出來るさ、」
「さう、ねえ、お寶だよ、ねえ、」

二三

舟はもう御厩河岸に來てゐた。慶子は直ぐ上流にかかつた橋を見つけた。
「橋、彼の橋は、」
龍吉は慶子に應を促されたやうに思つた。
「あれや、大川橋でさあ、」
「さう、大川橋、」
「あすこからあがれや、淺草の觀音樣でさあ、」
鷗は天鵞絨の川面に浮かんだり飛びたつたりした。慶子は其の鷗に眼をとめた。慶子は、白き鳥の騎と脚いとあかき、嘴の大きさなる、水の上に遊びつつ魚をくふ、と云ふ伊勢物語の文句をふと思ひ浮べた。
「都鳥」、名におはばいざこと問はむ都鳥の歌が浮んだ。「なんと云ふの、彼の鳥、」
うへつがたと云ふものは他愛のないものだと思つた。龍吉はすまして云つた。
「鷗でさあ、都鳥つて云ふのは、向島の料亭でさあ、」
「さう、ねえ、」慶子は無邪氣な龍吉が可愛ゆくてたまらなかつた。「汝、其の料亭を知つてるの、」

「前を通つたことがあるのです、」
「さう、ほんとに汝は、罪がないわ、ねえ、」
お濱が口を挾んだ。
「傷へつける燒酎を口へつける人なのですから、」
慶子とお濱はむし笑ひに笑つた。龍吉はきまりがわるかつた。
「つまらねえ、」
「でも、ひどい怪我でなくて、よかつたわ、」
慶子は龍吉の頬と額の瘢に眼をやつた。
「ほんとに佳い男を、だいなしにするところでしたわ、」お濱は云はうとした後の詞を控へた。
船頭が意ありげに一つ大きなしはぶきをしたので、
「其の壯佼は、田之助そつくりでさあ、佳い男だ、大家の貴公子と云つてもいい位だ、佳い男に生れるほど德なものはないや、おなじやうにお女中方のお伴をしても、ただの仲間あつかひにやせられやしないから、」
船頭は何か獨りでわかつたことでもあるやうにしてひいひいと笑つた。慶子はふいと龍吉から眼をそらした。
慶子は船頭の詞に何處か癪いところをつつかれたのであつた。
「さうだよ、ねえ、」
お濱は軈くあひづちを打つたものの、船頭の詞に御後室樣が氣をわるくしたやうであるから、それ以上は對手にならなかつた。

「さうさ、男に生れりや佳い男に、女に生れりや佳い女に生れたいものだな、佳い女なり、男なりに生れりやあ出世ができるのだ、たとへ顔はそれほどでなくつても、腹の中がきれいで、心意氣があるなら出世するのだ、今の參議でも太政官でも、やつぱり御一新の前に、江戸へ弓を引いた時は、祇園や島原の太夫に可愛がられてたと云ふぢやないか、男に生れて、女の子にもてないやうな唐變木は、何も出來つこなしさ、やつぱりわつしのやうに、梭船の船頭で一生をはらなくちやならないや、」

「さう、ねえ、男でも女でも、やつぱりきれいに生れたら、德だよ、ねえ、」

「早い話が、佳い女の子があれや、金になるさ、」

舟は大川橋をぬけて右に向島の堤防を望み、左に待乳の森を望んだ。耳をすますと太鼓の音が水に落ちて響いてゐる。三座の演戲の太鼓であらう、お濱はすぐそれを耳にした。

「太鼓が聞えてをります、」

三人を乘せた舟は山谷堀に入り、今戸橋の下をくぐつて左側の河岸へ著いた。其處には船宿の棧橋がそれぞれ客を迎へてゐた。新芳原の嫖客と隅田川行樂の客によつて賑つてゐた船宿も、維新の變革のあふりをくつて、元三十軒あつたものが其の前年即ち明治三年春にはもう十八軒しか殘つてゐなかつた。近江屋吉兵衛、美壽屋熊次郎、伊豆屋鐵五郎、小島屋佐助、鎌倉屋清次郎、和泉屋房吉、中村屋金次郎、蓼田屋芳次郎、岡田屋勘吉、大黑屋直次郎、仇屋吉五郎、小樹屋たか、富岡屋八郎次、榮屋彌助、大和屋熊次郎、天萬屋源兵衛、川口屋六三郎、角中村屋久助と云ふやうに十八人の名が記錄に殘つてゐるが、其の年になつては未だそれよりもすくなくなつてゐたのであらう。三人は乘つて來た舟の關係から伊豆屋の棧橋をあがつて、其處の婢に送られて中村座へ往つた。

一行は砂利場から曲つて俗に北しん丁と呼ばれてゐる街路へ折れ、それから猿若町の三丁目へ出た。其處には中村市村の二座と競うて初日を出してゐる河原崎座が客を呼んでゐた。櫓の幕、釣看板、繪看板に華やかな色彩を見せる一方で、建てつらねた幟を有りなしの春の朝風になびらして、樽と蒸籠を積みあげ、引幕を飾りたてて景況を見せてゐた。其の離路の中を大茶坊の男衆は毛布と火鉢を持ち、婢は茶の土瓶と菓子皿を持つて、客を案内しながら茶坊と東西の茶坊口との間を往來してゐた。其の男衆は双子の縞の袷を尻端折つて下から千草の股引を見せてゐた。男衆と婢は料理の鉢を運び朱塗の辨當箱を運んで往くのであつた。

「憎らしつたら、中村座にかかりあつてるのでございますよ、」

お濱は河原崎座で何をやつてゐるのかそんなことは念頭になかつた。

「さう、」

慶子の心は演戲になかつた。慶子は己の後を歩いてゐる龍吉の氣配から離れなければよかつた。龍吉の眼は繪看板に惹きつけられてゐた。

二丁目の市村座も川原崎座と同じ程度の景況を見せてゐた。川原崎座にも市村座にも興味のないお濱は、皆をひつたてるやうにして一丁目へ急いだ。一丁目の中村座前の賑ひは川原崎市村の二座を合はしたよりも盛んであつた。櫓には桔梗紫へ角切角に立銀杏の中村座の紋を白く染めぬいた幔幕を張り、釣看板の一方に岩藤の草履打ち、一方に佐野源左衛門の三浦荒次郎を討たうとしてゐる繪を出してあつた。大名煩、場割、役人替名、それぞれ演戲の場面と俳優の名をあらはして好戲家の好奇心をそそつてゐた。豫告してあつたやうに演戲は有職鎌倉山と加賀見山鶴錦繪をなひまぜにした鶴瓶曙模樣初霞と云ふ通し狂言で、大切淨瑠璃は壽名殘島臺であつた。支切

場には隻脚俳優田之助の演技と共に評判になつてゐた鶴藏の一世一代の隱退披露の口上書を出してあつた。

一世一代　一、御町中樣益御機嫌克被爲遊御座恐悦至極に奉存さふらふ臨つて私儀幼少之砌より是迄段段厚き御贔屓御取立に相成候長海山くらべがたく誠に難有仕合に奉存さふらふ然る處最早年齢積り此儘にていついつ迄も出勤仕り候ては各樣方の思し召にも違ひ別して是迄の御取立も無足に相成候仕合に御座候間速かに退身仕度昨年中よりも申出候處折節無人と申悖蒼三郎も留守中に付是迄延引相成候處彌此度兼ての念願通り當三月狂言錄倉山兵衛之役猶又大切にて秦の始皇の形ち斗りを一世一代無稀の勤め納と仕御名殘惜しくも只今迄御取立之各樣へ御禮之百分が一申し上げ度何卒被仰合興行中賑賑敷御見物に御光來之程偏へに奉希上さふらふ

一行は中村座の向前になつた山形屋と云ふ演戲茶坊へ往つた。戲場裏の小さな裏茶坊に對して表茶坊大茶坊の名で呼ばれてゐる其處の演戲茶坊では、後から後からと來る看戲の贔屓客を戲場へ送つて往く一方で、其の客の註文に應ずる料理のしだしにいそがしかつた。其の茶坊茶坊の格子のうちには、これも客に出す拳飯を燒いてゐるのが通りすがりに見られた。

二四

一行は伊豆屋の婢と別れて山形屋の裏二階へ通つた。山形屋のお嬶さんは後からそれを追つかけるやうにして挨拶に出た。

「これはいらつしやいまし、毎度御贔屓にあづかりまして、」

お嬶さんは商賣がら客の身分を見てとつたものであらう。麼子は鷹揚にそれに應へた。

欠

に浮いた挑燈の燈に鼻づらを見せて一頭の馬が來てゐた。篤介はそれを見ると何か思ひだしたことでもあるのか其の周圍へ眼をやつた。其の篤介の眼は伊勢屋の次になつた大黒屋の暖簾へ往つてとまつた。其の大黒屋は金瓶樓と云ふ樓名を持つてゐた。

「きんぺい大黒か、これや、政府の大官ぢやぞ、」

篤介は馬上の客の近づいて來るのを待つた。人出はすくなくなつても未だ其のあたりを包んでゐたどよみが其の時ぱつたりやんだやうになつた。挑燈を片手にした馬丁が馬の口を持つてすぐ前へ來た。篤介は伊勢屋の方へ背をやつて横から馬上の客に注意した。客は山高帽をまぶかに冠つた色の白い、羽織袴もりうとした無腰の紳士であつた。

「あ、木戸ぢや、」

それは參議の一人の木戸孝允であつた。馬の後には壯士らしい壯佼が大刀をさして歩いてゐた。篤介はひどく好奇心を動かしたらしい顏をした。

「維新のどさくさまぎれに、なりあがりをつたが、もう、いかんぞ、待て、待て、」

篤介は舌なめずりしながら跟いて往つた。木戸の馬は金瓶樓の前へ往つた。木戸の馬が其の前へ往くと待ちかまへてゐたやうに裏から五六人の者がばらばらと出て來た。其の出て來た者の中に羽織袴の老人がゐた。篤介は主翁であらうと思つた。家の者は其の時馬からおりたつた木戸を迎へて暖簾を潜つて往つた。木戸が入つて往くと馬丁は挑燈を腰にはさみながら、其處の横手へ馬をひいて往つた。其處には馬上の客の馬を繋ぐための馬置場があつたが、前客の乘つて來たものであらう一臺の馬車も置いてあつた。篤介の眼はまた其の馬車へ往つた。

欠

「三條ぢやないか、」
篤介はさう云つてから金瓶樓の入口へ眼をやつた。其處には二人の妓夫が怪しいものの見はりをしてゐるとでも云ふやうな恰好をして立つてゐた。
「おい、主管、あがつてやらうか、今は諸生でも、其のうちには參議になるぞ、」
「えへッへッへッ、」
一人の妓夫は口元を白くしたが、此のうすぎたない儒生くづれのやうな青年にあがれとは云はなかつた。
「目さきの見えない奴らぢや、今の參議も、元は吾輩らあとちがはなかつたぞ、ちがはなかつたより、木戸は三條の橋の下で乞食をしよつたぞ、」
篤介は妓夫にも金瓶樓にも執著はなかつた。篤介は笑ひながら小さいうすぎたない儒生くづれのやうな體を前へ運んだ。
「へヱ、どうか、參議さんになつてから、」
「お次の參議さんイ、」
客氣の多い青年の氣もちはほがらかであつた。篤介は妓夫の云つた詞を頭にころがした。お次の參議さん、お次の參議さん。
「待て、待て、あわてるな、」
篤介は小さな體をひよろひよろと運んだ。篤介はひどくいい氣もちになつてゐた。篤介の口から詩吟がもれた。

「みどりは、うるほひ、くれないは、しづんで、せうとして、ちからなし、」
雲井龍雄の海棠を詠じた七言古詩であつた。朗吟は酒のために時どきもつれて詞をなさないところがあつた。
「あたかもやうひ、ていごのいろ、」
「くわえう、うれふるがごとく、なんの、うれふるところぞ――――――はなは、もくもく、」
傍を歩いてゐる嫖客は、此のうすぎたない儒生くづれのやうなざんぎりの小男の、詩を吟じながらよろよろとゆく姿を滑稽な繪畫として見るのであつた。
「おもふ、むかし、ひんでん、でんなんのしやう、さけをとり、しをふして、かいだうをしようす、」
篤介の體はもう江戸町一丁目の河岸へ曲つてゐた。其處には中吉大鶴野村原田など云ふ小娼樓が並んでゐた。
「や、これは、諸生さん、御遊興は如何さまでございます、てまへ方は、お客樣の御都合で、いかやうにでも、お取りはからひができるやうになつてをりまして、」
篤介は詩吟をやめて靡のした方を見た。さかやきの痕が蒼くて其の蒼さが獄門首を想像さすやうなきみわるい妓夫の顏が其處にあつた。其處は大鶴屋であつた。
「とにかく、てまへの申しますことをお聞きくださいまし、へい、てまへの方は、娼は別嬪ぞろひ、むだな御遊興はおすすめいたしません、それで他さまよりは諸事安値でございまして、」
篤介はべつに何處へ往かうと云ふ的はなかつた。
「さうか、それではあがつてもええが、酒はええか、」
「酒は灘の生一本、娼は楊貴妃、素盞嫗、小野小町、料理は日本、イギリス、メリケン、オロシヤ、それからフ

ランス、オランダ、」
「福澤諭吉の國づくしか、」
「いや、福澤先生の鴛鴦夫婦でございます、福澤先生は鴛鴦のやうに、御夫婦で伴れだつてお歩きになると申すではございませんか、高い聲では申されませんが、」
「かまふもんか、それをイギリス詞で云つてやれや、よろこぶぞ、よし、君の文句が氣にいつた、あがつてやらう、」
「これはどうも、妓夫は篤介が入るのに邪魔にならないやうに體を片寄せて「いらつしやい、おきやくさん、」と一流の詞で叫んだ。篤介は其の聲にまきこまれるやうになつて暖簾をくぐつた。土間の右側が店になつて十人ばかりの櫛巻姿の女が並んでゐたが、篤介の眼は其のほうへはゆかなかつた。篤介の神經には海棠の詩が動いた。
「——ああ、われ、せきじよう、わづかにみをだつし、」
篤介はよろよろと二階へあがつて往つた。
「さいきよ、さくなく、ひさしくしゆんじゆん、」
階子のあがりづめに顔の澁紙色をした鴇母の婆さんがゐて、篤介を傍の室へ伴れて往つた。
「いま、このはなにたいして、わうじをおもへば、」
「旦那てば、別嬢さんですよ、お馴染はありますか、」
鴇母は茶を入れてゐた。篤介はとろんとした眼で鴇母を見た。

「お馴染はないが、此處の一番別嬢を出せ、それから酒も一番ええがを持つて來い、室も一番廣い處ぢや、男子は鶏口牛後ぢや、」
篤介の煙にまかれてゐた鴇母の眼の前へ小粒の金が二つ落ちた。
「それきりぢや、それでやれ、」

三

案外金を持つてゐるなと思つた。鴇母は金を見て安心した。鴇母は澁紙色の顔に急にあいそ笑ひを浮めた。
「それでは、これでね、」
篤介はうなづいた。
「さうぢや、それでいつさいやつてくれ、」
「お酒は、どのくらゐおあがりになります、」
「一升でええ、もう飲うで來ちよる、」
飲んでゐるうへにまだ一升とは豪い酒徒であるが、こんな小さな體をしてゐて何處へそれが入るだらうと思つた。鴇母は色の淺黒い小さな男をぢろぢろと見た。
「まだ一升もおあがりになつて、」
「一升は飲むとも、飲めやあ二升でも飲めんことはないが、」
對手になつてゐてはまたどんなことを云ひだすかもわからない、早く娼を呼んで寢かすやうにしようと思つた。

「それでは、別嬪さんを呼びませう、お馴染はありませんね、」
「まあ、酒を早く持つて來い、酒が急ぐ、」
「さう、ねえ、」
鶴母は輕くあしらつて出て往つた。篤介は兩手を後手について兩足を投げ出し、顏を天井の方へやつた。其の篤介の頭には火のやうに燃えてゐる壯い志望があつた。
「待て、待て、縱橫の策は明日ぢや、あわてるな、」
篤介はひとりごとを云つて己で己のはやる心を抑へるやうにした。其の時梯段をあがつてどたりどたりと草履を引きずつて來たものがあつた。襦袢を着た女と鶴母の二人であつた。
「美人が來たか、美人が、」
女は入口へ座つて斜に小柄な姿を見せた。
「別嬪さんでせう、」
篤介は女に執着はなかつた。
「美人ぢや、美人ぢや、」
「それでは、彼方へいらつしやいよ、」
鶴母にうながされて篤介はふらふらと起つた。鶴母は廊下を通つて篤介を汚い廣い室へ案内して往つた。其處は引附座敷で一方が肱掛窓になつてゐた。
「それでは、今お酒を持つて來ますから、」

鶴母は出て往つた。
「持つて來い、酒ぢや、」
篤介の傍には女が座つてゐた。篤介は氣が注いた。
「美人がをつたか、おい、美人、謠を聞かさうか、」
女は何の興味もないと云ふやうな顏をして眼を伏せてゐた。篤介はそんなことには頓着がなかつた。篤介は兩手を打ち合はせて手拍子をとつた。
「とさの、かうちの、はりまやばあしで、ばうさん、かんざし、かいよつた、ヨサコイ、ヨサコイ、」
女は手拍子を打つ手の爪が延びて爪垢の眞黑い汚い篤介の指に眼を注けてゐた。
「もう、一つ、唄はうか、」篤介はまた手拍子をとりながら「かすと、ゆちよいて、かさんぢや、ないか、やまで、くはした、くりよ、もどせ、ヨサコイ、ヨサコイ、」女の方を見て「どうぢや、美人、わかるか、此の謠が、」
「それ、何處の謠、」
「土佐の謠さ、」
「さう、」
喜屋の壯佼が大きな皿鉢を掌にのつけ、鶴母が鐵瓶とはくちやうを持つて來た。其處に微吟が起つた。
「うまをくだりて、きみにさけをのましむ、とふ、きみ、いづれのところにかゆく、きみはいふ、いをえずして、なんざんのほとりにきぐわすと、ただされ、またとふことなからん、」
微吟してゐた王維の詩は鶴母にさへぎられた。

「さあ、おあがりなさいよ、おかんができましたよ、」
鶯介は盃を持つた。大きな皿鉢の中には魚軒のやうにした赤貝がちよつびり入つてゐた。
「媼さん、國の謠を聞かさうか、」
「聞かしてくださいよ、謠を唄ふと酒がはつして、ようございますよ、」
「媼さんに酒をささうか、」
「わたしは、お酒はだめですよ、それこそ、酒屋の前を通つても、頭痛がしますからね、」
「さうかね、そいつは、損な生れぢや、こんなうまいものが、」
鶯介はうまさうに盃をあげて一口飲んで鶴母を見た。
「媼さん、國の謠を唄つてみようか、さつきはヨサコイを唄つて、美人に聞かしてやつたが、なあ美人、」鶯介は女のゐた方へ眼をやつたが女はゐなかつた。「をらんか、」
「著がへに往きましたよ、」
「美人はどうでもええ、さつき美人に聞かしてやつたと云ふことを、云つたばかりぢや、それでは媼さんに聞かしてやらう、」と云つて居ずまひをなほして兩肩を怒らし「みたび、いさめて、きかざれば、はらに、まどあけ、しでのたび、ホイノ、ホイノ、ホイノ、」
鶯介はまた一ぱい飲んだ。
「とんとが、をうらぬ、おだいどころで、よをあかす、ホイノ、ホイノ、ホイノ、」
「それは、なに節と云ふのです、」

「さかん節と云うて、土佐の若侍の唄うたもんぢや、」
「ちよいとおつですね、」と云つて鶴母は思ひだしたやうに「別嬪さんが、ばかにおそいから、呼んで來ますよ、」
「まあ、ええ、ええ、」
「でも、旦那樣を、うつちやつとくと云ふ法はありませんよ、」
鶴母はさつさと出て往つた。鶯介は其處へあがつた時から小便を催してゐた。鶯介はいきなり起つて時掛窓の敷居の上に隻足をかけた。鶯介がさうしていい氣もちになつたところで、下の方で驚きあわてるやうな聲がきれぎれにおこつた。酔つてゐる鶯介には何のことやら判らないので、悠悠と用をたしてゐた。と、下から狂氣のやうにして駈けあがつて來た者があつた。
「なにをするのですよ、なにを、下にはお稲荷さんがあるぢやありませんか、」
鶯介は動かなかつた。
「待て、待て、あわてるな、明日は日曜ぢや、」
「痴、ねえ、此の人は、じようだんぢやありませんよ、およしなさい、だめですよ、お稲荷さんの屋根へかかるぢやありませんか、」
鶯介は其のけんまくにはへきえきした。鶯介はびつたりよしてあげてゐた足をおろした。小肥満のした三十五六の口やかましさうな他の鶴母であつた。
「おこるな、おこるな、君達は知らんが、お稲荷さんは、宇賀の御魂と云うて、稲の神さまぢや、稲の神さまに、小便はあひ口ぢやないか、」

「罰あたり、ねえ、云ふことにことをかいて、そんなもつたいないことを云ふものぢやありませんよ、お稲荷さんは、そんなものぢやありませんよ、きつと罰があたるから、」

「おころな、おころな、罰は吾輩が引き受ける、」と云つて其處へ横になつて肱枕をしながら「吾輩が引きうけたから、酒を持つて來い、穢れがあるなら、酒できよめろ、」

其處へ篤介のかかりの鶴母や妓夫などがあがつて來た。小肥滿のした鶴母は皆を對手にして諸生さんの不敬について罵つた。そして、かかりの鶴母が氣が注いた時には篤介は氣もちよく眠つてゐた。

「おや、もう眠つてるよ、」

「しようがない、ねえ、」

「のんきぼうだよ、此の人は、」

三二

二三人の手で臥床にはこばれた篤介は、其の翌朝の七時比、駿河臺紅梅町の後藤邸へ妻をあらはした。後藤の西洋館と云はれた後藤象二郎の邸宅は、其の當時には珍しい洋館であつた。

洋館の口には赤松を植ゑこんで馬車が往き違へるやうにしてあつた。篤介は其の入口を左に見て折れて往つた。其處に日本室の内玄關にした入口があつた。篤介は酒が醒つてゐるので平生ならふらふらするところであるが、其の朝はめうに體がきりきりとしてゐた。障子を開けてあがつたところで食客の青年が顔を出した。

「やあ、中江さんですか、早いぢやありませんか、」

「今日は大將に逢ひに來たから早いとも、まだ寢ちよるかね、」

「先生は、昨夜、西鄕從道先生がいらして、おそくまで碁をお打ちになつてをりましたから、まだお休みになつてをると思ひますが、」

「さうか、それはよかつた、それから君達の仲間入りをしたいが、君達は、飯はどうだね、」

「これからやるところですよ、なんですね、例によつて昨夜は北廊ですね、」

「ほくかく、よくきたれば、なにをもつてむくいんやぢや、まあ、飯を喫てからぢやあ、」

篤介は青年とすれちがつて右手の室へ入つた。其處には起きたばかりの七八人の食客がゐた。机にもたれて書物を見てゐる者、胡座を掻いて濃巴菰を喫んでゐる者、寢そべつてゐる者、皆食事の知らせを待つてゐるのであつた。食客達は篤介の姿を見ると皆親しさうな表情を見せて笑ひ聲をたてた。

「昨夜の敵娼は、美人でしたか、」

「それより、彼の、勢力の粉粉たる處を見せてもらひたいですが、」

「さうぢや、あれがいい、」

「あれを見せてください、」

篤介は平生の飄逸な氣もちになれなかつた。

「それは今度ぢや、今日は大將に用事がある、それより飯の方はどうだね、」

「今度のおさんどんは、ぼんやりだから、また拍子木を打つことを忘れてをるぢやらう、」

「さうかもわからん、あいつ、夫人に胡麻することばかり考へてるから、」

拍子木の音がかげ口をきいてゐる者の口元をなぐりつけるやうに聞えて來た。食客は一齊に起つて臺所へ往つた。篤介も其の中へ交つて臺所へ往つて食事をした。臺所は此の食客で一しきり賑はつた。篤介は酒で焦げついたやうになつてゐた胃を味噌汁にうるほして食事をしながら、象二郎にあつてから云はうとしてゐる詞を考へてゐた。篤介と並んで食事をしてゐた食客の一人が箸をおきながら云つた。

「中江さん、大將を見て來ませうか、」

それは篤介が時をりフランス語の質問に應じてやる南校の學生の一人であつた。

「さうかね、それはありがたい、何人かに頼みたいと思つてをつたところぢや、」

「見て來ませう、」

篤介はそこで箸をおいて廊下へ出て待つてゐた。と、まもなく彼の學生が引返して來た。

「中江さん、大將は庭を歩いてをりますよ、」

それはもつて來いの機會であつた。篤介は奥庭に面した緣側の方へ往つた。四尺の著たけを著たと云ふ脊の高い、當時二十二貫ぐらゐあつた象二郎が、フランネルの寢衣を著て假山の前を歩いてゐた。篤介は庭下駄を見つけており、芝生を横ぎつて其の傍へ往つた。

「閣下、暫くでございました、」

象二郎はもう已の傍へ來た小さな男を見つけてゐた。

「中江君か、どうだね、此の比は、」

「ありがたうございます、相かはらず碌碌としてをります、」

「だいぶやるやうぢやないか、」

象二郎は篤介の放縱を知つてゐるらしかつた。

「そんなことはありません、ただ勉强しやうにも、する處がありませんから、ぐづぐづしてをりますが、それについて閣下に折り入つてお願ひしたいことがありまして、」

「しうさい、のぼらず、くわげつのろう、か、」

篤介はぎよつとした。土佐藩の大監察として、長崎に國產樟腦の貿易を試みたのを手初めに、大政奉還の建策、德川慶喜の退官納地に關する周旋、總裁局顧問、外國事務掛、大阪府知事、參與、麝香間祗候、制度御用掛、一方では大久保利通の大阪遷都論に一歩を進めて、東京遷都を主張して其の主張が納れられるなど、青年の眼には天馬空を往くが如くに見える人であるから、些些たることは念頭においてゐないと思つてゐた篤介は、思はず一方の手を頭にやつた。高知城下の山田町に生れて洋學に志し、萩原三圭、細川潤次郎に師事してオランダ語を學んだ此の青年は、高知藩の留學生として長崎へ往つて平井義十郎に就いてフランス語を傍めたが、二年の後、江戸へ出たくなつたので、留學生の監督であつた岩崎彌太郎から旅費を得ようとした。當時長崎から江戸へ往來する外國船の賃金は二十五兩であつた。彌太郎は一學生のために巨額の費用を投ずることを惜しんでがへんじなかつた。ちやうど其の時、象二郎が藩命を帶びて汽船の購入に來た。彌太郎に旅費を拒絕せられた青年は、象二郎を其の旅館に訪うて自作の絕句を見せた。終歲不登花月樓は其の結句であつた。象二郎は言下に旅費を出してくれたので、それによつて江戸へ出て深川の眞田邸内にあつた村上英俊の塾に入つたが、放縱不羈、深川の假宅に流連したために破門せられ、それから横濱の天主教の僧に就き、神戸大阪が開港になると、フランス領事

に從つて大阪へ往き、維新になつて箕作麟祥が神田裏神保町へ私塾を開くと其の塾生となつた。箕作の塾にゐる時、大學南校の助教となつたことがあつたが、長くはつづかなかつた。そして、鶴地源一郎が湯島に日新社を設けたので、其の塾頭になつてフランス語の學生をあづかつたが、鶴地は吉原へ遊びに往き、己は三絃の稽古所へ通ふと云ふありさまで、間もなく學塾も沒落したので、それ以來一定の住居も定めないで轉轉としてゐるところであつた。

「君は、いくつになつた、」

「二十五になりました、」

「さうすると、長崎にをつた時は、二十ごろであつた、哺、」

「さうです、慶應元年に十九で往きまして、二年をりましたから、」

「君は、坂本を知つちよるか、」

終歲不登花月樓で油をしぼられると思つて鬼胎を抱いてゐた篤介は、象二郎の話頭が轉じて來たのでほつとした。

「龍馬先生でございますか、」

「さうぢや、」

「知つてをります、僕は坂本先生に、淡巴菰を買ひに往かされましたよ、」

「さうか、其のことは未だ聞かざつたが、それはええ記念を持つちよる、そんなら、顔もはつきり覺えちよるらう、」

額のぬけあがつた近眼のためにぱつちりした眼を小さくして物を見る癖のあつた柔和な顔が目の前にちらちらした。

「覺えてをります、坂本先生は、微毒で額がぬけあがつてをつたと思ひますが、」

「さうぢや、額がぬけあがつてをつた、」

「僕は、坂本先生が、近眼の眼を小さくして、中江の兄さん、淡巴菰を買うて來ておうせ、と云うてたのまれると、うれしいものぢやから、なにもかも止めちよいて、走つて買ひに往てやりました、」

「さうか、哺、坂本は豪かつた、日本第一の人物ぢやつたが、」

「閣下の大政奉還の大策は、長崎の清風亭で、はじめて坂本先生と逢つた時、相談しあつたものぢやと云ふことですが、さうですか、」

「そんなことがあつたかも知れんが、もう忘れた、それより、君の用事を聞かう、なにかね、」

「僕の一身上のことですが、」

「緣側へ往て聞かうか、」

三三

象二郎が緣側の方へ足を向けたので篤介も跟いて往つた。庭には杜鵑花が赤い斑點をおいてゐた。空は碧く晴れてゐた。象二郎は其の朝の靜な大氣の中に巨軀を浮かせて緣側へ往つて前向きに腰をかけた。

「何かね、」

篤介は左斜に立つた。

「ほかでもありません、政府では、今度、岩倉さんが特命全權大使となつて、歐米各國へ視察に往くついでに、數多の留學生を送ると云ふことですが、僕も其の一人に加へてもらひたいと思ひまして、」

「さうか、」

「僕は、いつも、閣下に御厄介になつてをりますやうに、フランス學をやつて、日本國中のフランス學者と云ふ學者には、皆、就いて學び、日本へ來てゐるフランスのものは、文學、哲學、政治、法律、醫學、何によらず、皆、眼を通してしまうて、もう日本では、就いて學ぶべき人もなければ、讀むべき書もなくなりましたから、どうしてもフランスへ往きたいと思ひますが、政府は官學に厚うて、私學の方を顧みてくれませんから、閣下のお骨折によつて、留學できますやうに、お願ひしたうございますが、」

「なるほど、君はフランス學ぢや、さうか、」

「僕も母が年とつてをりますから、長くをることはできませんが、フランスへ往て、生きたフランス學をやらんことにや、フランス學の堂に入ることができませんから、」

「さうぢや、外國の學問するには、其の國へ往て、生きた其の國の詞を知らんといかんが、君はお母さんがあるか、喃、」

「母と弟があります、父は、僕が、十三の時に歿くなつて、後は母が賃機を織つて、僕と弟を大きくしてくれました、」

人も神もない、豪猪のやうな此の青年にも、人間らしい靜平な氣もちがあるのかと思つた。象二郎は母親似の

上齒が下齒よりも出つぱつてゐる口元を引締めて篤介の顏を見た。

「さうか、君のお母さんは豪い、」

板垣から一つの弟で、天保九年に高知城下の片町に生れて、其の年三十四になつてゐる象二郎も、十一の時に父親に歿くなられて、母親は實家へ還り、祖母の手に育てられてゐたが、其の祖母も十三の時に歿くなつたので伯父の橋本小平に引き取られて、虐待を受け、義叔父の吉田東洋に見出されるまで、孤兒としての苦痛をしみじみなめさせられてゐるのであつた。

「とにかく、母には大恩を受けてをります、」

「吾輩は妻帶してから、母といつしよに暮すやうになつたが、どうも親の慈愛と云ふことがわからん、それがわかる人は幸福ぢや、」

伯父に虐待せられてゐた此の先輩が不平のあまり、惡源太になる惡源太になると云つてゐたことは、鄕黨の話柄にのぼつてゐるので篤介も聞いてゐた。

「やつぱり、貧乏であつたからですよ、」

象二郎の家は御馬廻で二百五十石を食んでゐたが、男の子がないので象二郎の父親が橋本家の次男から入つて末期養子となつたがために、藩規によつて百石を削られてゐたけれども、篤介の家とは比較にならなかつた。

「親子水いらずと云ふことは、双方の間を親しますうへにも親しますものぢやよ、」

やりつぱなしの中にも和氣のこまやかな此の先輩は、青年との間のへだてをとつてゐた。

「さうです、家貧にして孝子出づですよ、僕は有名な孝子ですが、」

と篤介は苦笑して見せた。
「いや、君のやうな男が、親のことを心配するとは、ちよつと思へんが、それはたのもしい、それでなうちやいかん、よし、よし、それで、今度のことは、吾輩が云ひだしたではまづい、君が知らん顔をして、大久保に逢うて、大久保にたのむがええ、後は板垣と吾輩が、つがふよくやつちやるから、」
なるほど同藩の關係をたどつたでは力が弱い、篤介は言下にさとつた。
「さうぢや、さうぢや、なるほどさうぢや、それでは、これから大久保さんに逢うて、其の意で頼みます、」
「それがええ、さうすれば、大久保からきつと話があるから、板垣と吾輩が、つがふよくやつちやる、」
「それでは、これから大久保さんへ往きます、」
象二郎は其の時、朝飯の膳へつけることになつてゐる鰯のことを思ひだした。鰯が好きで見つけたなら喫はずにはゐられない象二郎は、昨夜遅くもらつた漁れたての鰯の料理を命じて、それの出來るのを待つてゐるところであつた。
「さうか、」
象二郎の神經には鰯の酢にしたのや麺麭にしたのや、さうした旨い味が浮んで來た。篤介は象二郎の氣もちがもう己から離れたことを見てとつた。
「それでは、何分お願ひいたします、失敬しました、」
「さうか、」
篤介は象二郎のうつろな返事を聞いて象二郎を離れ、食客室へ引返して食客達と無駄話をした後に、麹町三年

町三番地の大久保邸へ往つた。三條や岩倉の陰になつてぢりぢりと權勢を收めてゐる參議大久保利通の邸内には新緑の陰に二疋の乘馬と三臺の人力車をおいて、門下に集まる者の多いのを示してゐた。篤介は玄關口へ往つた。
「頼まう、」
玄關には頬髭の延びた取りつぎの青年がゐたが、龜背の小さな儒生くづれのやうな汚い男を見くだした。
「何か用ですか、」
「大久保さんにお目にかかりたうてまゐつたものぢやが、僕は土佐の中江篤介と云ふものぢや、」
「だめです、」
「何故、だめだね、」
「政府の大官の方がいらして、お逢ひしてをりますから、」
「僕は待つてをつてもええ、」
「だめです、君のやうな諸生には、逢ふひまがありません、」
「しかし、一度、執りついでくれたらどうだね、其のうへで大將が逢はないと云へば、やむをえんが、」
「だめです、絶對にだめです、」
「それは、甚だ擅越ぢやないか、大將に執りつぎもしないで、絶對に逢はないなどと云ふのは、もし、僕が大事の用件を帶びてゐたらどうする、」
「それでもだめです、諸生や浪人には逢はないことになつてをりますから、」
篤介はむらむらとなつたがぢつとこらへた。

「しかし、君、一度、執りつぎたまへ、僕は、大事な、政治的の意を帶びた、用件を帶びて來てゐるから、」
「だめです、」
「もし、後になつて、大將のおちどになるやうなことになつても、かまはないのか、」
「先生から、ゆるしを受けてをりますから、かまはないです、」
野心家や不平家や寄食家や、いろいろのものがうるさく集まつて來るので、紹介もない風體の怪しいものには面會しないことになつてゐるのだと思つた。篤介は此のままでは、幾等なんと云つても取りつがないと見てとつた。篤介は無駄な應答をよすことにした。
「さうか、それでは順序を踏んで來るよ、」
「それがいいでせう、」

三四

篤介はぐるりと足をかへした。足をかへしながら土佐關係でゆけば後藤板垣のいづれかに紹介してもらへばいいが、土佐關係を離れるとなれば何人に紹介してもらつたらいいだらうと思つた。篤介は大久保へ紹介してもらふ人を物色した。そして、ふいと眼をやつたところで、門の右側の供待室に五六人の馬丁のやうな者が集まつて何かやつてゐるのを見つけた。それは供待室に集まつた車夫や馬丁が、退屈しのぎに博奕をやつてゐるところであつた。
「博奕か、」さう云つてちよと考へた篤介は、すぐ何か考へついた。「さうぢや、あの馬丁ぢや、」

篤介は大久保邸を出て歩いた。歩いてゐるうちに篤介は谷あひの茶畑の間を歩いてゐることに氣が注いた。篤介はあたりに注意した。其處は紀尾井坂であつた。茶畑の中には茶の新芽を摘む人であらう人影がちらちらしてゐた。谷の兩側の崖の上には、松や杉の木立に交つて櫻の新綠が懶ましい陽の光に醉うたやうになつてゐた。篤介は坂をおりて喰違へ出た。其の赤坂の喰違の堤の一方に老松があつて、それが街路の上に枝を張つてゐるところから、時をり其の枝で縊死するものがあるので、俗に首つり松と云はれてゐた。ふと見ると其の松の枝葉の陽陰になつた堤の斜面に芝草を敷いて、魚を釣つてゐる編笠を著た男があつた。濠の上には燕が二つ三つ飛んでゐた。釣魚に興味のある篤介は往くともなしに其の傍へ往つた。だんだらに流れた空の雲を映して蒼どろんでゐる水の上に、編笠の男の投げた標が浮いてゐたがそれがぴくぴくと動きだした。小さな魚が來て餌をつつきだした證であつた。
「もつごや海老ぢや、しようがないぞ、太い奴が來い、太い奴が、」
それは土佐訛の多いわだかまりのないものの云ひ方であつた。篤介はそれに眼を注けた。と、同時に編笠の男が此方を見た。
「おお、」
「おお、」
編笠の男は岡崎恭輔であつた。篤介は此の新政府を憎惡する身邊に黑い影を曳いてゐる壯士を尊敬してゐるのであつた。
「暫くですが、釣ですか、」

「仕事がないきに、釣りよるよ、」
「何か釣れますか、」
「さあ、のうし、龍にあらず、彪にあらず、熊にあらず、羆にあらずか、のうし、」
鶩介はおもしろかつた。
「虎にあらず、貔にあらず、獲るところは覇王の輔ですか、」
「まあ、そんなものよ、」
恭輔が笑つた時、標が水の中に隱れかかり隱れかかりしはじめた。はじめよりは大きな魚の餌に來た證であつた。恭輔は竿をあげた。三寸ぐらゐある鮒があがつて來た。鶩介はうれしかつた。
「釣れた、釣れた、釣れましたのうし、」
恭輔は鮒を取つて傍の手桶の中へ放ちながら鉤の餌をかへた。
「新政府で云や、まあ、伊藤俊輔か、大隈八太郎のやうなものぢやのうし、小鮒組ぢやから、」
「なるほど、伊藤と大隈か、陸奥も其のうちぢやありませんか、」
「さうとも、陸奥も小鮒よ、」と糸をつけてから、「ときに、おまんは、フランス學の學者ぢやあと云ふが、うんとやりよ、まだ學問で天下はとれんが、これから三十年四十年すると、學者が天下を支配する時代が來るぞよ、」
「めうなことを初めちよるが、金がないきに、思ふとほりに書が讀めえで、困つちよります、」
「それやさうぢやが、錢はどうでもなるぞよ、」
「ところで、それがどうでもならいで、困つちよります、今度も政府が留學生を送ると云ふきに、其の仲間へ入

りたいと思うて、運動しよりますが、錢がないきに、思ふように運動ができません、」
「運動費が、多いるかよ、」
鶩介は大久保家の馬丁を手なづけようとしてゐた。
「僅少あれや、ええが、それが出來いで困つちよります、」
「五十兩か百兩でええかよ、」
あてもなしに云つたことが體になつて來さうになつた。
「そんなにいらん、十兩か二十兩あれや結構ぢや、」
「そんなことぢやたるまい、だいぶいくと云ふきに、」
其の時標がまた動きだしたのか恭輔は急いで竿をあげた。鶩介は苦笑した。
「品行は、方正とまではいきませんが、」
鉤には何もかかつてゐなかつた。恭輔は竿を元のとほりにした。
「かまん、かまん、本心さへ失はないなら、些些たることはどうでもええ、うんとやり、ほんまに校頭錢がいるかよ、」
「すこし、いることがあつて、困つちよります、」
「そんなら、まあ、座り、」
恭輔は手にしてゐた竿を膝の下へ敷いて、腰から火の用心と書いた腰さげを脱いで、中から淡巴菰の道具を出して淡巴菰を詰め、それにマッチの火を點けようとした。其の一方で鶩介は芝草を敷いて腰をおろしたが、西固

な國威宣揚家として新政府から厄介視せられてゐる恭輔が、マッチを持つてゐるので不思議に思つてぢろぢろと見てゐた。

「人にもらつたきに、つかひよるが、便利なものぢやのうし、やつぱり毛唐は豪いところがあるよ、これも究理の學問から來てゐるらうが、日本人の眞似のできんところがある、おまんらあも、大にやりよ、毛唐に負けなよ、」と云つてマッチを擦り、それを淡巴菰に移して旨さうに吸つてから、「金をとる處を敎へちやらう、芝の愛宕下にをる外山具慶と云ふ華族へ往き、あれや、もと佐幕派で、中川宮へ出入して、長州をたたき潰さうとしてゐるうちに、彼奴狡猾な奴ぢやから、いつのまにか薩長へ執りいつて今日に及んぢよるが、とても酢でも蒟蒻でもくへん奴で、彼方此方の町人をいぢめて金をとるきに、此の間も、京でいつしよになつて悪いことをしよつた山田恭平と云ふ悪漢が、だいぶ吐き出させて、それで商賣をすると云うて、横濱へ往たが、彼奴のことぢやから、半年とはつづくまい、今にまた外山をいぢめに來るぢやらうが、五十や百ならなんでもないぞよ、」

「いくぢやらうか、」

「いくとも、彼奴は、薩長の政府に脱まれるがこはいきに、今日、これから往て、僕は後藤象二郎の門下で信用があるとかなんとか、後藤と深い關係があるやうなことを云うて、それで岡崎恭輔と云ふ浪人が來て、後藤に愛宕通旭外山光輔の二人をつかまへて、外山具慶をつかまへないとは怪しからんと云うてをつたが、彼奴は悪い奴ぢやから、後藤も採りあげはせんが、浸潤の謗、膚受の愬ぢや、用心せんといかんよと云ふやうなことをいや、彼奴びつくりして、おまんにとりなしてもらはうと思うて、大に御馳走したうへで、五十や百はきつとおこすが、どうぞよ、」

なるほどさういけば金になるだらうと篤介は思つた。

「さう旨くいくぢやらうか、」

「いくとも、あしの云ふとほり云や、きつといくよ、」

篤介は肚をきめた。

「やつてみようか、」

「やり、ばれたところで、なんでもないことぢや、」

「さうぢや、」

恭輔は二服目の淡巴菰を酷けてゐた。

「金は受けあひ、とれる、やり、それから、今日は、君に久しぶりに逢うたきに、一ぱいやりたいが、今日は、すこし、釣るものがあるきに、のうし、」

龍にあらず彪にあらず、何人かを待つてゐるだらう、篤介は邪魔にならないやうに往かうと思つた。

「それでは、今度ゆつくり逢ひませう、」

「さうぢや、今度にしとうせ、それから、あしに逢うたことは、何人にも云ひなよ、」

「云ひません、」

「そんなら往き、」

「それでは、」

篤介は恭輔に別れて其の足で愛宕下の外山具慶の邸へ往つた。

「輟まう、」

玄關には彼の吉田がゐた。

「何か用事ですか、」

吉田は篤介の風體を見て輕蔑した。

「僕は、土佐の中江篤介と云ふものぢやが、」

篤介が己の名を云つたところで、吉田の眼が急に輝を帶びて來て輕蔑の色がなくなつた。

「中江さんと申しますと、フランス學の中江先生ですか、」

南校の生徒の一人である吉田は、かつて南校にゐたことのある篤介のことは聞いて知つてゐた。

「さうぢや、僕がフランス學の中江篤介ぢやが、君は南校へでも往きよるかね、」

「さうです、僕は昨年入學したものですが、先生は學者で、飄逸で、非常に滑稽な方だと云ふことを聞いてをります、」

「僕は放縱ぢやきに、逸話を作つて困るが、そいつは恐縮ぢや、」篤介は笑つて頭を掻いて見せて、「時に、大將に逢ひたいが、をるらうか、僕は毎日のやうに後藤象二郎先生の許へ遊びに往くが、それについて、此處な大將のことを後藤象二郎先生に話してゐるものがあるから、それを大將にそつと知らしてやらうと思うて來たが、」

「さうですか、後藤先生の許で、家の大將のことを云つてるものがあつたから、それを知らしてくだされるためにですね、」

「さうぢや、いらんおせつかいのやうぢやが、此處の大將のためにならんことぢやきに、」

「それでは、どうか、ちよつとお待ちを願ひます、」

篤介は安心して待つてゐた。篤介を待たしておいて、引込んで往つた吉田は、直ぐ引返して來て篤介を案内した。それは彼の八角の柱時計が文明開化を象徴してゐる具慶の室であつた。篤介は其處に大きな鼻を見つけた。

「これは閣下ですか、僕が中江篤介です、はじめまして、」

「中江先生ですか、はじめまして、」具慶は氣もものあつさりした人のやうに輕く云つて、お多喜の敷いて往つた蒲團をさした。「どうか、お敷きください、」

篤介は云はれるままに蒲團の上へあがつた。

「失禮します、」

「家へ來る諸生どもから、先生のお噂は、うけたまはつてをりますが、此の方が、」と具慶は左の手で物を飲むやうな恰好をして、「たいへんいけるさうですね、」

「すこし飲みますが、人の云ふほどは飲みません、」

「なに、お壯いうちは、大に飲むがいいのです、酒ぐらゐ飲めない奴は、話せない、わしもすこしぐらゐは飲める、」

お多喜が茶を持ちお若が菓子盆を運んで來た。

「お茶ではいけますまいが、まあ一つお話を伺つておいて、それからにいたしませう、」
篤介は茶碗を持つて乾いてゐる咽喉をうるほした。
「今日、あがつたことは、僕の好奇からですが、すこし閣下のお耳に入れたいことがありましたものですから、此處でおさしつかへがないでせうか、」
「さしつかへはありません、」と云ひかけて具慶は二人の侍女に氣が注いた。「そち達は彼方へ往け、」
侍女達が出て往くと具慶は篤介をうながした。
「もう何人もをりません、何を話しても、さしつかへがありませんから、」
「それでは申しますが、僕は後藤象二郎先生に世話になつたもので、土佐藩の留學生として、長崎へ學問に往たことも、また長崎から江戸へ出たことも、皆、後藤先生の世話になつたものですから、其の關係で、後藤先生のそばにをつて、調べものをしたり、機密の相談にあづかつたり、いろいろやつちよりますが、此の比、同藩の者ですが、厭な奴ぢやから、皆嫌つちよりますが、そいつが後藤先生の處へ來て、政府に對する陰謀で、愛宕通旭、外山光輔をつかまへて、外山具慶、つまり閣下のことですが、閣下をつかまへないのは佚怙贔屓ぢやと云うてをりましたよ、後藤先生は對手にしなかつたけれども、市に虎ありと云ふこともありますから、御用心なさる方がいいと思ひまして、三田へ來たついでにちよつとお寄りしました、」
「それは、どうも、ありがたい、が、そんな痴げたことを云ふものは、何人であらう、何と云ふものでせう、」
「岡崎恭輔と云ふ男ですよ、」
岡崎恭輔、山田恭平、それは身ぶるひが出るほど厭な對手であつた。篤介は具慶の眼の動きに注意してゐた。

「岡崎恭輔、岡崎恭輔が、そんなことを云つてをつたか、怪しからん奴ぢや、」
「閣下は御存じですか、」
「ちよつと知つてをる、尊王攘夷の際は、玉石混淆であつたから、やむを得なかつたが、あんな奴が志士の中へ入つてゐたかと思ふと、なさけなくなる、」
「政府では、なぜ、そんな奴を其のままにしておくでせう、」
「さうぢや、あいつらは、一昨年殺された、米澤の雲井なんかより、まだ悪い奴ぢやから、今に何か證據があがつて、首が飛ぶよ、どうか後藤先生に、あんな奴は寄せつけないやうに申してください、」
「後藤先生は、磊落豪放で、來るものはこばまずと云ふ流儀ぢやから、僕達門下のものが困ることがあります、」
「さうでせう、後藤先生は、當代稀に見る英雄ですから、」と云ひさして、何か考へついたやうに「ちよと待つてください、此處ではゆつくりお話ができませんから、彼方へまゐりませう、家の庭も見てください、」
「さうですか、拜見しませう、」
具慶の鳴らした手の響きに應じてお多喜が入つて來た。
「多喜か、置薬庵へ準備をしてくれ、」
思つたより藥の利目が强かつた。篤介はしめたと思つた。お多喜が出てゆくと具慶は篤介を見た。
「中江先生、わしが上御一人のために、どんなに心をつかつてをるかと云ふことは、三條公でも、岩倉卿でも、木戸參議でも、何人でも知つてをつてくれるから、あんな奴が何を云はうとかまはないが、曾參人を殺すの譬もある、誤解を招いてもいけない、どうか先生から、後藤先生に誤解のないやうに申してください、」

「後藤先生なら、僕の云ふことなら何でも信用しますから、」
「それではよろしくお願ひいたします、」具慶は座つたままでくるりと後向きになつて手文庫を引き寄せ、中から何か出して紙にくるくると卷いて篤介の前へ出した。「後藤先生の許には、あなたのお朋友もをりませうから、これで一ぱい、」
篤介はとぼけてみせた。
「それは、」
「失禮ですが、これはきたない意からではありません、先生の御厚意に對して、一夕、浩然の氣を養づていただきたいと思ひまして、」
「金ですか、」
「金と云ふほどのことでもありませんが、」
「さうですか、それぢや遠慮なくいただきませう、」
篤介はすぐ包みを取つて左の袂へ入れた。入れながら量と重みに觸れてみた。量と重みから見て三十や四十は動かなかつた。
「これを御緣に時どき遊びにいらしてください、老人はすることがなくて遊んでをりましてね、」
「お邪魔をします、」篤介は金さへもらへば用事はなかつた。それにもう一時近いのに午食も喫つてゐないので空腹を感じてゐた。「それでは庭を拜見しませうか、」
「さうですね、ぶらぶらしてをるうちに、準備もできませう、それでは御案内しませうか、」

三六

具慶は起つて其處の緣側から篤介を案内して往つた。篤介は具慶の後からちよこちよこと飛石を傳つて往つた。庭樹の間には木蓮花の白い花が咲き、飛石の緣には杜鵑花が殘つてゐた。
「佳い庭ですね、」
「これは、もと、諸侯の上邸を返上したのを、手に入れたものですが、石は古いでせう、」
「木もなかなかいい、寂がある、」
「さやう、其の寂ですよ、それに眼のつくものはあまりないですが、中江先生は趣味が腐い、」
「好奇ですから、なんでも、ちよつとはかじつてをります、」
「いや、感心だ、お壯いに、」
具慶はそれから途中にある亭を見せて最後に蘆菴へ往つた。其處には入口の一方に八角金盤の綠葉の簇がつてゐる下に寛の水を落してあつた。
「さあ、お入りください、」
具慶は篤介を伴れて入つた。中は八疊の室で天井には蘆の聖が用ゐてあつた。其處は前が緣側になつて入つたところの右側が壁になり、左側の背後が床の間になつて、一方の次の室との境になつた襖に續いてゐるが、其の壁から床の間、襖にかけて半から下へ古い暦を貼つてあつた。二人が座つて一つ二つ話しはじめたところで、數人の女の笑ひ聲が近づいて來たが、間もなく次の室から五六人の侍女達が酒宴の準備をして入つて來た。二人の

前には春慶塗の木具膳が運ばれた。侍女達は双方に別れて具慶と篤介とにそれぞれ酌をした。
「これは、饗應ですな、」
空腹に灘の美酒はうまかつた。篤介はつづけさまに數はいを飲んだ。具慶は手を出した。
「中江先生、一ついただきませうか、」
篤介は箸をおいて顔をあげた。
「いや、これは先輩からいただくものです、僕がいただきませう、」
「さうですか、では、失禮ですが、」
具慶の盃は侍女によつて篤介へ往つた。篤介はそれをすぐ飲んでかへした。篤介は氣もちが輕くなつてゐた。
「閣下、閣下のお傍には、美人が多いですね、後宮三千人ですね、」
具慶は盃を口の緣へやつてゐた。
「どうです、此のうちに、何人か、先生のおぼしめしにかなつたものがございますか、」
「いや、皆、美人ですから、どれと云つて、一人にきめるのは惜しいですよ、」
「それや、あんまり、慾が深いぢやありませんか、」
具慶はにやりと笑つて侍女の顔をひとわたり見まはした。侍女達はおかみが不思議に大事にする汚い野良犬のやうな男を輕蔑して、無言で嘲の笑ひを笑ひ合つてゐるところであつた。
「何人か、一人にきめてはいかがです、」と云つて侍女の嘲を受け取つて「どうぢや、中江先生は、そち達を皆好きだとおつしやるが、いつしよではどうにもなるまいから、そち達のうちで、中江先生の奥様になりたいと思ふ

ものはないか、」
侍女達はわざとらしくそりかへるやうにして笑つた。篤介は酒をぐつと飲んだ。
「おい、美人、君達は吾輩を輕蔑しよるが、今に參議になるぞ、」
侍女達のきたない小男を嘲ける囁きがきれぎれに聞えて來た。
「おい、美人、一つ謠をきかしてやらうか、」
侍女の一人がそれに應じた。
「謠つて、どんな謠でございますの、きよもと、ときはづ、」
「土佐の謠ぢやよ、土佐の謠を唄うちやるきに、聞けよ、」と云つて具慶の方を見て「閣下、美人の所望によつて土佐の謠を唄ひたいと思ひますが、さしつかへはないでせうね、」
「土佐の謠なら、わしも平井隈山先生、間崎滄浪先生から聞かされてをるから、なつかしい、」
「さうですか、平井隈山と間崎滄浪を知つちよりますか、僕は維新のもぐり志士は嫌ひぢやが、二人は好きです、それに僕は滄浪の詩が好きです、腹を切る時にや泣いたと云ひますが、僕は滄浪を崇拜しちよります、」と云つて篤介は急に詩吟をはじめた。ころもをてんし、さけをかふは、ぞくたいにあらず、ひとによつて、ことをなす、あにだんじならんや、」
侍女達は詩吟をやる篤介の顔に眼をあつめた。篤介の詩は不意に俗謠にかはつて往つた。篤介は手拍子を打つた。
「ばんば、うつむけちよいて、あとから、みいたら、いちは、にはさんば、しわだらけ、ヨサコイ、ヨサコイ、」

とはやして、「閣下、どうです、土佐の謠は、」
「わしは、昔が想はれて、なつかしうてならん、」
篤介は酒が廻つて來た。篤介は面白くてたまらなかつた。篤介は右側にゐる侍女の手首をぐいとつかんだ。
「おい、美人、酒をささう、」
手首をつかまへられた侍女はお若であつた。お若は汚い垢だらけな男に手首をつかまれてぞつとした。
「わたしは、いや、いやでございます、」
お若はふり放して逃げようとしたが逃げられなかつた。篤介は盃を持つて往つて女におつつけようとした。
「吾輩が酒をさすと云ふに、逃げると云ふ法があるか、飲め、」
それでもお若は手にとらなかつた。
「若、ちよつと受けるがよいぞ、」
具慶に云はれてお若はふせうぶせうに盃を持つた。それを見て篤介が傍の銚子を鷲づかみにしようとすると、傍にゐた侍女の一人がすばしこく執つた。
「わたくしが、お酌をいたしませう、」
篤介は赤く熟した眼をやつた。
「おい、なれあひは、いかんぞ、うんと注げ、なみなみと注げ、」
具慶の左側にゐたお八重が口をはさんだ。
「中江先生、もう一度詩吟をうかがひたいものですが、」

篤介は膝のした方を見た。篤介ははじめて圓髷の美女に氣が注いた。
「や、此の美人は、あぶらつこいですね、」と云つて、「美人の所望ぢやから劍舞をやらう、劍舞がええ、よし、劍舞ぢや、」そして、あたりを見て、「刀はないか、」
「木刀があるぢやないか、次に、」
具慶に注意せられて、侍女の一人は、次の室から一本の木刀を持つて來て篤介のそばへおいた。
「これでよろしうございませうか、」
「ええ、ええ、それでええ、」篤介は木刀を手にして起ちあがらうとして、傍にあつた銚子を執つて仰向けにして飲んでしまひ、それをつきすゑるやうに置いた。「うまい、」

三七

侍女達は呆氣に取られた。篤介は木刀を腰にさしてひよろひよろと起つたが、嬰兒にするものがほしいと思つた。篤介は棄兒の詩をやりたかつた。已の今まで敷いてゐた蒲團が眼の前にあつた。篤介はそれを執つて圓め、嬰兒を抱きかかへるやうな恰好をしながら詩吟をはじめた。龜背の小柄な此の醉漢は、一方で詩吟をやり、一方で詩中の人となつて、棄兒の親の悲痛な心情を動作によつてあらはさうとしたが、醉つてゐるので體が自由にならなかつた。侍女達はをかしくてたまらないやうに笑つた。侍女達はもう此の滑稽な諸生を輕蔑の眼で見ることはできなかつた。體が自由にならないので篤介は棄兒の劍舞が厭になつた。篤介は蒲團を放りだした。
「こんな劍舞はいかん、他のがをやる、」

篤介は頭に浮ぶままに他の詩吟をはじめた。詩吟をはじめるとともに一方の手を額の前へやつて、菅笠か何かで雨か雪かを遮るやうな所作をしはじめた。詩は村上佛山の櫻田門外の變を詠じたものであつた。落花紛紛雪紛紛、雪を踏み花を蹴て伏兵起り、白晝斬り取る大臣の頭にて、篤介が木刀を上段に揮りかぶつたところで、其の前にゐた侍女の一人があつと云つて逃げた。其處に笑ひの渦卷が起つた。篤介はなまぬるいまだるつこいことがいやになつた。がらがらした呼吸づまるやうなことをしなくては神經が收まらなかつた。篤介は木刀を投りだした。

「これから、しやちほこだちぢや、」

篤介はいきなり兩手を突いて、體をさかさまにして其のあたりを歩きだした。侍女達はうれしくてたまらなくなつた。具慶は篤介の狂態を演ずるのを見てばかばかしくてしかたがなかつたがどうすることもできなかつた。具慶は苦蟲をかみ潰したやうな顏をして酒を飲んでゐた。篤介は其のまはりを彼方此方してゐたが、やがて具慶の方へのそのそと近づいた。具慶は膳の上へ倒れては困ると思つたので、傍にゐるお八重に眼くばせして膳を横の方へ寄せさせようとしたところで、篤介の體はひよいと背の方から倒れてくるりと起きかへつた。

「かつ、か、」

起きかへつた篤介の體は具慶のほうへ延びて、具慶がおやと思ふまもなく、其の片手は具慶の首筋にまきついた。

「これ、なにをする、」

驚いて揮り拂はうとした具慶の片頬に、篤介のどろどろした舌がぺろぺろと來た。

「あ、」

具慶が鬼魅わるさに叫ぶと同時に、篤介の體はよろよろと具慶をはなれてお八重の方へ往つた。

「やあ、君、」

お八重は驚いて逃げようとした。篤介の手はお八重の帶に往つた。

「失禮な、なにをするのです、」

お八重は絹を裂くやうな聲で叱りつけておいて逃げようとしたが逃げられなかつた。篤介の汚い鬼魅悪い舌が左の耳朶にぺろりと來た。

「あれ、」

「失敬、」

篤介の體はお八重を離れて壯い侍女の方へ向つた。侍女達は起つて篤介の方をきつと見ながら、其の一方で背後を注意してゐた。それは逃げ走る時の用意であつた。篤介はひしひしと其の侍女達にせまつて感したかつた。篤介はいきなり袴の裾をまくつて立ちはだかつた。

「おい、どうなら、おい、」

侍女達は笑ひを爆發さして逃げた。白い脛に赤い裳をからめて緣側から飛びおりるものもあれば、入口の方へ走るものもあつた。篤介はそれが此のうへもなく痛快であつた。篤介は其のまま緣側の方へ往つたが、脚下が亂れてゐるので足を踏みはづした。篤介はしまつたと思つたので、蝸牛が觸角をちぢめるやうに己から體をちぢめてころりところがつた。其處には石も何もなかつた。篤介は衣服を泥まみれにしたばかりで、すこしの怪我もな

く起きることができた。そして、起きる時もらつてゐる金のことが頭を掠めた。

「待てよ、」

篤介は左の袂に一方の手をやつた。袂の中には物があつた。篤介は安心した。

「ある、ある、これさへあれや、大丈夫ぢや、」

侍女の笑ひ聲がすぐ前でした。篤介は其のほうへとろんこの眼をやつた。二人の侍女が山吹や野茨の茂みを背景にして此方を見て笑つてゐた。

「こら、其處にをるか、待て、」

篤介はよたよたと追つかけた。侍女はきやつきやつと笑ひ聲を立てて走つた。其の時篤介の狂態に驚いて入口の方から走りでた侍女の一人は、庭前で體の平均を失つて俯向きに倒れた。倒れるはづみに刈り込んだ躑躅の中へ一方の手が往つたが、何かで突きでもしたのか痛みを感じた。侍女は夢中になつて體を起すなり、一方の手で痛みを感じた方の掌を握りながら蹲んだ。其の侍女が倒れて叫んだ時、二人の雇人が話しをしいしい蘆葉庵の方へ來てゐたが、侍女の叫びを聞くや否や、其のうちの一人は燕の飛ぶやうに走つて來た。雇人は文金の高島田の根がぬけてがつくりとなつたままで蹲んでゐる侍女を見つけて寄つて來た。

「どうした、どうしたのです、」

侍女は顔をあげた。それはお多喜であつた。

「あ、お多喜さんか、」

雇人は龍吉であつた。

「龍吉さん、」

「どうしたのです、何かあつたのですか、」

「なに、お客さんが醉つぱらつて、ふざけるものですから、逃げだして來て、ころんだのですわ、」

龍吉の眼はお多喜の手へ往つた。

「怪我をしたのですか、」

「突いちやつたやうだわ、」

「どれ、」

お多喜は握つてゐた手を除つた。左の掌の親指に寄つたほうに、釘で突いたくらゐの傷がついてゐて、血が出てゐた。

「洗つてしぼつとくがいい、なんでもないや、」

「さう、」

お多喜は起つて筧の方へ往つて其の水に掌をやつてゐて退いたところで、龍吉は己の手拭の端を裂きながら來てそれでくるくるとゆはへにかかつた。

「すみません、龍吉さん、」

「なに、」

掌にゆはへ終つた龍吉は、お多喜の白い右の足首にぽつちり血のついてゐるのを見た。

「血が、足に、」

お多喜はちよつと見て紙を出して拭はうとした。其の血の附いてゐる處に爪のやうな小さな傷痕のあるのが龍吉の眼に注いた。

「すみません、」

お多喜は血を拭つて裾の泥をはたいた。壯い女の笑ひ聲がして二三人の來る氣配がした。龍吉はお多喜を離れて揮りかへつた。二人の侍女が走つて來る後から篤介がよたよたと追つて來てゐるところであつた。侍女はいい小盾が出來たと思つたのか龍吉の後へ廻つてお多喜と並んだ。篤介は龍吉を見た。篤介は兩手をひろげた。

「壯佼、おい、相撲をやろか、」

醉つぱらひにかかりあつてもしかたがなかつた。龍吉は笑つた。

「醉つぱらひさんか、」

夕陽を片頰に浴びた篤介の顏は赧黑かつた。篤介は其のまま進んで來たが、龍吉が對手にならないので氣もちがわるかつた。

「弱いやつ、ええとらんか、」

ふざけてやがる、なにが弱いやつだと龍吉は思つた。龍吉の耳には弱いやつと云つた詞がひつかかつた。

「やるか、醉つぱらひ、」

「來い、」

「なにを、」

三八

二人の體は忽ちもつれあつた。笑ひ聲が二人を包むやうに起つた。豪猪のやうな客のことを心配して後を追つて來た具慶がお八重と並んで立つてゐた。もつれあつた篤介と龍吉の體は埃をたてて旋風のやうに其のあたりをぐるぐると廻つてゐたが、間もなく一方がどさりと倒れた。それは篤介であつた。笑ひ聲がまた其處に起つた。龍吉ははだかつた襟元を直しながら仰向けに倒れた篤介のほうを見た。篤介は眼をつむつてのんびりとなつてゐた。龍吉は氣になつた。

「どうしたのです、」

「ええ氣もちぢや、此處で寢る、」

篤介はすましたものであつた。龍吉は客の暢氣さにあきれた。

「暢氣なものだ、」

龍吉がさう云つた時、具慶の聲がした。

「それでは、中江先生をお送り申せ、」

龍吉は其處に具慶がゐるとは思はなかつたのでびつくりした。其の龍吉の耳へ二度目の具慶の聲が響いた。

「龍吉、」

「は、」

龍吉の體はかたくなつた。

「お客さんに、無禮のないやうに、大切にして、駿河臺の後藤樣へお送り申せ、籠を持つて來い、」
「は、」
龍吉は引返して往つた。具慶はそれから傍に立つてゐる侍女達の顏をつらつらと見た。
「皆、籠が來るまで、此處にゐるがよいぞ、お怪我でもあつてはならんから、」
具慶は大きな聲で醉つぱらひの耳にも聞えるやうに云つてから、蘆葉庵の中へ入つて往つた。其の後からお八重。篤介は右の手を枕にしてごろりと横向きになつた。
「おい、水ぢや、水を持つて來い、」
侍女達は顏を見あはして無言の意を傳へあつた。其の結果一人の侍女が横手を廻つて蘆葉庵の方へ消えて往つた。
「水ぢや、水ぢや、水を持つて來い、」
侍女の一人がそれに應へた。
「ただ今、持つてまゐります、ちよつとお待ちを願ひます、」
「早うせえ、」
「は、」
侍女達はもう其の客を等閑にすることができなかつた。侍女達は機嫌を損じてまたふざけられるが怖かつた。
侍女達はそつとしておいて歸したかつた。其處へ彼の侍女が水を持つて來た。侍女は篤介の前へ蹲んだ。
「おひやを、」

篤介の眼があいた。
「水か、」
篤介はにうと手を出して、其の茶碗を執つて一息に飲んだ。
「うまい、もう一ぱい持つて來い、」
「は、」
侍女はしかたなしに二はい目の水を執りに往つて持つて來た。
「おひやを、」
篤介はそれを拂ひのけるやうにして手を振つた。
「けちなことを云ふな、酒ぢや、酒の冷を持つて來い、季節は夏ぢや、冷がえええぞ、」
侍女はしかたなしに其の水を持つて起ちながら傍にゐる朋輩達を見た。朋輩達の眼は客の云ふままにするより他にしかたがないだらうと云つた。侍女は蘆葉庵のはうへ引返して往つたが、まもなく水の茶碗のかはりに銚子と盃を盆にのつけて持つて來た。其の侍女はお近と云ふ侍女であつた。お近は篤介の眼の前へ蹲んだ。
「お酒を持つてまゐりました、」
篤介は眼をあけた。
「冷酒か、」
「お冷を持つてまゐりました、」
「さうか、」

篤介はいきなり手を出して銚子を執り、それを口へ持つて往つた。侍女達はそれに眼を集めながらひつそりとしてゐた。もし醜を出してそれをきつかけにあばれられてはかなはなかつた。篤介は銚子を立てて酒の溢れないやうにした。

「おい、美人、籠は來よるか、」

「は、ただ今、」

「さうか、此處の大將は、煮ても燒いてもくへんやつぢやぞ、」

「は、」

「君達も、こんな處に長くをるな、ろくなことはないぞ、」

お近は返事ができなかつた。

「おい、返事をせんか、どうなら、」

「は、」

篤介はしやがれたやうな大きな醜を出して笑つてから、銚子を口の緣へ持つて往つた。其處へ龍吉が籠昇を伴れて來た。

「此のお客さんだ、」

龍吉の後から籠昇であらう蟠りのない口をきいた。

「寢なすつてから、飲んでら、」

「蛇の子ぢやあるめえな、」

篤介はひよいと半身をおこした。

「おい、籠昇、酒を飲むか、」

大きな男が二人籠をおろして立つてゐた。

「お酒をいただくと、息ぎれがして歩けませんや、なあ兄弟、」

「さうとも、往きにや飲まねえこつたよ、たつてとおつしやるなら、向ふへ往つてからいただくことにして、早く乘つていただかうぜ、」

「それがいいや、」

篤介の醜がそれを押へつけるやうに聞えた。

「待て、籠昇、」と篤介は思ひだしたやうに銚子を左の手へ持ちかへて、右の手を其の袂に觸れた。袂の中にはやつぱり物があつた。「よし、大丈夫、これさへあれやええぞ、これで安心ぢや、」

篤介は勢ひを得たやうに起つたがひよろひよろして體がきまらなかつた。そして、ひよろひよろしながら銚子を口へ持つて往つた。酒はもうぽつちりしかなかつた。篤介は銚子を投りだして立ちなほり「さあ、乘るぞ、」と云ひながら籠の口へ往つて倒れ込むやうに中へ入つてごろりと圓くなつて寢た。龍吉はそれを見ると籠昇に注意した。

「駿河臺だよ、」

籠昇は籠をもちあげてゐた。

「よし來た、駿河臺、」

「駿河臺の後藤樣、」
籠はとつとと出て往つた。鶯介は籠の中でいい氣もちになつてうとうととしてゐたが、思ひだしたことがあつたので聲をかけた。
「おい、おい、」
後の籠昇が對手になつた。
「へい、」
「君達は何處へ往く、」
「何處つて、駿河臺でねえのですか、」
「駿河臺ぢやないぞ、」
「だつて、駿河臺の後藤樣つて、云ひつかつとりますぜ、」
「ちがふ、駿河臺は假父の家ぢや、吾輩の家はちがふぞ、」

三九

籠はぴつたりとまつた。籠昇はおこるやうに云つた。
「ぢや、どこですかい、」
「後ぢや、」
「後つて、お邸へ引返すのですかい、」

「何人があんな妖怪屋敷へ引返すか、」
「ぢや、何處へ」
「まあ、理窟を云ふな、理窟を云はずに西へ往け、」
「西つて、何處ですかい、」
「江戸から西は、東海道ぢやないか、」
「ヘッ、」籠昇は吐きだすやうに云つて「おい、兄弟、五十三次をのせとおつしやるぜ、」
すると相棒がそれにこたへて、
「おほかた、大井川の水でも飲みてえだらうよ、」
籠はぐるりと廻つて引返した。籠はもう急がなかつた。暫く往つて籠昇が聲をかけた。
「もし、もし、お客さん、」
間をおいて鶯介が返事をした。
「なんなら、」
「濱松町ですが、いいのですか、」
「なに濱松町、」
「さうですよ、これから往くと金杉橋ですが、いいのですかい、」
「ええとも、其の金杉橋を渡れ、」
「お宅は何方ですかい、」

「西ぢや、」
籠昇は默つた。籠は暫く往つた。籠昇がまた云つた。
「お客さん、」
篤介の聲は寢ぼけてゐた。
「呼うだか、吾輩を、」
「呼んだのですよ、もう田町ですぜ、ぜんたい何處ですかい、」
「まだ西ぢや、西へ往け、」
「西つて、そんなに西へ往つて、あんたの家があるのですかい、」
「あるから、往きよる、理窟を云ふな、」
籠昇は前後からえたいの知れない客を喝つたが、大事の客であるから自由に投りだすこともできなかつた。籠はまた暫く往つた。
「もう、泉岳寺の前だ、冗談ぢやねえや、」
「おい、兄弟、そつと覗いてみな、しつぽを出してるから、」
「それよか、ひつぱたくがいいや、どうせ獸だ、」
「いきなりひつぱたくも可哀さうだ、一度聲をかけてやんな、」
「さうだな、おい、お客さん、」
篤介の寢ぼけ聲が聞えて來た。

「なんなら、」
「泉岳寺へ來たのだ、どうするのです、」
「まだ西ぢや、西へやれ、」
「まだ西ですかい、」
「さうぢや、西ぢや、東海道は長いぞ、」
「へッ、」
「ばかにしてらあ、」
籠昇はしかたなしにまた暫く往つた。
「おい、たいがいにしねえかよ、もう谷山だぜ、」
篤介の聲がはつきりしてゐた。
「犬が歩行新道ぢや、其處ぢやよ、君達にも一ぱいおごるぞ、蟹と海老の甲良の赤い店へおろせ、」
もう事情ははつきりしてしまつた。籠昇の不平もなくなつた。
「どうりで、」
「お客さんは、ただものぢやねえな、」
篤介は品川の妓樓街の入口へ店を並べた飲食店の一軒へ籠昇を伴れて入つた。其の篤介は其の翌日の夕方、麴町三年町の大久保邸の前へ往つてゐた。
大久保家の馬丁の良助はぶらりと門口へ出た。良助は其の日も主人の馬車に跟いて太政官へゆき、それから歸

つて御者の爲三と二人で車の始末をしたので、主人が不時の外出をしないかぎり、朝まで已の體になるのであつた。壯い良助は自由になつた已の前に、何かしら明るい世界があるやうな氣がするので、馬丁室の上框へつくねんと腰をかけて、夕飯の知らせを待つてゐるやうなことはできなかつた。門の外になつた街路には落日の陽炎を浴びて燕が飛んでゐた。一つの燕は良助の眼の前でひらりと腹をかへした。しかし、燕は良助の眼に映らなかつた。良助の前には水茶坊の座敷と女の姿が髣髴としてゐた。それは花の比大久保家の玄關にころがつてゐる食客の一人に、伴れて往かれた平川天神の傍にある水茶坊であつた。水茶坊の座敷と女の姿が浮ぶと、其の水茶坊と女の姿に近づきたくなつた。良助は金がほしいと思つた。しかし、其の金はいくらでもなかつた。

「二分もあれや、いいがなあ、」

良助の口からさうした詞がもれた時、すぐ近くで下駄の音がして人の來た氣配がした。其處には篤介が新らしい足駄を穿いて立つてゐた。

「君、君は大久保さんの馬丁さんぢやらう、」

良助はめんだうであつたが、大久保の馬丁と云はれたことがうれしいので返事をした。

「さうですよ、汝さんは、」

「僕は諸生ぢやが、君はええなあ、君は天下の名士といつしよにをれるから、羨ましいなあ、あんな豪い、ゆくゆくは太政大臣にもならうと云ふ人と、平生いつしよにをれるから、僕は時どき、君が馬車の後へ立つて、馬車を走らしてをるところを見かけるが、君ほど幸福な人はないと思ふよ、」

良助は篤介の詞につりこまれた。

「さうかなあ、わつしは始終いつしよだから、なんとも思はないが、さうかなあ、」

「さうとも、大久保先生は、君、當世の偉人ぢやよ、外國であつたら、大統領と云うて、天子と同じやうな位につける人ぢやよ、まだ今では、三條さんや岩倉さんが上にをつて、政府のことは大久保先生の自由にならんやうに見えるが、ほんたうは大久保先生がきりまはしてをるからなあ、君は羨ましいよ、」

良助はうれしくてたまらなかつた。

「さうかなあ、うちの旦那は、そんなに豪いかなあ、」

「豪いとも、御一新の時でも、大久保市藏先生と云や、西郷さんよりも、木戸さんよりも利けてをつたから、それに人物が堂堂としちよるから、」

「さうかなあ、」

「さうとも、」篤介はさう云つてからなにか思ひ出したやうにして、「あ、あまり話しよると時間におくれる、今日は友達と牛肉を喫ひに往く約束をしちよる、また此の次にしよう、君は、酒はどうぢやね、」

「酒かね、酒は好きだよ、」

「さうか、それや面白い、僕は大久保先生を崇拜しちよるから、一ぱいやりながら、大久保先生のことを聞きたいが、今日は約束があつて、どうしても往かんとつがふがわるいから、二三日のうちに來る、君は何と云ふかね、名は、」

「わつしかね、わつしは良助つてえのだ、」

「さうか、良助君か、よし、それぢや、明日か明後日か、きつと來る、今比ならええぢやらう、」

「ああ、今時分なら、平生歸つてるのですよ、」
「さうか、そんならきつと來る、ぢや失礼、」
篤介は良助と離れて往つた。良助は諸生と別れるのが惜しかつた。それは己の望んでゐる慾望を其の諸生が持つてゐるやうに思はれるがためであつた。
「良坊、おい良坊、」
良助は夢をさまされたやうに思つた。良助は其處に御者の爲三の皮肉な苦みばしつた顏を見た。
「爲さんかい、」
「なにをぼんやりしてるのだ、昨日信州へ歸つてた山猿のことでも考へてるのぢやねえのか、よせやい、みつともねえ、女の子は、其處いらあたりにうようよしてらあな、」
「へッ、おいらあ、他の權妻の後をつけてつて、食客にぶんなぐられるやうな、へまなことはしないから、おいらあ、女がほしけれや遊びに往くよ、」
「さうよ、其の金をこさへるために、うんとはりな、はつて法被まで剝がれな、」
「なにを、つまらない、」
良助の着てゐる法被は博奕のかたにとられてゐるのであつた。良助はしかたなしに笑つた。
「どうだ、まけたか、まけたら甲をぬいで、さつさと來ねえのか、冷飯がつめたくならあな、」
爲三にはかなはなかつた。良助は苦笑しながら爲三に跟いて夕飯に往つたが、それが終つて馬丁室へ歸つて來る時諸生のことを思ひだした。

「さつき乃公が門口に立つてると、面白い諸生が來て、うちの旦那を神樣のやうにほめてたぜ、」
「うちの旦那と岩倉さんは、人くひ馬にあひくちだと云つてやしなかつたかい、」
「またはじめやがつた、だから汝はいけねえのだ、」
「いけなけれや、また何處かへ往くさ、おいらあ、田舍漢は性にあはねえや、」

四〇

翌日になつて良助は例によつて主人の伴をして往つて、夕方に歸つて馬車の跡始末をしてゐるうちに前日の諸生のことを思ひだして、跡始末が濟むなり急いで出て往つた。其の日は前日よりも時間が遲くなつてゐて街路はうつすらと暮れてゐた。良助は街路へ出て見た。二三人の通行人が前を往つたが、彼の諸生らしいものは見えなかつた。良助は諸生は來たけれども己のしまひが遲かつたから、歸つたのではあるまいか、それとも明日か明後日かと云つてたから、今晩は來ないで明日の晩あたり來るかもわからないと思ひだした。良助はちよつと立つて前後を見てゐたが、どうも諸生は來さうにもないので諦めて門の中へ入らうとした。
「おい、君、良助君ぢやないか、」
良助は待つてゐた諸生の聲を聞いてうれしかつた。篤介が右の方から來たところであつた。
「ああ、昨日の、」
「失礼した、出足へ朋友が來たものぢやから、遲うなつた、一ばいやらう、僕がおごる、」
「汝さんに、おごつてもらつちやすまないが、」

「なに、ええ、僕は大久保先生を崇拝しちよるから、大久保先生と平生いつしよにをれる人がなつかしうて、交際しに來ちよる、さあ往かう、君、用事はなかろ、」

「明日の朝までは、暇ですがね、」

「そんなら、往かう、其のへんへ往つて飲まう、」

「さうですか、それやすみませんね、」

「さあ、往かう、」

「ぢや、ちよつと待つてておくんなさい、相棒にことわつときますから、」

「さうか、さうしたまへ、」

良助は其處で內へ入つて往つて馬丁室の口で庭男の老人と話してゐた爲三に、ちよつと用達しに往つて來ることわつておいて出て來た。

「君は、何處か知つちよる處があるかね、」

良助は水茶坊のことを云ひたかつたが云へなかつた。

「あまり知らないです、」

「そんなら、どこか歩きよつたら、ええ處が見つかるぢやらう、」

二人は伴れだつて歩いた。街路の上には蒼白い月の光が微に漂うてゐた。歩いてゐるうちに篤介は繩暖簾を見つけた。

「ええ處がある、まあ、此處で一ぱいやつちよいて、また何處かへ往かう、」

良助は平河天神の方へ直ぐ往きたかつたがさうも云へなかつた。

「何處でもけつかうですよ、」

二人は暖簾を潜つて入つた。中には五六人の客がゐて飯を喫つたり酒を飲んだりしてゐた。篤介も良助と其の傍へ腰をかけて酒を註文した。

「おい、酒をくれ、肴も何か酒の肴になりさうなものを持つて來てくれ、」

五十前後のづんぐりした顏から胸元にかけて赭い主翁が酒を持つて來、酒の後から肴を持つて來た。肴は魚軒、ぬた、薇蕨草の茹のやうなものもあつた。篤介は銚子を持つて良助にさした。

「さあ、やりたまへ、僕は遠慮は嫌ひぢやから、君も遠慮せずにやらうぢやないか、」

良助はちよいと頭をさげて盃を持つた。

「どうもすみませんね、わつしもあまり遠慮はしない方でしてね、」

「それがええ、今の世に遠慮などしよつたら、どんな目に遭はされるかわからん、遠慮しちやいかん、大にやりたまへ、僕もやる、」

二人は盃を持つた。主翁は銚子を二本三本と持つて來た。

「實に愉快ぢや、大久保先生といつしよにをる人といつしよに飲むことは、ちよつと他の諸生にはできんことぢや、實に愉快ぢや、君の相棒はなんと云ふかね、君の相棒とも一度交際したいが、」

篤介は手にしてゐた盃の酒をぐつと飲んだ。良助は茹を口に入れてゐたので口をもぐもぐさした。

「あ、い、ぼう、で、すか、爲と云ふのです、秋山爲三つてね、江戸つ子で、口がわるいが、竹を割つたやうな

いい男ですよ、」
「それや面白い、二三日のうちに往くから、紹介してくれたまへ、一ぱい飲まう、」
「飲みませう、夜は何日もゐますから、馬丁室へいらつしやい、」
「飲んでもええかね、」
「手錢で飲むぶんに、何人がなんと云ふものですか、」
「さうかね、僕はまた、大久保先生のお宅ぢやから、禁じてあると思つたから、」
「酒と博奕をとめて、三日とゐるものがあるものですか、」
「それもさうぢや、そんなら、二三日のうちに一升持つて往かう、爲三君に紹介してくれたまへ、」
「いらつしやい、爲さんも酒好きで、酔ふとどいつをやるのですよ、」
「さうかね、それや面白い、それぢや二三日のうちに往くことにして、今晩は、これから二人で、芳原へ往かうぢやないか、」
良助は話が其の方へ向いたのでよろこんだ。
「芳原ですか、わつしは往きたいが、どうしても、夜半までに歸らないと、邸のぐあひがわるいものですからね、何處か手近な處はどうです、」
「あるかね、面白い處か、」
「平河天神の處に、水茶坊があるのですよ、」
「君、知つちよるか、」

「うちの諸生さんと時どき往くのです、」良助は對手の好奇心をそそりたかつた。「佳い女がゐるのですよ、」
「さうかね、そんなら其處へ往てもええが、」と云つてから、「もうすこし飲まう、何處へ往くにもすめぢやいかん、」
良助はしめたと思つた。
「さうですよ、すこし醉つぱらつてゐないと、ぐあひがわるいのですよ、」
「さうとも、」
二人はまたひとしきり酒を飲んだ。酒を飲みながら爲介は良助の心を深く捉へることを考へてゐた。
「君は、どうしても歸らんといかんかね、」
「さうですよ、そいつは首にかかはりますからね、」
「そんなら、かうしよう、僕は一人で芳原へ往くから、君も一人で水茶坊へ往つて遊ぶことにしようぢやないか、金は僕が出すから、」
「なに、いいのですよ、わつしは、そんなに往きたくねえから、」
「そりやいかん、僕の好意が無になるから、」爲介は袂へ手を入れてチリチリと音をさしながら何か執りだして良助の前へおいた。それは七八個の二分金であつた。「これで、遊んで來たまへ、僕も遊びに往くから、」
良助はきまりがわるいので直ぐ手を出すことができなかつた。
「そいつは、どうも、」
「それが遠慮と云ふものぢやよ、遠慮はせんはずぢやないか、」
「それでも、そいつは、」

「男はあつさりするがええ、持ちたまへ、」
「さうですか、それではいただきませうか、」良助はそれを執つて腹拵へ入れて、「どうもすみませんね、」
「なにええ、それで、往くときまれや、早いがええ、出やう、」篤介は手を鳴らした。「おい、勘定してくれ、勘定ぢや、」
二人は勘定をすまして外へ出て別れた。良助は其の足で水茶坊へ往つて遊び、歸つて爲三に其のことを話して土佐詞の盛友の來るのを心待ちにしてゐると、三日目の夜になつて篤介が馬丁室の入口へ顔を出した。
「おい、良助君、遊びに來たよ、かまんかね、」
良助は爲三と行燈の傍へ寢ころんで話してゐた。良助は急いで起きた。
「ああ、諸生さんですか、どうかおあがんなさい、」
「かまんかね、今晩は、君の朋友に紹介してもらはうと思うて、一升持つて來た、」
爲三も起きて皮肉な眼を篤介に向けた。篤介は一方の手に德利、一方の手に竹の皮包をぶらさげてゐた。
「さあ、おあがんなさい、此の間は、どうも、」
「失敬、失敬、」篤介は上へあがつてすぐ胡座をかきながら爲三を見て、「君が爲三君ぢやね、良助君から聞いちよる、以後よろしく、」
爲三もだまつてゐるわけにいかなかつた。
「おいでなさいまし、此の間は、良さんが御厄介になつたさうで、どうもすみませんでしたね、」
「なに、僕は大久保先生を崇拜しちよるから、大久保先生といつしよにをれる人がなつかしうて、此の間は良助君と近づきになつたから、今日は君と近づきになりたうてね、」
「さうですか、それはどうも、」
三人はそれから篤介の持つて來た酒を飲んだ。酒が無くなると良助が買ひに往つた。篤介は其處に夜半比までゐて歸つたが、それから四五日して、何時かの繃暖簾へ良助と爲三を伴れて往つた。
「おい、君達、僕は一生の思ひでに、大久保先生とたつた一言でええから、話をしたいが、何かええ工夫はあるまいかね、」
良助には何の考へも浮ばなかつた。
「さあ、そいつは、」
「さうだなあ、且那と話をするには、わつしらのやうに、御者か馬丁になれや、いつでも口が利けるが、」と云つて爲三も考へたが、ちよと思ひ出せなかつた。「さあ、なあ、」

四一

午過ぎになつて雲汁の中へ菜つぱ汁を流し込んだやうな鬼魅わるい雲が出て、それがみるみる空を覆うたかと見る間もなく、ぱらぱらと雹を降らしてすぐやんだ。それは甲州方面から來る氣流によつて起るもので、桑の芽の被害を恐れる多摩川沿岸の農家に雹祭までやらせる乾象の一つであつた。そして、雹のやんだ後には輝きの強い陽が出てゐたが、其の陽も西に落ちかけて物の影を長く地に曳いた。
篤介は其の陽を浴びて小さな體の影をもう乾いて埃だつてゐる街路の上に曳きながら三年町へ來た。其處は大

久保邸から二町ばかり離れた處で古い板塀に圍まれた某邸の前であつた。篤介は其の邸の前へ立つて街路の左の方を見てゐた。燕は落日の光に染まつて飜つてゐた。左のほうには二三人の人影が見えてゐたが篤介の眼には入らなかつた。篤介の背にして立つてゐる邸の左は、狹い横町を距てて空地になつた隣の邸に接してゐた。篤介は往くともなしに其の方へ往つて横町へ姿を消して往つたが、すぐ引返して來て出口から左の方をのぞくやうにした。左の方から一臺の人力車が見えて來た。其の人力車も篤介の待つてゐるものではなかつた。篤介は人力車の後の方へ眼をやつた。人力車の後には何も見えなかつた。篤介は考へた。篤介は大久保利通の馬車を待つてゐるところであつた。日影のぐあひではまだすこし早いやうであるが、政府の大官のことであるから屬吏のやうに時間の制限がないので、ついすると歸つてゐるかもわからない。いつそ馬丁室をのぞいてみやうかと思ひだした。しかし、數回の經驗において歸りはどうしてもまだであつた。篤介はもすこし待つてみやうと思つて蹲んだ。

街路の上にはすこし風があつた。其の風は兩側の人家の圍ひの中にある樹木の枝葉、其の日の雹雨に埃を洗はれた嫩葉を動かして其のはてが街路の上で小さく沙埃を舞はすのであつた。篤介は眼の前に來た沙埃の舞ひを恐れてひよいと起つたが、砂埃は篤介の右の眼にかかつて眼の中は澁をひいたやうな微な痛みを覺えた。篤介は一方の指を右の眼頭へやつてそうつとこすりながら沙埃を其の方へ除らうとした。沙埃は滲み出た涙に洗はれてとれてしまつた。篤介は安心して急いで左の方へ眼をやつた。其處に篤介が待つてゐたものを見つけた。篤介は緊張した。篤介は思はず襟元を掻きあはせ、それから袴の紐に手をやつて紐の結び目をぎうと固くした。

篤介の待つてゐた馬車はみるみる姿をはつきりと見せて來た。馬車の車體は二頭のたくましい馬によつて牽かれてゐた。其の馬の右横に添うて馬丁がかけてゐた。馬丁は良助であつた。御者臺には爲三が革つきの鞭を持つ

て乘つてゐたが、時をり其の鞭を落日の光に閃かした。

篤介は利通に怪しまれてはならないと思つたので、後の塀へ背をひつつけるやうに體を後へやつて胸をときめかした。馬の右側に添うてかけてゐた良助の姿が不意に見えなくなつた。篤介は眼を見はつた。良助は車の後へあがつたところであつた。篤介はまづ爲三に己の來てゐることを知らさうと思つたが、聲をかけることも手をあげることもできないので、眼をくるくるさして爲三の方を見るのみであつたが、爲三は一心になつて前を見て馬を驅つてゐるので篤介の姿は眼に入らなかつた。篤介はじれつたかつたがどうすることもできなかつた。これは困つたなと思つてゐる間に馬車はすぐ前へ來た。篤介は爲三をあきらめて良助に己のゐることを知らさうと思つた。其の時馬車は篤介の前を往き過ぎやうとして一方のガラス扉から利通の黑い洋服を著た横姿を見せた。篤介はもう躊躇することができないので、走り出やうとしたところで良助が此方を見た。良介の眼が輝いた。それは篤介を見つけた證であつた。篤介は喜んで手をあげながら馬車の後の方を目がけて走つた。そして、馬車の後へ體が往くなり飛びあがつて良助に並んで立つた。

「おい、たのむぞ、」

篤介はささやくやうに云つて息をはづました。良助はあわててゐた。

「ど、どうするのだ、」

「大久保先生に逢ひに來た、たのむぞ、」

「――――」

良助はもう何も云へなかつた。良助は酒を飲ましてもらつてゐる時、篤介から一生の思ひ出に大久保先生と話

をしてみたいから、何かいい方法はないかと相談せられてゐるのでおりてくれとも云へなかつた。しかし、廣澤參議の暗殺をはじめ雲井龍雄の事件などがあつて、素性の知れない浪人や諸生が物騒がり、それについては家人からも注意されてゐるので自由に人を乘せてゆくことはできなかつた。良助は困つてしまつた。

「君達の迷惑に、なるやうなことはせんぞ、」

「どうかたのみます、」

良助は安心ができなかつた。良助は篤介の傍にゐるのが苦しいのでひらりとおりて馬に添うて走つた。篤介は小さな肩を聳やかしてゐた。馬は邸が近くなると勢ひ込んで走つた。良助は其の馬の周圍に出沒した。

馬車はやがて大久保邸の前へ往つてぐるりと曲つて邸内へ向つた。其のはづみに車體が左右へ搖れた。篤介はそれがために體の平均を失はうとしたのでしつかりとすがりついた。

「おかへりイ、」

良助の大きな聲が蹈と車輪の音を壓して聞えた。續いて馬車は玄關へ横づけになつた。

「おかへりイ、」

玄關にはもう十人ばかりの男女の顔が見えた。篤介は馬車がとまるなりひよいとおりた。良助はおづおづ馬車へ寄つて往つて扉を開けた。馬車の中から主人の利通が前かがみになつて出て來た。面長な濃い頬髭の左右にはねあがつた利通の姿を見ると篤介は前へ進み出た。

「閣下、」篤介は頭をさげて「お願ひがございます、」

利通は奥ぶかく見える澄んだ眼を見はつた。

「その方は、何者ぢや、」

「僕は怪しいものぢやありません、僕は土佐の中江篤介と云ふ諸生であります、ちよつとではありますが、南校の助教をしたこともありまして、怪しいものぢやありません、」

「なにごとぢや、」

「學問のことであります、閣下にお願ひしようと思ひまして、玄關まで伺ひましたけれども、紹介がありませんから、お目にかかることができませず、こちらの馬丁さんに頼うで、馬車の後へ乘せてもらうて來ました、どうか、僕のお願ひを聞いてください、」

「云ふがよかろ、どんなことぢや、」

「留學生のことであります、僕はフランス學をやつてをりますが、今回、閣下はじめ岩倉さん達が、歐米の視察にお出でになるついでに、政府ではたくさんの留學生を送ることになつたと聞きましたから、それについて閣下にお願ひがありまして、」

「さうか、其のことか、それでは、まあ、おあがり、」

「は、」

利通は玄關へ往つて食客の一人に靴をぬがせて上へあがつたが、あがつた時篤介の方を振りかへつて傍にゐるものに注意した。

「あれを通すがよい、」

利通は其のまま入つて往つた。出迎へてゐたものは其の後から跟いて往つた。篤介は玄關口へ立つてゐた。

「おあがりなさい、」
其處にはいつか篤介に玄關拂ひをくはせた執りつぎの食客がゐた。
「やあ、君か、」篤介は上へあがりながら、「失敬、」
「さあ、どうか、」
執りつぎはきまりわるさうにして足ばやに歩いた。篤介はほがらかな氣もちで跟いて往つた。執りつぎは篤介を應接室へ案内した。其處は卓子を据ゑ椅子を置いた廣い室であつた。篤介が取りつぎから與へられた椅子へ腰をかけたところで、婢の一人が茶を持つて來た。篤介は咽喉が乾いてゐるのですぐそれを執つて飲んだ。茶は旨かつた。
「うまい、」
婢は無遠慮な諸生を横目にぢろぢろ見ながら出て往つた。篤介は頓著しなかつた。篤介はさうして氣をおちつけて利通の來るのを待つてゐた。一枚開けてある障子の外には新芽の出た小松の二三本の群がりがあつて、それが暮れきらない庭の明るみの中に浮いたやうになつてゐた。篤介の眼が其の小松の枝葉へ往つた時、遐音がして利通が入つて來た。天保元年八月、西郷隆盛から二つの弟として、同じく鹿兒島市を流れてゐる甲突川の東岸になつた鍛冶屋町に生れた風雲兒は四十二歳になつてゐた。篤介はそれと見て起つておじぎをした。
「さあおかけ、」
「失敬します、」篤介は利通と向きあつて腰をかけながら話のきつかけを待つてゐたが、利通がぢつと此方を見たままで何も云はないので己から口をきつた。「今日は閣下を襲撃したやうで、失敬ですが、僕は十七の時に、洋學

に志して、十九の時、高知藩の留學生として長崎へやられ、長崎で、平井義十郎先生に就いて、フランス學を修め、それから江戸へ出て村上英俊先生に就き、横濱の天主教の坊主に就き、フランス領事に就き、明治になつて箕作麟祥先生に就いて學びまして、もう日本には、就いて學ぶべき師もなければ、讀むべき書もなくなりましたから、此のうへはフランスへ往て、根本的にフランス學を修めたいと思ふちよりましたところが、今回、閣下はじめ岩倉さん達が、歐米の視察にお出でになるついでに、政府ではたくさんの留學生を、各國へ送ると云ふことですが、」
其處へ婢の一人が洋燈を持つて來て置いて往つた。
「ところで、其の留學生は、皆官立學校の生徒と云ふことでありますが、ぜんたい、國家が、留學生を歐米に送ることは、歐米の學術を日本へ移植するとともに、國家有用の人材を作るためぢやありませんか、」
利通ははじめて頷いた。
「さうぢや、」
「しからば、歐米に送る留學生は、學力優秀、頭腦明晰な人物でなくてはなりますまい、それに、同じく日本國民であつて、同じく國家のために盡し、同じく國家に對して責任があり、義務を負擔しなくてはならん國民に、私學ぢやからと云うて、うすくすることは當を得んと思ひますが、如何でせう、」
「うむ、」
「僕ははじめに申しましたやうに、日本には學ぶべき師もなければ、讀むべき書もありませんから、フランスへ往て、根本的にフランス學を修めたいと云ふ志望に燃えてをります、どうか閣下の御盡力で、留學生の一人にな

れるやうに、お執りはからひを願ひます、」
利通の片頬に笑ひがのぼつた。
「しかし、君は、土佐人ぢやないか、土佐には、後藤も板垣もあるぢやないか、何故、此の二人にたのまない、」
「僕は、同郷の賓緣情實を辿るのを潔としませんから、閣下にお願ひにあがつたしだいです、」
「よし、それぢや、きんきん、後藤と板垣に話して、なんとかしてみやう、」

四二

お多喜とお若は微暴のした庭で羽子をついてゐた。二人が季節はづれにこんなことをするのも、奥向きのことを宰領してゐる後室の慶子がゐないがためであつた。お多喜とお若は喜喜として白い歯を見せあつてゐた。微紅く染めてある羽は櫻の花のやうにひらひらと飛んだ。
「よウ、」
「よウ、」
「もすこし、きつくよ、」
「これでいい、」
「これでいいわ、」
「よウ、」
「よウ、」

「あんまり高いわ、」
「つきおとしは、だめよ、」
「それぢや、まけにしといて、あげるわ、」
「それぢや、いただくわ、」
「わたしも、いただくわ、」
「すこし高いわ、」
「それぢや、すこしひくくするわ、」
二人は一生懸命になつてゐた。
「こんどは、うまくあげるわ、」
お若の飛ばした羽をお多喜がおしやればねで返したところで、其の羽は横に高くそれて往つて傍の梅の枝にかかつた。
「あ、」
「かかつちやつたわ、」
二人は梅の下へ集まつて枝を見あげた。緑葉の葉がくれには梅の實が緑玉を綴つてゐた。
「困つちやつたわ、」
「困つたわ、」
「何か持つて來ませうか、」

「さうねえ、」
「わたしが往つて來ますわ、」
お多喜はもう走つて奥の縁側の方へ往つた。お若はやはり羽のかかつた梅の枝を見てゐたが、輕い眩暈を覺えたので俯向いた。
「持つて來ましたわ、」
お多喜が箒を持つて來た。お若は眩暈がをさまつたので顔をあげた。
「すみません、」
「とどくでせうか、」
お多喜は仰向いて羽子板といつしよに持つてゐる箒の端を梅の枝にやらうとした。箒は一尺も短かつた。
「短いわ、これ、」
「物干竿を持つて來ませうか、」
「持てて、」
「持てますとも、」
お若が往かうとしたところで草履の音がした。お多喜がまづそれに眼をやつた。來たものは龍吉であつた。
「おや、龍吉さん、」
「お多喜さんとお若さんか、羽をついてゐるのだね、もう正月だね、」
龍吉が笑つたところでお若が口を入れた。

「羽がかかつたから、載つてくださいよ、」
「さう、」龍吉はお多喜とお若の眼の後を追つて梅の枝にかかつてゐる羽を見た。「あれか、よし、」
龍吉はちよと考へてゐたが、考へついたのか梅の根元の方へ往つて、其のまま槎杆とした枝を別けて登りはじめた。それにお多喜が驚をかけた。
「あぶなくないこと、龍吉さん、」
「なに、」
龍吉は身輕く登つて往つた。そして、二人の頭の上あたりへ往つて一つの枝に兩手をかけて搖り動かした。それは羽のかかつてゐる枝であつた。枝はぴりぴりと葉を動かしてゐたが、やがて大きくゆらゆらと動きだして、かかつてゐた羽がひらひらと落ちて來た。
「おちたわ、」
「おちましたわ、龍吉さん、」
落ちて來た羽はお若が拾つた。龍吉は枝をゆるがすのをよして蜥蜴のやうな恰好をしておりて來た。其の龍吉の骨ばつた白い足が小さな枝にかかる時、お多喜は其の枝が折れて下へ落ちはしないかと思つてはらはらした。
お多喜は羽のことを忘れてゐた。
「あぶないわ、落ちやしないこと、」
葉がくれに龍吉の顔が覗いた。
「大丈夫、」

「さう、」
拾つた猫を弄つてゐたお若は笑ふ聲をだした。
「龍吉さんは、威勢がいいから、落ちたつてかまやしないことよ、」
「なぜ、」
「なぜつて知らないこと、」
お多喜は判らなかつた。
「なんだらう、」
「判らない、ごよ、」
「ごつて、なんなの、」
「此のひとは、よつぽど血のめぐりがわるいわよ、」
「なんだらう、ごつて、」
「ごつて、御後室様よ、」
お多喜は笑ひだした。
「判つたでしよ、御後室様よ、」
お多喜は笑ひつづけた。龍吉はもうおりてゐた。
「なに云つてやがるのだ、」
お若が龍吉の方へ戀慕さうな眼を見せた。

「熱海へ往きたくないこと、」
慶子は滿腹の翌翌日、體の具合がわるいと云つて、お濱を伴れて熱海にゐる具慶の夫人の許へ往つてゐるところであつた。
「ばか、」
「ばかなことないわ、ほんとに龍吉さんは、羨ましいわ、佳い人が數多ついてて、」
お多喜が聞いた。
「數多つて、他にもあつて、」
お若はお多喜を見かへつた。
「お多喜の方よ、」
「いやよ、お若さん、」
「いやなことはないでしよ、」お若はくるりと前方むきになつて獨りで猫をつきだした。「ひとりきな、ふたりきな、みてきな、」と數へて笑ひ聲を交へ、「よつてきな、いつきて、むつかし、なんのやくし、ここのまひぢや、とうよ、」とほまでいくと、「じふいち、じふに、じふさん、」
お多喜も龍吉もお若の方を見て笑ふばかりで、お多喜も龍吉の方を見ることができなければ、龍吉もお多喜の方を見ることができなかつた。お多喜は困つた。
「お若さん、ひとりつくのは、づるいわよ、」
「さう、それでも、」と云つてから、「じふさん、じふし、じふご、」と數へ「あなたと遊んでると、」と云つて、「じふ

ろく、じふしち、じふはち、」とつづけ、「龍吉さんにわるいわよ、」それから、「じふく、にじふ、にじふいち、」

「ばか、ねえ、此の人は、いつしよにつきませうよ、」

お若は飛ばしてゐた羽を羽子板の上に受けた。

「では、二人でしませうよ、龍吉さんに、わるかあないこと、」

龍吉は苦笑した。

「ばか、乃公がひどい目にあはせるから、」

「おほこわ、」お若は笑つてお多喜のほうを見て、「お多喜さん、かんにんしてもらつて頂戴よ、」と云つて羽子板を持ちたほして、「では、あげますわ、」

お若がぽんとついて飛ばした羽をお多喜は受けてつきかへした。

「よウ、」

「よウ、」

「ひくいわ、」

「これでいいこと、」

「それでいいわ、」

龍吉はいい氣もちで立つて見てゐた。と、其の龍吉の肩を不意にたたいたものがあつた。

「わッ、」

欠

龍吉は此の二人の議論を平生聞かされてゐた。二人の議論しあつてゐることは集議院の大問題となつた國學至上主義的な問題であつた。それは前年即ち明治三年五月二十八日に開院して九月十日に閉院となつた集議院で、御下問となつて現はれた――皇國學神を祭り、孔廟釋奠御廢止之事、漢籍を素讀することを廢して專ら國書を用ゐ候事――と云ふ議事の一つについてであつた。一方水戸派の大義名分論の漢學につながり、一方神道と結んで幕府を倒した國學は、勢ひに乘じて、――大學校、神典國典に依て國體を辨へ兼而漢籍を講明し實學實用を成すを以て要とす――の學校規則となり、更に進んで集議院における漢學排斥的な議事となつて現はれたので、漢學によつて教養せられた議員の多い集議院では、其れに反對するものが多く、彼の廢刀論以來の問題となつたのであつた。漢學の教養のある岡本は、其の時集議院で森滯の議員の一人が云つたやうに、數十年を出でないで、蠻行の文字はすたれて、西洋各國の有識者は漢學を修め、著書は漢文を用ゐるであらうと云ふやうな議論をするのに對して、英語を學んでゐる山脇は、汽船が海を駛り汽車が陸を走ることも、エレキテルのことも、皆蠻行文字のたまものであるから、これからの日本人は、洋服を着、眼の球を蒼くし、パンを喫つて、蠻行文字の學問をしなくてはならないと云つて駁してゐるのであつた。二人は龍吉の傍へ來たことも判らなかつた。

「龍吉君か、だめだよ、其の二人は氣が狂つてるから、此方へ來たまへ、」

雜誌を見てゐた下村が顏をあげたので龍吉は其の前へ往つて座つた。

「道旗さんも、吉岡さんも學校ですね、」

欠

「道徳は易だらうが、吉岡は判らんぞ、あいつ、お八重の方のお伴をしない時にや、何時も美少年を追つかけてゐるから、」

それは耳よりなはなしであつた。龍吉は吉岡の行動をそれとたく、食客室で聞きださうとしてゐるところであつた。

「それぢや、吉岡さんは、學校へは往かないですね、」

「まあ、往かんに近いやうなもんだが、めつたなことを云ひよると、奥へ聞えるから、いかん、いかん、」

「わつしは、なにもしやべりやしませんよ、」

「いかん、君は奥に人望があるから、いかん、」

「そんなことがあるものですか、人望のあるのは、吉岡さんでさあ、」

「いかん、君は好男子ぢやから、人望がある、いつか君が喧嘩して歸つて來た時、奥の婢がそつと見舞に來たと云ふぢやないか、おい、怪しいぞ、」

「あれや、いつか、お八重さんとお多喜さんがいがみあつた時、わつしがお多喜さんをかばつてやつたから、お多喜さんが禮に來たのですよ、」

「其の云ひわけは、くらい、くらい、」下村はこわいろもどきに云つて、とにかく、君と吉岡君は羨ましいぞ、」

「羨ましいのは、吉岡さんばかりですよ、わつしぢやねえのですよ、だが、吉岡さんはいけないな、あんなにお八重さんに可愛がられてて、そんなことをするなんて、それや何處の美少年です、」

「それや、龍陽ぢやよ、」

「何處です、」

「そいつは云はれない、お八重の方に知れてみよ、たいへんなことになるぞ、」

「わつしや、お八重さんと喧嘩してるから、しやべれやしませんよ、」

「いかん、そいつはいかん、そいつは聞くな、」

「下村さんは意地がわるいや、」

龍吉は其のまま起つて食客室を出た。龍吉は其のうへ強ひては下村が憂心してますます云はなくなるし、また下村が知つてゐることなら他のものも知つてゐるだらうから、其のうちに何人か他のものから聞きださうと思つたがためであつた。山脇と岡本はまだ漢文と蟹行文字とで議論しあつてゐた。

龍吉は己の室のほうへ往つた。ある意において夫人よりも廣子よりも權力のあるお八重から秘密な命令を受けて、めうに親しい眼を見せられた龍吉は、何とはなしに自由な氣もちになつてゐた。己達の室には門番の孫助が内職の楊子を削つてゐた。孫助は枠の大きな眼鏡を見せた。

「龍公か、今まで何處にゐたのだ、」

「奥にゐたのだよ、なにか用があつたかね、」

「べつに用もなかつたが、さつきからゐねえものだから、また何處かへ往つて油をうつてるぢやないかと思つてたが、それぢや奥で女の子に可愛がられてたのか、壯佼は、德だな、」

「冗談ぢやあねえ、さつきお庭へ往つてたら婢さんが猫子を突いてて、猫を梅の木へ引つかけたから、それを取つてやると、今度はお八重のあまが、呼びに來て用を云ひつかつたのだ、」

「用つてどんな用だい、此の孫助様のお給金をあげてくれるとでも云つたのかい、もすこしなけれや、孫や嫁が可哀さうぢや、」
「また、おかぶがはじまつたい、給金は減らしても、あげつこはねえのだから、金が欲しけれや、横濱へ出て、夷人對手の商賣でもするこつた、」
「ちがえねえ、金が欲しけれや、横濱ぢや、汝も壯い身そらで、こんな處でまごまごしてるよれや、横濱へ往つたらどうだ、」
龍吉は龍陽のことを聞いてみたくなつた。
「横濱も好いが、孫さん、ひとつ聞きたいことがあるが、汝い龍陽つてものを知つてるかい、」
「かげま、か、げま、」と、孫助はちよと考へて、「ああ、彼の龍陽茶坊の龍陽のことか、」
「さうだよ、其の龍陽だよ、」
「なら知つてるさ、上野のお坊さんや、此處の增上寺のお坊さんを對手にしたものさ、」
「ぢや知つてるのだね、」
「いや、ほんたうは知らねえ、聞いて知つてゐるのだ、湯島天神あたりに、そんなのがあると云つて聞かされたが、乃公は知らなかつたなあ、どうもそれや、昔の話らしいな、」
「さうかなあ、そんぢや今はないだらうか、」
「あるかもわからないが、乃公は知らねえ、」
しかし、ないのに、吉岡が通ふわけもなかつた。龍吉は考へた。

「さうかなあ、」
「何人か、熊八あたりが知つてやしねえか、あいつは岡場所のことが、ばかに精しいから、」
「さうかなあ、熊八が精しいかなあ、」
熊八は外山家のお抱への籠舁の一人であつた。龍吉は上へあがつて帶を締めなほしながら熊八のことを考へたが、直ぐ聞きに往かうと云ふ氣はしなかつた。龍吉は土間へおりて草履を穿いた。
「おい、これから龍陽茶屋へでも往かうと云ふ寸法かな、」
龍吉は揮りかへつて笑つた。
「まあ、そんなものだな、」
「壯いうちは、すこしはなんしてもいいが、お瑯をしくじらないやうにな、此の不景氣ぢや、何處へ往つても飯の喫へる處はねえからな、」
「大丈夫だよ、御用で出かけるのだから、」
「さうか、御用か、御用なら大威張ぢや、ぶらぶら往つて、かへりにあんころでも喫つて來な、」
龍吉は外へ出たが何處へ往かうと云ふ的もないので足の向くままに歩いた。曇日の夕暮の街路は往復の人の足並がゆるやかであつた。

四六

龍吉はいつのまにか日かげ町の街路へ出て元の遠山金四郎邸の前を歩いてゐた。

「おい、羽をのしてるな、」
龍吉は耳なれた聲を聞いて顔をあげた。外山家の隣になつた松本と云ふ旗本の家の小厮の竹松であつた。
「ああ、竹さんか、汝ものしてるぢやねえか、どうしたい、今日は、」
「今日は午から暇をもらつて、芝口の假父とこへ往つてたところだ、汝は、どうだ、」
「乃公も暇だから、出て來たところだ、」
「ちや、ちようどいいや、つきあはうか、」
龍吉も何處かへ往きたかつた。
「飯を喫つてもいいな、いい處があるのか、」
「あるとも、神明へ往きや、飯店でも、鮓店でも、おでん店でも、また楊弓店でも、待合茶坊でも、なんでもあるわな、」
待合茶坊があるなら龍陽茶坊はないだらうかと思つた。龍吉は神明へ是非往つてみたくなつた。
「汝べ、知つてる處があるのか、」
「あるさ、面白い爺さんのゐるおでん店があるのだ、往かうか、」
「往かう、乃公がすこし杖頭錢を持つてるのだ、」
「乃公も、假父から二分もらつてるのだ、」
二人は伴れだつて神明の方へ往つた。そして、日かげ町の街路から神明前へかからうとする三島町の角から、大横町と云はれてゐる廣い横町へ折れて、それから三島町の裏街路へ出た。其處が神明宮の横手で、楊弓店があり、

飲食店があり、待合茶坊があつた。竹松は其處のとある路地の角になつたおでん店へ龍吉を伴れて往つた。
店にはもう鶯が黙いてゐた。二三人の客が土間の縁臺へ腰をかけておでんをつつついてゐた。湯氣のもやもやと立つおでんの大鍋を据ゑた臺の前方には、向ふ鉢巻をした叟が控へ、土間の方には櫛巻にした叟と年が二十も違ふやうに見える小柄なお嬶さんがゐて客の註文を聞いてゐた。龍吉と竹松も縁臺の一方へ腰をかけて、おでんを喫ひ酒を飲んでゐたが、其のうちに竹松は龍吉の杯の空になつてゐるのを見つけたので酌をした。
「龍さん、汝とこの大將は、壯いのが好きだと云ふぢやあねえか、」
「好きだらうよ、女の子を數多抱へとくからな、」龍吉は笑つてから「汝とこの大將は、どうだな、」
「乃公の方は、家ではばかにかたいが、薪橋から柳橋あたりでは、よろしくやるさうだよ、」
「さうかなあ、」と云つたが、龍吉はそんなことよりも龍陽茶坊のことが聞きたかつた。「おい、竹さん、それよか、汝べ、龍陽茶坊のことを知つてるかい、」
「かげまぢやや、かげまぢやや、なあ、」竹松は理が判らないやうな顔をしたが、直ぐおでん臺の前方を見て、「爺さん、龍陽茶坊つて、なんだい、」
叟の睫毛の白い茶色の眼が笑つた。
「龍陽茶坊と云や、御殿女中や後家樣の往く、お茶坊でさあね、」
「ちや、男の歌妓かい、」
「さうですよ、壯い妹な、丹治郎のやうな男のゐるお茶坊でさあね、」
「爺さんも往つたことがあるかい、」

「わつしは、往つたことあ、ありませんがね、」と叟は驚辛醉で笑つて「、、、、は、いやだからね、」
「何處にあるのだ、そんなお茶坊が、」
「此の、神明には增上寺のお坊さんをお華客にしたお茶坊があつたさうですが、水野さんの御改革で、御法度になつたつて云ひまさあね、しかし、欲しけれや龍陽はありまつせ、お世話しませうかね、」
「さうだなあ、」と竹松は笑つて龍吉を見て、「龍さん、どうだ、汝が云ひだしたから汝がいるだらう、かつてみな、」
龍吉は今でもあると云ふ龍陽のゐる處が聞きたかつた。
「それや、何處にゐるだらう、」
叟は笑つた。
「龍陽かね、それや此のあたりの待合茶坊へあがれや、呼んでくれまさあね、」
「ほんたうかね、爺さん、」
「うそか、ほんたうか、これから往つてみなさるがいいや、」
それでは吉岡も此の土地へ來るかも判らない、龍吉は涙とした夢のやうなものに目鼻がついたやうに思つた。
「さうかね、そいつあ、ありがてへ、」
竹松の上唇のまくれあがつてゐる口が動いた。
「おい、汝へ、其の龍陽つてえのを買ふ氣かい、」
「買やしねえよ、」
「だつて、そいつああありがてへなんて、よろこんでるぢやねえか、」

「なに、龍陽つてことがわからないから、聞いて見たのぢやねえか、」
「ぢや、學問しようてえのだな、わるい考へだ、」
「まあ、さう云ふなよ、」と云つて龍吉は竹松の盃に酒を注いでから「おい、何か喫はうぢやねえか、蕈蒻はどうだな、」
「いいとも、蕈蒻、蕈蒻を喫はう、」竹松はお嫣さんの方を見て「おい、蕈蒻をくれないか、二つ、」
お嫣さんはそれをうけた。
「はい、蕈蒻をお二人まへ、」
すると叟はそれに應じた。
「よし、來た、蕈蒻を二人まへ、と、」叟は大鍋の湯氣の中へ赧顏を突つこむやうにして蕈蒻を取り、それぞれ皐を拔いて二つの皿へ盛つて、「ほい、」
と云つてさし出すのをお嫣さんが、
「あいよ、」と執つて二人の前へ持つて來た。「お待ちどほさま、」
龍吉と竹松は其の蕈蒻をふうふう吹きながら喫つてゐたが、さきに喫つてしまつた龍吉が云つた。
「おい、竹さん、酒はどうだ、」
竹松はまだ喫つてゐた。
「乃公は、もういいが、汝はどうだ、汝はいけるぢやねえか、」
「もういい、そんぢや假はどうだ、」